

《翻 訳》

ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタール』(1609年,  
エヴォラ刊)を初版本テキストから訳注する試み  
——トロント大学トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー所蔵本に  
もとづく再検討——

Uma nova tentativa da tradução integral japonesa baseada na  
*editio princeps da Ethiopia Oriental* (Évora, 1609), da autoria do frei  
dominicano João dos Santos, reservada na Thomas Fisher Rare  
Book Library, University of Toronto.

日 埜 博 司 (HINO Hiroshi)

ポルトガル人ドミニコ会士ジョアン・ドス・サントス(Frei João dos Santos, O.P.)が執筆し1609年にエ  
ーヴォラで刊行された『エティオピア・オリエンタール』(*Ethiopia Oriental*)という大著がある。サント  
スは16世紀末から17世紀初めにかけて永年にわたり、東南アフリカの各地と、ゴアを中心とす  
るエスタード・ダ・インディア(東洋におけるポルトガル勢力圏)でカトリックの布教に従事した。

リスボアにあるポルトガル国立リスボア図書館(Biblioteca Nacional de Lisboa. 以下BNLと呼ぶ)では、  
所蔵する古文書のデジタル化が早くから進められている。むろんポルトガルが誇る大航海時  
代関連の貴重な古典籍もその例外ではなく、それらの大半はBNLのデジタルアーカイブス  
で閲覧することが可能である。無料であるうえ煩瑣な<sup>はんき</sup>手続きも一切ない。

ジョアン・ドス・サントス『エティオピア・オリエンタール』第一部は、16世紀末東南アフリカの  
諸地域を包括的に扱うエスノロジーでありエスノグラフィーである。それぞれ民族誌および民  
俗誌と訳すのであろうが、サントスの論ずるテーマは、歴史、人文、地理、風俗、習慣、民俗、  
自然、動物、植物、鉱物、宗教、迷信、等々、はなはだ広範であり、現地を見聞したサントスな  
らではの知見やエピソードも随所にちりばめられ、まことに優れた博物誌の相貌というか特色  
を帯びる著述、と評することができる。別の地域を布教したドミニコ会同僚の著述——たとえ  
ば16世紀半ばの明帝国に到達し、短期間ながら華南の広州でカトリック布教を行なう経験を  
積んだガスパール・ダ・クルスのシナ総論というべき『中国誌』——から幾つかのくだりが引用  
され、種々の「異なるもの」を比較文化論の手法で考察しようとする視点が持ち込まれてい  
ることも、訳者の興味をそそる。

浩瀚な原著であるが、訳者はまず16世紀末東南アフリカのもろもろの地方の事物を扱う

PRIMEIRA PARTE(第一部)の完訳をめざす。

この『エチオピア・オリエンタール』であるが、不可解なことにBNLの所蔵するところとなっておらず、ゆえにやむなく訳者は下記の校訂本に頼ってその読み込みを進めてきた。

Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, Introdução de Manuel Lobato, Notas de Manuel Lobato & Eduardo Medeiros, Fixação do texto por Maria do Carmo Guerreiro Vieira (coord.), Célia Nunes Carvalho & Maria Amélia Rodrigues Coelho, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, 759 ps. (CNCDP 版と呼ぶ)

この校訂本は有益かつ詳細な解説に加え、テキスト全篇にわたり重厚な脚注が施され、和訳を進めるに際し、疑いなく十全の信頼を託すに値するもの。ただ語彙に関しては、サントスの16世紀風の綴りを全面的に維持しているわけではなく、文法についても、ときにはその概念の史的変遷を尊重した結果であろう、原著で直説法(叙実法)の用いられている箇所が現代ポルトガル語の考え方に即して接続法(叙想法)へ改変されていたりもする。

訳者は『エチオピア・オリエンタール』のおもしろさに魅了されてよりこの方、初版本にアクセスしたいと思いつつ、ポルトガル国内でそれが叶わぬもどかしさを募らせてきたのだが、つい最近、カナダはオンタリオ州の名門トロント大学(University of Toronto)のトーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー(The Thomas Fisher Rare Book Library)に、『エチオピア・オリエンタール』1609年刊初版本(*editio princeps*)が所蔵され、しかもそれがトロント大学のスポンサーシップによって全巻デジタル化されているとの情報に接した。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み



トロント大学トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリー蔵『エチオピア・オリエンタル』初版本  
(editio princeps) 扉。扉の文言を和訳ともども下に示す

ETHIOPIA ORIENTAL,  
E VARIA HISTORIA DE COVSAS  
notaucis do Oriente.  
COMPOSTA POLLO PADRE FR. IOAÕ  
dos Santos da Ordem dos Pregadores,  
natural da Cidade de Euora.  
DIRIGIDA AO EXCELLENTISSIMO SENHOR  
Dom Duarte Marques de Frechilla & Malagon, &c.  
Impressa no Conuento de S. Domingos de Euora.  
Com licença do S. Officio & Ordinario  
& Priuilegio Real. Anno 1609.  
POR MANOEL DE LIRA IMPRESSOR.

エティオピア・オリエンタールおよび東方の注目すべき事物に関する種々の物語。説教者の修道会〔ドミニコ会〕に属しエーヴォラに生まれたるパードレ・フレイ・ジョアン・ドス・サントス、これを編纂す。この物語をいとも高邁なる君にして、フレチーリャおよびマラゴーン等の侯爵ドン・ドゥアルテへ献呈す。エーヴォラの聖ドミンゴス修道院において印刷。宗教裁判所および上長の允許、さらに王室より賜わりたる特権をもって。1609年。

印刷者マノエル・デ・リラによりて

トーマス・フィッシャー・レア・ブック・ライブラリーは、ポルトガル語で印刷され上梓された貴重書を921点含む。特筆すべきことに、その冊数は、英語、イタリア語、フランス語文献のそれに次ぎ、イスパニア語のそれを遙かに凌ぐ。ライブラリーに含まれる当該典籍のタイトルを訳者はざっと一覧したのだが、トーマス・フィッシャーは、特に大航海時代に上梓されたポルトガル語文献に焦点を絞った古書蒐集を行なったわけではないようであった。訳者は寡聞にしてこの人物についても、彼のコレクションがトロント大学へ寄贈された経緯についても、承知しない。書誌的エピソードとしては興味深いテーマであろうから、他日明らかにすることを期す。

トロント大学の見識に満腔の敬意を表しつつ、今回は、『エティオピア・オリエンタール』1609年刊初版本のテキスト影印を掲げるとともにそのテキストを改めて仔細に読み込み、第一部第一巻のソファアラ関連の数章、同第三巻のモサンビーク関連の数章を新たに和訳し、訳者なりの注記を施してみる。和訳の直前にはCNCDP版のテキストも掲げる。

ソファアラもモサンビークも、アフリカ南東部、現モサンビーク共和国(República de Moçambique)の領土に含まれる。その建設および発展の由来が大航海時代にさかのぼるのは、言うまでも

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

ない。

港市としてのソファアラ(現ノーヴァ・ソファアラ)は、ドン・マヌエル王の命を受けたペロ・デ・アナ  
イア(ペロ・ダナイア)により1505年頃、建設される。サントスの言う「ソファアラの河」はブジ河の  
ことであるが、港市ソファアラのみならず、ブジ河をやや上流へ遡った地方一帯に関する諸  
事を、サントスは第一巻にまとめて記述する。

第三巻はもっぱらモサンビークに関する諸事を扱う。モサンビークは元来、ソファアラをず  
っと北上したところにある小さな島のこと。現在モサンビーク島は大陸と道路で結ばれ、島全  
体がユネスコ世界遺産に指定されている。ポルトガル=インド間の海路往来ルート(カレイラ・ダ  
インディア)が確立し、ポルトガル王室が船隊を定期的にゴアへ派遣するようになると、この島は  
カレイラ・ダ・インディアの中継・補給港としての地位を確立する(したがって天正遣欧少年使節もモサ  
ンビーク島に立ち寄っている)。

サントスのテキストに頻出する *Cafres* はすべてカフル人と訳す。サントスは極度の人種偏見  
を持つことなくみずから出逢った膚の黒い人々をこう呼んでいるように愚考する。が、ポルトガ  
ル語の電子辞書 *Dicionário Priberam da Língua Portuguesa* (以下、*DPLP* と呼ぶ)によると、*cafre* は  
アラビア語の *kāfir* に由来するとあり、その原義は *ingrato*, *renegado*, *infiel*, *incrédulo*, *não*  
*muçulmano* (ムスリムにあらず、恩知らずで、背教者で、誠意ない、不信仰の)だという。現在は *depreciativo*  
(侮蔑的)な語彙として *Pessoa negra* (膚の黒い人) や *Pessoa rude* (粗野な人) を意味するというから、安  
易に口にすべき語彙ではなさそうだ。拙訳では *Cafres* を日本語で説明するようなことは避け、  
上述の原義を心得たうえで「カフル人」という語彙を中立的に用いる。

初版本は「序」「献辞」「印刷允可状」など劈頭の一部を除き、全ページ左右二段組みで印  
刷され、ところどころに内容を示す簡潔な傍注が見える。傍注のないページもある。ページの  
ナンブルはアラビア数字で片面に印刷されているだけであり、印刷されているほうにはたとえ  
ば p.22 と、ナンブルが印刷されていないその裏面については p.22v と、それぞれ記す。

傍注の原文および和訳を影印の下に記し、それらを拙訳中に適宜組み込む。初版本の綴  
りを忠実に写すから、現代ポルトガル語の綴りとは異なる場合がある。段落についても、ほぼ  
忠実に初版本に従うが、近接した箇所<sup>へきとう</sup>に傍注が附されていて、それぞれがある程度独立した  
内容を有すると思われる場合、原文でも和訳でも、内容の変わり目で改行を施す。

初版本のパラグラフ冒頭には必ず ¶ が附され、校訂本もその段落分けを忠実に守ってい  
る。(ただし章の書き出しに見える語彙について、初版本では ¶ を附すかわり、語彙の一字目を大きな飾り文字にし  
てある。) CNCDP 版には ¶ は省かれているが、この訳稿では校訂本テキストのパラグラフ冒頭  
に、私意をもって ¶ を附す。上述の理由で訳者が改行を施したときは、CNCDP 版テキストに  
も和訳にも、パラグラフ冒頭に ¶ は附さない。

## CAPÍTULO XV (PRIMEIRA PARTE, LIVRO PRIMEIRO)

### **Dos casamentos, partos e mortalhas destes cafres.**

第 15 章(第一部第一卷) カフル人たちの結婚, 出産, および埋葬について

#### **Os Cafres comprão as molheres, & podẽ engeitalas.**

¶ Os cafres destas terras compram as mulheres com que casam a seus pais ou mães, e por elas lhes dão vacas, panos, contas, ou enxadas, cada um segundo sua possibilidade, e segundo a mulher é. Pola qual razão os cafres que têm muitas filhas pera casar, são ricos, e vivem mui contentes com elas, porque têm muito que vender. Se algum cafre vive descontente de sua mulher pode-a tornar a quem lha vendeu, mas fica perdendo todo o preço que deu por ela quando a comprou, e o pai ou a mãe é obrigado a tomar a filha enjeitada, e depois de a ter em seu poder fica descasada do marido que a repudiou, e o pai a pode tornar a vender, e casar com outro marido. A mulher não se pode apartar do marido, nem deixá-lo, nem enjeitá-lo, porque em certo modo fica como sua cativa, que lhe custou seu dinheiro.

#### **Como casaõ.**

Quando estes cafres casam não têm mais cerimónias, que concertarem-se as partes, e o dia do casamento fazerem grandes bailos, festas, e jogos, em que se acham presentes quantos moradores há naquele lugar onde se faz o casamento; e cada um dos convidados traz sua oferta de milho, ou farinha, inhames, grãos, feijões, e o mais que cada um pode, ou quer trazer, e tudo isto dão aos noivos pera ajuda dos gastos daquele dia, e a mor parte destas ofertas é gasta nestas bodas em comer, e beber.

#### **Os Cafres tem muitas molheres.**

Todo o cafre que quiser ter duas mulheres, o poder fazer, se tem posse pera isso, mas são poucos os que podem, e assim não têm mais de uma, salvo os grandes, e senhores do reino, porque esses têm muitas, entre as quais uma só é mulher grande, principal, e mais estimada, ficando as outras como mancebas.

#### **カフル人は妻を買う。そして放逐できる**

この地方のカフル人たちは、結婚の相手とする妻を、その両親から買う。そしてその妻と引き換えに、妻の両親には、雌牛や反物や数珠や斧おのを与える。それぞれがその身上に応じて、そしてもらう妻[の価値]に応じてそのようにする。それゆえ、結婚させうる娘のたくさんいるカフル人こそが裕福であり、多くの娘を抱えて至極満足に暮らしている。売るべき多く[の財産]

を持っているからである。もしカフル人が妻との生活に満足できなくなれば、この妻をもとの売り手へ戻すことができる。ただし妻を買い取ったときこれと引き換えに差し出した対価は、すべて失う。[妻を売った]父もしくは母は、返されてきた娘を受け入れる義務を負う。そしてその娘をみずからの支配下に置いたのち、これを離縁した夫との婚姻が解消される。父はこの娘を再度売り払ったり、他の男と結婚させたりできる。妻から夫に対し離縁を申し出ることはいないし、夫を放置したり追い払ったりすることもできない。妻の地位は、ある種夫の奴隷のようなものであり、妻にはかねという元手がかかっている、というのが夫の言い分だ。

### カフル人はどのように結婚するか

カフル人が結婚するときに行なう儀式らしい儀式は、双方が取り決めに交わし合い、結婚の当日、盛大な舞踏やお祭り騒ぎやら遊戯を行なうことだけである。その場には、結婚の儀式が執り行なわれるその土地にいる、ありとあらゆる住人が顔を出す。招待を受けた人々は、ひとりひとり贈り物を持参する。贈り物とは、モロコシ<sup>1</sup>とか小麦粉、タロイモや種々の穀物や豆類、そしておのおのに持参可能な、あるいは持参したいと望むその他のものである。以上すべてを花婿に差し出す。その日に費やす経費の助けにして欲しいという気持ちからである。実際これらの贈り物の大部分は、この日の婚宴で食べるもの飲むものとして費やされてしまう。

### カフル人は多くの妻を抱える

ふたりの妻を持ちたいと思うカフル人は、誰もそうすることができる。ただしそうするための資力があれば、だ。しかしそのようなことがやれる者はごく僅かである。というわけで、通常のカフル人は、ひとりを超える妻を持たない。ただし王国の大神貴頭といった連中は例外であり、彼らは多くの妻を持つことができる。多くの妻の中でただひとりが(大きな)妻、主要なる妻、そして最も尊重される妻である。その他の妻はと言えば、それは情婦か妾のようなものだ。

### As Cafras parê no mato.

¶ Algũas cafras há nestas terras tão agrestes, como as feras, e silvestres animais, o que mostram claramente em seus partos, porque muitas delas quando lhe dão as dores de parir vão-se aos matos, e neles andam passeando de ãa parte pera outra, recebendo o cheiro do mato silvestre, com que parem mais depressa, como se foram cabras, e depois que parem se vão às lagoas, ou rio,

---

<sup>1</sup> 原語 milho. サントスのテキストで milho とある場合、トウモロコシを指さず、ほぼ一貫して、アフリカ原産のソルガムを指すと思われる。漢語の高梁(コウリヤン)である。

e nele se lavam, e os filhos que pariram, e dali se tornam pera suas casas com eles nos braços, sem se apertarem, porque não têm com que o possam fazer, nem costumam, nem menos se deitam em cama, porque a não têm pera si, nem pera os tenros filhos, mais que ãa esteira, ou ãa pouca de palha, onde quando muito se deitam o dia que pariram, salvo se ficam doentes, como muitas vezes lhe acontece.

### カフル女は森の中で出産する

このいとも草深い土地には、まるで野獣か、森林に住む獣同然のカフル女がいる。獣同然であることがはっきりと示されるのは出産に際して、だ。彼女たちの多くは陣痛がやってくると、森へ出かけてゆき、その中をあちらからこちらへ歩き廻る。奥深い森の香りを身体に受け止め、そうすることによって出産をより速やかにするのだ。そのありさまはまるで雌の山羊さながらだ。出産を終えると、湖もしくは川へ出向き、そこでみずからの身体と、産み落とした子のそれを清める。そこから自分の家へ戻るが、そのときはわが子を両の腕に抱いている。しかもわが子を締めつけることなく。締めつけることなくというのは、それを可能にするものを彼女らは持たないし、持つ習慣もないからだ。また寝床に横たわることさえしない。寝床など自分のためはおろか、幼いわが子のためにさえ持っていない。持っているのは、一枚のむしろ筵か僅かばかりのわら藁であり、病気になったときは別として——これはかなりよくあることだが——、そこに横たわるのは、せいぜい分娩を終えた当日にすぎない。

### Enterramentos dos Cafres. / Agouros dos Cafres.

Quando algum cafre morre, não somente o choram seus parentes e amigos, mas também os moradores do lugar, ou aldeia em que morava, e o pranto dura todo aquele dia em que morreu, e mesmo dia o levam a enterrar em cima da esteira, ou catre em que morreu; e se o defunto tinha algum pano pera sua mortalha, vai amortalhado nele, e se não vai nu como andava sendo vivo. Fazem-lhe a cova dentro no mato, onde o metem quasi assentado, e junto dele põem ãa panela de água, e um pouco de milho, o qual dizem que é pera o defunto comer, e beber naquele caminho que faz pera a outra vida, e sem mais cerimónias o cobrem de terra, e sobre a cova lhe põem a esteira, ou o catre em que o levaram a enterrar, onde se gastam, e consomem com o tempo, sem mais se servirem deles, ainda que sejam novos, porque têm grande agouro em tocar na esteira, ou catre, em que alguém morre, tendo pera si que daquele tacto se lhe pode pegar a morte, ou algum mal.

### カフル人の埋葬/カフル人の縁起かつぎ

誰であれカフル人が死ぬと、その親戚や友人はその死を悼んで泣く。そればかりか、死ん



だ者が生前住んでいた場所もしくは部落の住人たちもまた、そのようにする。悲しみは死の当日一日中、継続する。同じ日に人々は、死者がそこで亡くなった筵もしくは寝台の上に遺骸を横たえ、埋葬に出す。もし死者がみずからの遺骸を包むための布を有しているならその布にくるみ、そうでないなら、生前元気でいたときのように裸のまま葬る。人々は死人のため密林の中に穴を掘る。そしてその穴の中に、死骸をほとんど座らせるような格好で据える。死骸のかたわらには水を入れた鍋をひとつ、それに少量のモロコシを置く。人々が言うところによると、その水やモロコシは、死人があの世界へ向かう道ゆきのあいだ、食べたり飲んだりするためのものだ、と。それ以上の儀式は何もなく、人々は死骸を土で覆う。そしてその穴の上から筵を掛ける。あるいは埋葬に出すとき遺骸を運んできた寝台を置く。そこで遺骸は、時とともに朽ち果てる。たとえ故人が若年であっても、これ以上の供養は行なわない。なぜなら彼らは、誰かがそこで亡くなった筵あるいは寝台に手を触れることに、強い迷信を持っているからだ。そうした接触から死や何らかの災厄が感染するかもしれない、と思い込んでいるのだ。

#### **Modo que os Cafres tem em chorar seus defūtos.**

¶ Os parentes, e amigos choram o defunto oito dias, pola manhã, ao meio-dia, e ao sol-posto, uma hora de cada vez, pouco mais ou menos; o qual pranto fazem bailando, e cantando em voz alta muitas lamentações, e prosas lastimosas feitas a seu modo, todos juntos em pé postos em roda, e de quando em quando entra um dos circunstantes no meio da roda, e dá ãa volta, ou duas, e logo se torna a seu lugar; e depois que acabam este pranto, assentam-se todos em roda, e comem, e bebem pola alma do defunto que choraram. Isto concluído, vai-se cada um pera sua casa. Pera este convite contribuem os parentes mais chegados do defunto.

#### **カフル人が死者を泣いて悼む際にとる方法**

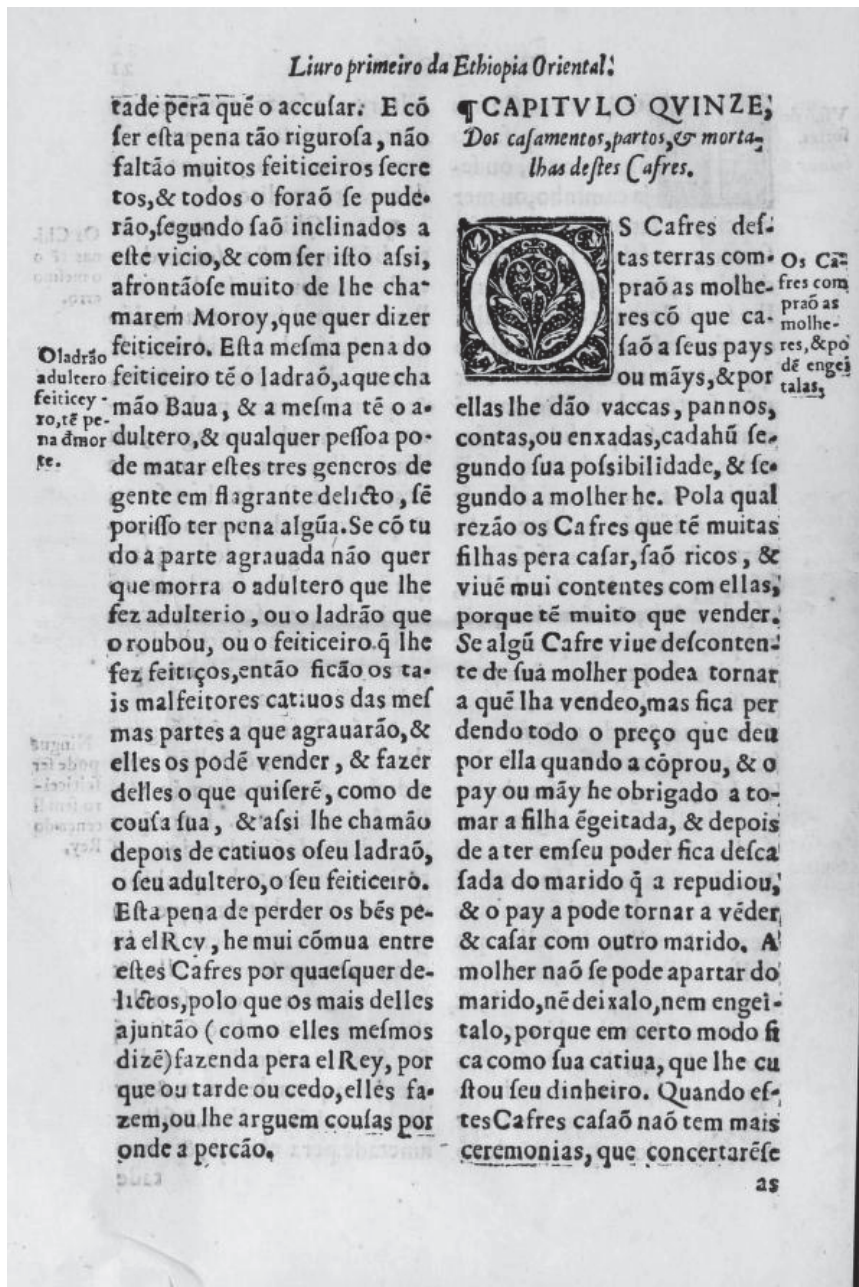
親戚や友人は死者のため、八日間を泣いて過ごす。朝方、正午、夕暮れに、それぞれおおよそ一時間ずつ。その悲しみを彼らは踊りで表現する。大きな声でかすかすの悲しみの歌や、彼らの様式で作られた哀愁に満ちた散文詩を歌うのだ。彼らは皆が一緒に円形に並び立ち、ときおり参加者のひとりが円形の真ん中に入る。そして一度か二度でめぐり返りをしては、さっと自分の場所へ戻る。この悲しみの儀式を終えた後、全員は車座に腰をおろす。そしてみずからが涙を流してやった死者の魂のため、食べかつ飲む。以上にけりをつけると、ひとりまたひとりと、それぞれの家へ帰ってゆく。この招待の儀式には死者に縁の深い人であればあるほど、より深い関わり方をする。

#### **Deshumanidade dos Cafres. / Deixão morrer os enfermos ao desemparo.**

¶ Todos estes cafres são desumanos, e cruéis uns pera os outros. Se algum deles adoecer, e não tem mulher, ou parentes, e amigos, que lhe queiram muito, e curem dele, ordinariamente morre ao desamparo, porque nenhum outro cafre há que se doa dele, nem lhe dê cousa alguma de comer, ainda que o veja estar perecendo, e morrendo de fome, e necessidade; da qual doença comumente morrem todos, por serem mui pobres, e miseráveis, e avaros de qualquer cousa de comer, ou beber que tenham; e quando muito fazem a estes desamparados, é levá-los algum seu amigo ao mato, e deitá-los ao pé de uma árvore, ou mouta, pondo junto deles ãa panela de água, e um pouco de milho, pera que comam, e bebam, se puderem, e ali os deixam até que acabam de morrer, sem mais terem cuidado deles; e ainda que algum cafre passe junto deles, e os veja lamentar, ou gemer, não se dói deles pera os remediar. Alguns cafres há que têm esta desumanidade tanto por natureza, que em si mesmos executam sua crueldade, porque em se sentindo mal, e parecendo-lhe que já estão no último da vida, mandam-se levar ao mato, e postos ao pé de uma mouta, se deixam morrer como brutos animais.

#### カフル人の無慈悲/カフル人は病人を保護せず死ぬに任せる

このカフル人というのは、誰しも相互に不人情であり、かつ冷酷である。誰かが病気になり、その者に彼をいつくしんでやる、看護の労をとってやる妻なり親戚なり友人がいなければ、通常その者は、誰にも看取られることなく死を迎える。というのは、彼のことを悼んだり食べものを与えたりするカフル人など、ほかには誰もいないからだ。たとえその者が瀕死の状態であると見ても、飢えや窮迫で死の寸前であると認めても、事情は変わらない。病気に罹ると通常、皆、死んでしまう。自分自身が貧しく、惨めな暮らしに喘いでいるのに、手にした食べ物や飲み物には、とことん執着せねばならぬのに、どうして他人に構ってられようか、というわけだ。こうして見捨てられた者へせいぜいしてやること、それは、その友人が彼を森へ連れ出し、彼を木もしくは背の低い植物が密生しているところに放置し、傍らに水を入れた鍋一個と、少量のモロコシを置くこと、それだけだ。可能ならの話だが、この者が食べたり飲んだりするためである。同人は死んでしまうまでそこに放置しておかれる。それ以外の配慮はまったくない。カフル人の誰かが彼のそばを通ったとしても、そして、彼が悲しみの声を上げ呻くのを目撃しても、これに心を痛め癒してやろうとする者など、いない。一部のカフル人はこうした不人情をまったく自然なことと見なしているため、ほかならぬ自分自身に対しても、このような残虐性を発揮する。すなわち病状が悪化し、もはや人生の終わりにさしかかったと自覚したら、人に命じて自分自身を森へ連れてゆかせ、背の低い植物が繁茂しているところに置き捨ててもらう。そうしてまるで野獣のように、自分自身を死に至らしめる。



p.21v. 右段。Os Cafres comprão as molheres, & podẽ engeitalas. [カフル人は妻を買う。そして放逐できる]

Como  
casaõ.

as partes, & o dia do casamêto  
fazerê grâdes bailos, festas, &  
jogos, em q̄ se achão presentes  
quantos moradores há naquel  
le lugar onde se faz o casamen  
to: & cadahũ dos conuidados  
traz sua offerta de milho, ou fa  
rinha, inhames, graõs, feijoës,  
& o mais que cadahũ pôde, ou  
quer trazer, & tudo isto dão a  
os noiuos pera ajuda dos gâs  
tos daquelle dia, & a môr. par  
te destas offerta se gasta nestas  
vodas em comer & beber.

Os Cafres  
tem muitas  
molheres.

Todo o Cafre que quizer ter  
duas molheres, o pode fazer,  
se tem posse pera isso, mas são  
poucos os q̄ podê, & assi não  
tem mais de hũa, saluo os gran  
des, & senhores do Reino, porq̄  
esses tê muitas, entre as quaes  
hũa sô he molher grande, prin  
cipal, & mais estimada, fican  
do as outras como mancebas.

As Cafras  
parê no mato

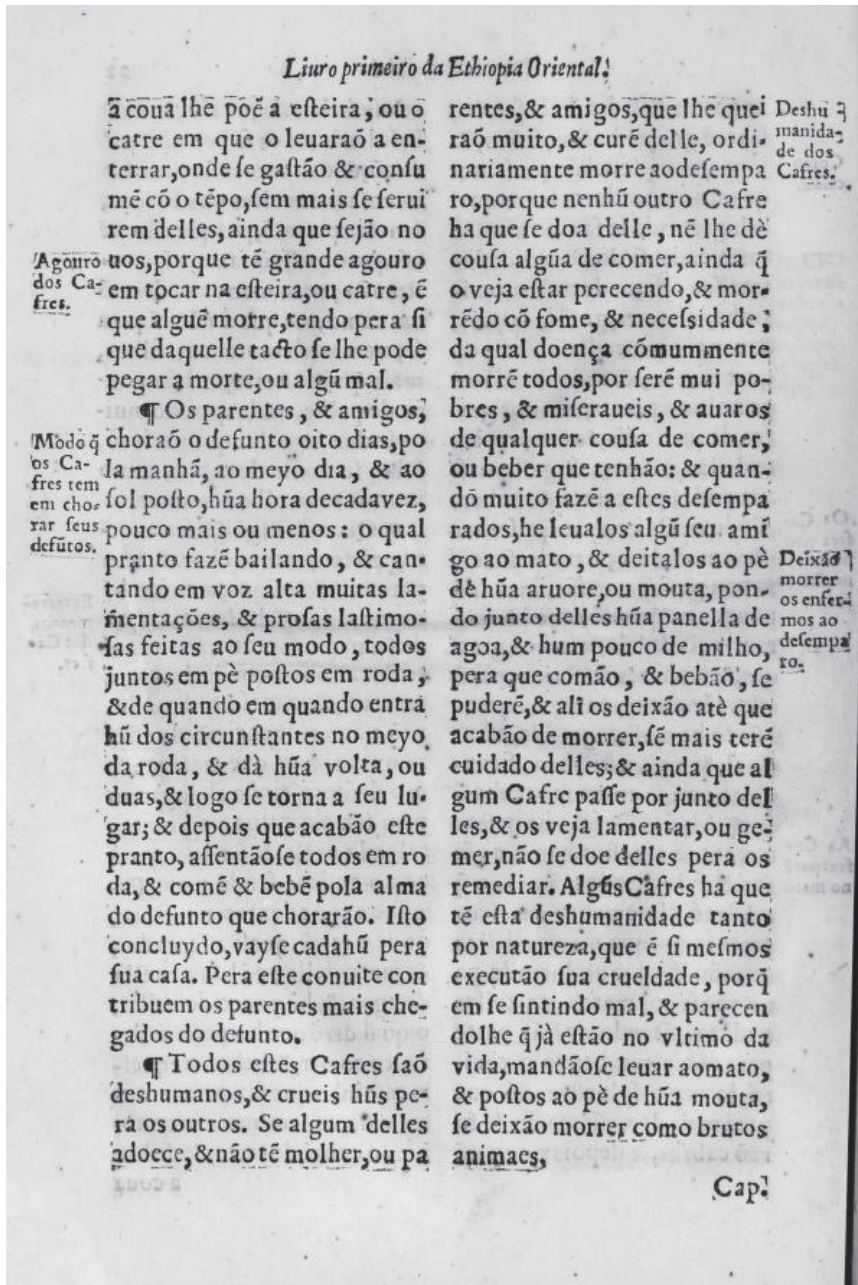
¶ Algũas Cafras ha nestas  
terras taõ agrestes, como as fe  
ras, & syluestres animaes, o q̄  
môstraõ claramente em seus  
partos, porque muitas dellas  
quando lhe dão as dores de pa  
rir vãose aos matos, & nelles  
andão passeando de hũa parte  
pera outra, recebendo o chei  
ro do mato syluestre, cõ que  
parê mais depreissa, como se fo  
raõ cabras, & depois que parê

vãose às lagoãs, ou rio, & nel  
le se lauão, & os filhos que pa  
rirão, & dali se tornão pera fu  
as casas com elles nos braços,  
sem se apertarê, porque não tê  
cõ que o possaõ fazer, né o co  
stumão, nem menos se deitaõ  
em cama, porque a não tê pera  
si, nem pera os tenros filhos,  
mais q̄ hũa esteira, ou hũa pou  
ca de palha, onde quando mui  
to se deitão o dia que pariraõ,  
saluo se ficão doentes, como  
muitas vezes lhe acontece.

¶ Quando algũ Cafre mor  
re, não fomente o choraõ seus  
parentes & amigos, mas també  
os moradores do lugar, ou al  
deã em que moraua, & o pran  
to dura todo aquelle dia em q̄  
morreo, & o mesmo dia o le  
uaõ a enteriar encima da estei  
ra, ou catre em que morreo: &  
se o defunto tinha algũ panno  
pera sua mortalha, vay amor  
talhado nelle, & senão vay nũ  
como andaua sendo viuo. Faz  
zêlhe a coua dentro no mato,  
onde o metê quasi assentado,  
& junto d'elle poê hũa panella  
de agoa, & hũ pouco de milho,  
o qual dizê que he pera o de  
funto comer, & beber naquel  
le caminho que faz pera a ou  
tra vida, & sem mais ceremo  
nias o cobrê de terra, & sobre  
a coua

Enterra  
mentos  
dos Cafres.

p.22. 左段。Como casaõ。[カフル人はどのように結婚するか]/ Os Cafres tem muitas molheres。[カフル人は多くの妻を抱える]/ As Cafras parê no mato。[カフル女は森の中で出産する]  
右段。Enterramentos dos Cafres。[カフル人の埋葬]



p.22v. 左段。Agouros dos Cafres.[カフル人の縁起かいつぎ]/ Modo que os Cafres tem em chorar seus defũtos.[カフル人が死者を泣いて悼む際にとる方法]

右段。Deshumanidade dos Cafres.[カフル人の無慈悲]/ Deixaõ morrer os enfermos ao desemparo.[カフル人は病人を保護せず死ぬに任せる]

## CAPÍTULO XX (PRIMEIRA PARTE, LIVRO PRIMEIRO)

### **Da ilha Maroupe, situada no meio do rio de Sofala, e da caça que nela se cria.**

第 20 章(第一部第一卷) ソファアラの河の中に位置するマロウペ島, およびその島で棲息する獣について

#### **Titulo com que o Quiteue hõra os Portugueses.**

¶ No rio de Sofala, obra de quatro léguas da fortaleza polo rio acima, começa uma ilha chamada Maroupe, que tem oito léguas de comprido, e no mais largo légua e meia, pouco mais ou menos. Um português chamado Rodrigo Lobo, era senhor da mor parte desta ilha, da qual lhe fez mercê o Quiteue por ser mui seu amigo, e juntamente lhe deu título de sua mulher, nome que o Rei chamava ao Capitão de Moçambique, e ao de Sofala, e aos mais portugueses que muito estima, significando com tal nome que os ama, e quer que todos lhe façam cortesia, como a sua mulher, e realmente assi é, que todos os cafres veneram muito os portugueses que têm título de mulheres de el-Rei.

#### **Recreação da ilha de Maroupe.**

Nesta ilha tinha Rodrigo Lobo muitos cafres seus escravos, e os mais que nela moravam todos eram seus vassalos. Algũas vezes fomos a ela, eu e o padre meu companheiro, a catequizar, e baptizar alguns deles, que pola mor parte eram gentios, outras vezes a folgar, porque é a ilha de muita recreação, por haver nela grandes pescarias, e caça de muitos animais, como são veados, merus, paraparas, nondos, gazelas, vacas bravas, que têm pouca diferença das mansas, muitos porcos do mato, e javalis, e outras muitas castas de feras, que andam em bandos como vacas, ou cabras.

#### **キテーヴェがポルトガル人に敬意を払って与える称号**

ソファアラの河の真ん中, その砦から四レグア河を上流へ遡ったところから, ひとつの島が始まる。マロウペと呼ぶ。この島は長さにして八レグア, 最も幅のあるところでおよそ一レグア半ある。ロドリゴ・ロボと名乗る一ポルトガル人は, この島の大半を所有する領主であった。この島をキテーヴェはロドリゴ・ロボに対する下賜の品としたのだ。それは, キテーヴェにとって彼が大いなる友人であったからだ。と同時に, キテーヴェは, 彼へみずからの〈妻〉という称号を授けた。この呼び名であるが, 王であるキテーヴェがモサンビークのカピタン, ソファアラのカピタン, さらに彼がたいそう重んずるその他のポルトガル人へ与えたものである。こうした呼び名を授けることにより, キテーヴェは, 自分がいかにポルトガル人を愛しているか, さらに, キテーヴェの〈妻〉たるポルトガル人にはせいぜい礼儀を尽くせと, カフル人へほの

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

めかしたのだ。効果は<sup>てきめん</sup>靦面であった。おかげでカフル人はポルトガル人を崇め敬うようになる。キテーヴェの（妻）を名乗ったればこそである。

### マロウベ島のレクリエーション

この島にロドリゴ・ロボは、多数のカフル人を奴隷として抱えていた。この島に住む残りの連中も、彼の家来であった。我ら——我らとは、私とわが同伴者のパードレである——は、ときおりこの島へ出かけた。島の住民——その大半がゼンチョ<sup>2</sup>であった——の幾人かへ教理要綱を教え、洗礼を授けにゆくこともあれば、気晴らしのためもあった。というのはこの島は、レクリエーションに大いに適したところであるからだ。盛大な魚釣りができるし、多くの獣の狩り場もある。獣といえば、たとえば鹿、メルレー、パラパラ、ノンド〔不詳〕、カゼル、野生の牛である。野生の牛だが、飼ひ馴らされたウシとほとんど差異はない。さらに森に棲む多くの野生の豚、猪、そのほか幾種類もの獣たちだ。彼らは、たとえば牛や山羊の如く、群れをなして闊歩している。

#### Tres modos que os Cafres têm de caçar. 1. modo.

¶ Os moradores desta ilha de três maneiras caçam este animais. A primeira, e mais ordinária, é em covas que fazem polos vales da ilha, onde se recolhem de noite a comer. Estas covas são de altura de um homem, e de três varas de comprimento, e vara e meia de largo na boca da cova, e no fundo mui estreitas, de modo que caindo a caça dentro, trocam-se-lhe os pés em baixo, e não podem tornar a saltar fora, e ali fica entalada, e presa, sem se poder bulir, onde os cafres a matam sem perigo, nem trabalho, ou a tiram viva. Estas covas armam com paus atravessados por cima, e cobertos de palha, ou de rama, de modo que não haja sinal de cova.

#### カフル人が行なう狩りの方法三つ。第一の方法

この島の住民がこれらの獣を狩る方法、それは三つある。第一の、そして最も普通の方法は穴を掘って狩るというものだ。彼らはこの穴を島の谷沿いに作る。夜はそこに籠り、ものを食べる。これらの穴〔の深さ〕は、およそ人の背の高さくらい。長さは三ヴァーラ〔原語 tres varas de comprimento. ヴァーラは古い長さの単位。1.10m に相当〕、穴の入口は幅半ヴァーラだが、底は幅をたいそう狭くしてある。だから獲物がこの中に入り込むと、下のほうで両脚を交叉させるしかなく、外への飛び出しは不可能となる。獲物はそこに押し込められ、束縛され、身動きはできない。カフル人はそのまま、危険も苦もなく、獲物を殺す。さもなくば、生きたまま引きずり出す。こうし

<sup>2</sup> 原綴り Gêtiós. 「異教徒」を意味するが、大航海時代のポルトガル人著述者は、ムスリムを gentio とは呼ばず mouro と呼んだ。すなわち、カトリックもユダヤ教もイスラムも信奉しない人々が、一括して gentio と呼ばれた。日本キリシタン史において、キリシタンに改宗しない人々を、ポルトガル人宣教師が gentio と呼び、日本人信徒が、ポルトガル語に由来する「ゼンチョ」という語彙で呼んだゆえんは、そこにある。

た穴をしつらえるに際して、彼らは上のほうで木片を交差させ、藁もしくは枝で覆い隠す。そうして穴の気配を消す。

## 2. modo.

A segunda maneira de caçar é fazendo-lhe cerco da banda da terra com muita gente, e cães que ladrem, e façam fugir a caça para o rio, onde têm postas ao longo da terra muitas embarcações pequenas a que chamam *almadias*, com dous caçadores em cada ãa, um sentado na popa, com um remo na mão prestes pera remar, e outro na proa com azagaias, pera ferir, e matar a caça. Isto preparado no rio, e a gente das embarcações mui agachada, e quieta sem falar, por não ser vista nem sentida da caça, faz a gente da terra ãa meia lua, e a vai cercando, e açulando-lhe os cães, com grande estrondo e grita, e ela fugindo, vai buscar o rio pera o atravessar a nado à outra banda, como costuma; mas tanto que se lança na água, acodem mui depressa as almadias remando, e tomam a caça a meio do rio viva, e ali a prendem, e levam à borda da água, onde a matam sem trabalho algum, nem perigo, e com muita festa. E assi é esta caçada de mais gosto e regozijo que a primeira, porque nela se toma muitas vezes todo um bando destes animais.

### 第二の方法

狩りを行なう第二の方法は、陸の側で獲物を包囲するというものだ。そのため多くの人数と犬どもを用いる。犬には吠えさせ、獲物を河へ追い立てる働きをさせる。河には陸沿いに小さな舟を多数配置しておく。この舟をアルマディア<sup>3</sup>と呼ぶ。一艘のアルマディアには狩人がふたり乗り込む。ひとり、船尾に腰をおろして手に櫂を持ち、いつでも漕ぎ出せるよう身構えている。もうひとり、船首に陣取りアザガイアを手に行っている。獲物を傷つけ仕留めるためである。河の上の準備はこうして完了する。舟々の連中がしゃがみ、おしゃべりもやめて、静まり返ると——獲物に見られたり気取られたりしないように——、陸の連中は三日月の陣形に展開し、獲物を徐々に包囲してゆく。そして獲物に向かい犬どもをけしかける。それに伴い、大音響と叫喚が沸き起こる。獲物は逃げ出し、河のほうへ逃げ場を求める。いつもそうしているように、泳いで対岸へ突っ切ろうとするのだ。しかし獲物が水に飛び込むや、アルマディアが大急ぎで漕ぎ寄せる。そして河の真ん中で獲物を生きたまま確保する。そこで獲物を縛りあげ、川縁へ運ぶ。そこで、苦もなく危険もなく、ひたすら楽しげなお祭り騒ぎのうちに、獲物を殺す。実にこの狩りは、第一の狩りより楽しみやら喜びやらが多い。なぜなら、このやり方によるなら、

---

<sup>3</sup> 原綴り *almádiás*。アラビア語の *al-maadya* に由来し、元来、渡し船や筏の意。DPLP には *Embarcação africana, esguia e comprida, geralmente esculpida no tronco de uma árvore* (ほっそりとして長いアフリカの舟。通常、一本の木の幹から彫り抜く) とある。



多くの場合、これらの動物の群れを一網打尽にすることができるからだ。

### 3. modo. Caçada vniuersal.

¶ A terceira maneira com que se mata todo o género de caça é no tempo das cheias do rio, no qual os mais daqueles campos da ilha se alagam, e a caça toda foge para os altos da ilha, onde fica cercada sem poder fugir pera nenhuma parte. Ali ficam leões, tigres, onças, elefantes, veados, porcos, e todo o mais género de animais silvestres, e feras, juntos ãs com os outros, sem se fazerem mal, como se estiveram em a arca de Noé; e esta conformidade lhes causa o temor das enchentes das águas que alagam os campos, e afogam muitos deles. Neste tempo se vão os cafres a estes altos, em almadias, e de dentro delas ferem estes animais com frechas, e azagaias, os quais vendo-se feridos, e acoçados, se lançam a nadar sobre as águas, e cuidando assi escapar das feridas se metem na morte, porque os caçadores vão logo remando em suas almadias, e seguindo toda a caça que foge, e no meio das águas a prendem, e matam sem resistência, nem perigo algum, e de suas carnes fazem muita chacina, e tassalhos que comem, e vendem todo o ano. Estas caçadas são mui estimadas, e celebradas entre os cafres, assi por serem de muito gosto, e pouco perigo, como por serem de muito proveito.

#### 第三の方法——一網打尽の狩猟

あらゆる獲物を殺す第三の方法、それは河が大増水を起こす時期に用いるものだ。この時期、平原にあるほとんどが水に浸かり、獲物はことごとく島の高台へ避難する。獲物は水に囲まれ、どこへも逃げることができない。高台に難を逃れるのは次のような動物である。ライオン、虎、<sup>ひょう</sup>豹、象、鹿、豚、その他あらゆる種の野生動物、そして猛獣。これらの動物が混然一体として、相互に危害を加えない。まるでノエ〔ノア〕の箱舟に収まった仲間同士のように。このようにみごとな調和なり一致が保たれているのは、獣たちが大増水に対する怖れを抱いているせいだ。大増水によって平原は水没し、獣の多くは死んでしまう。大増水の時期、カフル人たちはアルマディアに乗ってこれらの高台へ向かう。アルマディアの中からカフル人は、こうした獣を矢やアザガイアで傷つける。獣は傷つけられ、追い詰められたと自覚すると、水中に飛び込んで泳ぎ出す。こうすれば傷つけられずに済むと思うのであるが、彼らはそうして死の淵にみずから入ってゆくのだ。というのは、狩人たちは、アルマディアですぐさま漕ぎつけ、逃げる獲物すべてを追跡し、河の真ん中で捕まえ、殺すからだ。何の抵抗も受けず、危険もない。殺した獲物の肉を、大量のチャシーナ〔原綴り *chacina*。DPLPによると、燻製や塩漬にした豚肉〕やらタサーリヨ〔原綴り *tassalho*。DPLPによると、インフォーマルな表現で *Pedaço grande*。大雑把なぶつ切り、くらいの意か〕にして保存する。そしてそれを一年通じ食べかつ売る。このような狩りを、カフル人たちは、

大きな喜びをもって賑々しく行なう。彼らからすれば、これこそ危険がほとんど伴わない愉しみであるとともに、実益に叶うことでもあるからだ。

### **Caso sobre a morte de hũ leão.**

Um ano sucedeu que o dono desta ilha, Rodrigo Lobo, fez ùa caçada com muitos cafres seus escravos, e vassallos, moradores na mesma ilha, e entre muito gado que mataram, juntamente foi morto um leão (cousa mui defesa em todo o Reino do Quiteve, senhor, e rei destas terras, como atrás fica dito). Vendo-se pois o senhor da ilha com o leão morto, e que o rei o havia logo de saber (porque os cafres nenhum segredo têm, e são mui inclinados a dar ùa ruim nova), mandou meter o leão em ùa almadia, e cobri-lo de rama, e pôs-lhe em cima vinte panos, e mandou tudo ao Quiteve dizendo que ele, Rodrigo Lobo, sendo mulher d'el-Rei, e andando fazendo a seara pera seu marido, o viera cometer aquele leão alevantado, e descortês pera a mulher de seu rei, pola qual rezão lhe deu com o cabo da enxada na cabeça por honra de seu marido, e que ali lho mandava morto pera que acabasse de tomar vingança dele, e do agravo que fizera a sua mulher. O Quiteve recebeu o presente, e mandou-lhe dizer que fizera muito bem de matar o leão, pois fora descortês a sua mulher. E desta maneira se acabou esta empófia que Rodrigo Lobo temia pagar polo menos com perder a ilha, e se fora cafre com perder a vida, e todos seus bens pera a coroa, conforme a lei do Quiteve. Mas como Rodrigo Lobo era grande amigo seu, e sabia falar ao modo dos cafres por metáforas, buscou esta invenção pera contentar ao Quiteve, como de feito contentou, e declarou que a lei que tinha posta não se entendesse em Rodrigo Lobo, sua mulher muito amada.

#### **あるライオンの死をめぐる出来事**

ある年こんなことが起こった。このマロウペ島の領主であるロドリゴ・ロボが、多くのカフル人を率いて狩りを催した。このカフル人は、ロドリゴ・ロボの奴隷であり家来であり、マロウペ島の住人である。さて、彼らが仕留めた多くの獣の中に、ライオンが一頭紛れ込んでいた。ライオンを殺すことは、これらもろもろの土地の主人であり王であるキテーヴェの国全土において厳禁されている。これは前述したとおりだ。

#### **カフル人が常用する寓意話法**

ロドリゴ・ロボは、息絶えたライオンを傍らに見、かつ王であるキテーヴェがいずれこの事件を知るに至るであろう、と考えた。なぜなら、カフル人というのは、およそ秘密を保てぬ連中であり、悪い噂なら、人へ伝えずにはいられぬ性格を有するからだ。そこでロドリゴ・ロボは、仕留めてしまったライオンを一艘のアルマディアに押し込むよう、そのライオンを枝で覆い隠すよう、命じた。そしてライオンの骸の上から布を二〇枚かぶせ、一切をキテーヴェへ贈った。

それに際し、こんな口上を添えた。私、ロドリゴ・ロボは王様〔キテーヴェ〕の妻であり、王様のため、日々田畑作りに精出す者であります。このたび私、ライオンを殺しました。それは、私という王様の〈妻〉にライオンが逆らい、かつ無礼にも、私に攻撃を仕掛けて参ったからであります。私はそれゆえ、わが〈夫〉の名誉を守ろうと、きゃつの頭にくわ鉞の柄で一撃を食らわせ、その場で死を申しつけました。そうして、わが〈夫〉の仇を討ち、かつライオンが王様の〈妻〉に加えた危害への報復を行なったのであります。キテーヴェは、この贈りものを受納した。そしてロドリゴ・ロボに対し、こんな伝言を申し送った。ライオンを仕留めた汝の手並み、まことに目覚ましい。なにしろきゃつは、わが〈妻〉に対し無礼を働いたのであるからな、と。こうして、この言葉遊びには終止符が打たれた。実際のところ、ロドリゴ・ロボとしては、みずからの島〔マロウベ〕を失う、という代償くらいは最小限払わねばならぬか、と恐れていたのだ。ロドリゴ・ロボがポルトガル人ではなく、もしカフル人であったならば、キテーヴェの掟にのっとり、命は召し上げられ、その財産はすべて王室のもとに没収、という代償を払わされていたであろう。しかしロドリゴ・ロボはキテーヴェの大いなる友人であったうえ、比喩を駆使するカフル人の流儀で会話する術に長けていた。彼はキテーヴェを満悦させるため、そうした特技を駆使したのであり、事実それに成功した。そうして高らかに宣言した。〔ライオンの殺生を禁ずるといふ〕キテーヴェの掟であるが、あれは私——ロドリゴ・ロボ——には及ばぬ。なにしろ私は、キテーヴェの寵愛深き〈妻〉なのだからな、と。

enxota moscas, porque té pera si que o brado, & voz da curuja deixou o ar daquella casa inficionado de modo, q̄ lhe mata as crianças, como se fossem embruxadas.

Agouro da câna.

¶ Outro agouro tem os naturaes desta terra, & particularmente os Cafres Gentios, que he, se lhe dão algũa pancada com coufa vaã por dentro, como he câna, ou palha, fogem, & gritão como se os matafse, & antes querem que lhe dem com hum pao, ou ferro, ainda que lhe doa, que não com coufa vaã por dentro, porque dizê que assi como a canna he vaã, assi faz mirrar, & seccar a que leua suas pancadas, & pouco & pouco se vay consumindo, até que morre. Outros muitos agouros, & superstições tem estas gêtes mui arraigados no coração, que não ha poderlhos tirar, por mais rezões que lhe dem pera isso, & particularmente as mulheres de Sofala: o que lhe nace da mistica conuersação que té com as Cafras que vfaõ destas coufas.

¶ CAPITULO VINTE,  
Da Ilha Maroupe, situada no meyo do Rio de Sofala, e da caça que nella se cria.

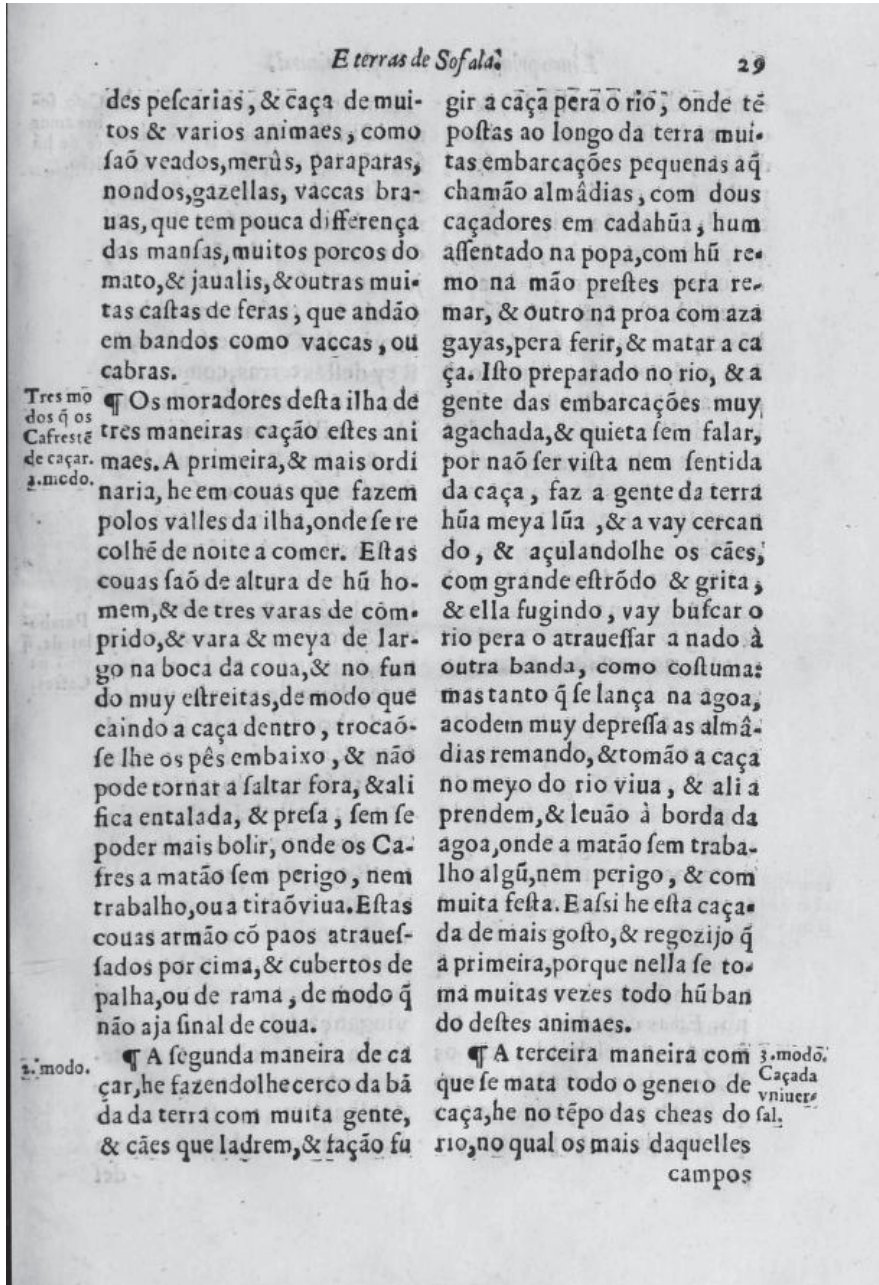


O rio de Sofala obra de quatro legoas da fortaleza polo rio acima, começa hũa ilha chamada Maroupe, que tem oito legoas de comprido, & no mais largo legoa & mea, pouco mais ou menos. Hum Portugues chamado Rodrigo Lobo, era senhor da mór parte desta ilha, da qual lhe fez merce o Quiteue por ser muito seu amigo, & juntamente lhe deu titulo de sua mulher, nome que o Rey chama ao capitão de Moçambique, & ao de Sofala, & aos mais Portugueses que muito estima, significando com o tal nome, q̄ os ama, & quer que todos lhe fação cortesia, como a sua mulher, & realmente assi he, que todos os Cafres veneraõ muito os Portugueses que tem titulo de mulheres del Rey. Nesta ilha tinha Rodrigo Lobo muitos Cafres seus escrauos, & os mais que nella morauão, todos eraõ seus vassallos. Algũas vezes fomos a ella, eu & o padre meu cõpanheiro, a catechizar, & bautizar algũs delles, que pola mór parte erã Gétios, outras vezes a folgar, porque he a ilha de muita recreação, por auer nella grande

Titulo com q̄ o Quiteue hõra os Portugueses.

Recreação da ilha de Maroupe.

p.28v. 右段。Titulo com que o Quiteue hõra os Portugueses.[キテーヴェがポルトガル人に敬意を払つて与える称号]/Recreação da ilha de Maroupe.[マロウペ島のレクリエーション]



p.29. 左段。Tres modos que os Cafres tẽ de caçar. 1. modo. [カフル人が行なう狩りの方法三つ。第一の方法] / 2. modo. [第二の方法]

右段。3. modo. Caçada vniuersal. [第三の方法。一網打尽の狩猟]

campos da ilha se alagão, & a caça toda foge pera os altos da ilha, onde fica cercada sem poder fugir pera nenhũa parte. Ali ficão léões, tigres, onças, elefantes, veados, porcos, & todo o mais genero de animaes sylueftres, & feras, jutos hũs com os outros, sem se fazem mal, como se estiueraõ é a arca de Noë; & esta conformidade lhe causa o temor das enchentes das agoas que alagão os campos, & afogão muitos delles. Neste tẽpo se vão os Cafres a estes altos, em almãdias, & de dentro dellas ferem estes animaes cõ frechas, & azagayas: os quaes vendose feridos, & acossados, se lanção a nadar sobre as agoas, & cuidando afsi escapar das feridas se metem na morte, porque os caçadores vão logo remando em suas almãdias, & seguindo toda a caça q̄ foge, & no meyo das agoas a prendê, & matão sem resistencia, nem perigo algum, & de suas carnes fazem muita chacina, & tassalhos, q̄ comem, & vendem todo o anno. Estas caçadas são mui estimadas, & celebradas entre os Cafres, afsi por serê de muito gosto, & pouco perigo, como por serê de muito proueito.

Hum anno socedeo que o do no desta ilha Rodrigo Lobo, fez hũa caçada, cõ muitos Cafres seus escrauos, & vassallos, moradores na mesma ilha, & entre muito gado q̄ matarão, juntamete foy morto hũ leão (coufa mui defesa em todo o Reyno do Quiteue, senhor, & Rey destas terras, como atras fica dito) vendose pois o senhor da ilha com o leão morto, & que o Rey o auia logo de saber, (porque os Cafres nenhum segredo tem, & são muy inclinados a dar hũa roim no ua) mandou meter o leão em hũa almãdia, & cobrilo de rama, & poshe encima vinte pãnos, & mandou tudo ao Quiteue, dizendo que elle Rodrigo Lobo, sendo molher de Rey, & andando fazêdo a seara pera seu marido, o viera cometer aquelle leão, aleuãtado, & descortes pera a molher de seu Rey, pola qual rezão lhe deu com o cabo da enxada na cabeça, por honra de seu marido, & que ali lho mãdaua morto, pera que acabasse de tomar vingança d'elle, & do agrauo q̄ fizera a sua molher. O Quiteue recebeo o presente, & mandoulhe dizer, que fizera muito bem de matar o leão, pois fora

Caso sobre amor de hũ leão.

Parabolas de que vsão os Cafres.

del

p.29v. 右段。Caso sobre a morte de hũ leão。[あるライオンの死をめぐる出来事] / Parabolas de que vsão os Cafres。[カフル人が常用する寓意話法]

CAPÍTULO XXI (PRIMEIRA PARTE, LIVRO PRIMEIRO)

**Dos leões, tigres, e onças que há nesta ilha, e de alguns casos que nela sucederam.**

第21章(第一部第一巻) この[マロウペ]島にいるライオン, 虎, および豹について。

その島で生じた幾つかの出来事について

**Bosque mui fermoso, casa de feras.**

¶ No meio da ilha de Maroupe, de que atrás falei, meia légua das casas em que mora o senhor da ilha com toda sua gente, está um bosque muito fermoso, mais de ùa légua em roda, de arvoredos silvestres, tão alto que se vai às nuvens, e tão basto, e copado por cima que não dá lugar ao sol para entrar nele, pelo que em algúas partes é escuro, e medonho. Aqui dentro é casa, e morada de leões, tigres, onças, elefantes, e porcos-monteses. Um dia fomos dentro a este bosque, eu, e o padre meu companheiro, para vermos ùa caçada de porcos, que o dono da ilha quis fazer por respeito de nos recrear, e fazer mimo, para o que mandou ajuntar mais de cinquenta escravos, e vassallos seus caçadores, assi para segurança de nossas pessoas, como para o efeito da caça, os quais iam todos armados de arcos, flechas, e azagaias, e algúas espingardas, e desta maneira atravessámos o bosque, em que achámos muitos porcos, e deles foram mortos três, e tomados alguns leitões pequenos. Também encontrámos elefantes, e tigres, e alguns búfaros, que todos se desviaram de nós, e fugiram, com que muito folgámos.

**美しい密林は猛獣の棲み処**

すでに話題にしたマロウペ島の中ほど、島の領主がその郎党のすべてと一緒に住む屋敷から半レグア離れたところに、大変美しい密林がある。密林は周囲一レグア以上あり、野生の樹木が生い茂っている。その木々はたいそう高く、雲にまで達するほどであり、しかもたいそう稠密で、てっぺんも鬱蒼たる葉で覆われているため、陽の光が密林の中にまで差し込んでくる余地はない。したがって場所によっては、密林はいとも暗く怖ろしい霧囲気に満ちている。この密林の内部こそ、ライオンや虎や豹や象や猪たちの家であり棲み処である。ある日のこと。我らはこの密林に分け入った。我らとは私と私の同伴者であるパードレだ。猪狩りを見物するのが狙いであった。この獵であるが、島の持ち主が私どもを慰まし喜ばせるため、催すことを望んだのだ。この催しのため島の持ち主は、奴隷や彼自身の狩人の家来、合わせて五〇人超を集めるよう命じた。それはひとつに我らの身の安全を図るためであり、いまひとつに狩りの効果を上げるためである。奴隷や狩人たちは皆、弓矢とアザガイア槍で、それから少数のエスピナルダ銃で武装を固めていた。こうして我らは密林を縦断したのだが、その中で我らは多くの猪に出遭った。それらのうち三頭の親を殺し、数匹の子を捕らえた。我らはまた象や

虎, それから数頭の水牛にも出遭った。これらの獣は皆, 我らから遠ざかり逃げてしまったが, 我らは大いに楽しんだ。

### **Estremos\* de fera sobre seu filho.**

\* *estremos* は現代綴りでは *extremos*. *PDLP* は複数形だけの用法として *Cúmulo de afeição ou de carinho* という語積を示す。「愛着もしくは可愛がりの極致」。

¶ Em ãa cova fomos dar com um cachorro, filho de tigre, de idade de um mês pouco mais ou menos, o qual trouxemos connosco pera casa, e logo na noite seguinte veio a mãe polo faro até às portas da casa onde estava o filho, bramindo tão raivosa que parecia querer nos comer, e matar a todos, e desta maneira continuou quatro noites, até que o filho morreu, por falta dos cafres que o não quiseram criar, polo ódio que têm a estas feras, e depois de morto foi lançado no campo pera aquela parte do bosque donde a mãe vinha em busca dele, e ao outro dia não foi achado, do que presumimos que a mãe o achou, e o levou ou comeu, porque dali por diante não tornou mais a bramar, nem rodear a casa de noite, como dantes fazia com muita ferocidade.

#### **わが子に執着する猛獣**

ある洞穴で我らは一匹の犬に出逢った。これは虎に育てられている子<sup>4</sup>で、齢は一カ月そこそこである。我らはこの犬を家に持ち帰った。たちまちその夜、母親の虎がやってきた。本能的な嗅覚によって子のいる家の戸口までやってきたのだ。母親は猛々しい唸り<sup>うな</sup>声を上げ、我らすべてを食ってしまうか、我らを皆殺しにしたがっているかのようなさえ思われた。この状態は四夜継続した。ついに子は死んでしまった。カフル人たちが嫌がってこの犬の子を育てようとしなかったからだ。彼らはこの猛獣[ハイエナであろう]に大変な嫌悪感を懐いている。死んでしまった子は、野原に投棄された。その向こうに母親の棲む密林があり、母親はそこからわが子を求め出沒を繰り返していたのだ。子の姿は翌日には消えていた。そこから我らが推測したことはこうだ。母親は子を見つけたが、結局これを連れ去ったか食べてしまったのではないか。なぜならそれ以降、母親はもう唸り声をあげたり、夜分、家の周囲を徘徊したりは(以前は大変な獰猛さでもってやっていたことだが)、しなくなったからだ。

### **Seis leões, que entrarão nesta ilha.**

¶ Estando nós um dia à tarde assentados nesta ilha à porta da casa com o senhor dela, veio a nós um cafre seu escravo, e disse, se queríamos ver seis leões que tinham àquela hora passado o rio

---

<sup>4</sup> 原語 *hum cachorro filho de tigre*. 「一匹の犬で虎の子」とあるが、トラはアフリカ大陸には棲息しないはずで、サントスは、イベリア半島には存在しないハイエナを *tigre* (トラ) という語彙で代替的に表現したのに相違ない。



da terra firme pera a ilha, que nos levantássemos, porque eles vinham atravessando o vale que estava junto das casas. Eu, e o padre meu companheiro quasi que estivemos em dúvida de os ir ver ao campo, mas o senhor da ilha, e o caçador nos asseguraram, dizendo que os leões, e os tigres daquela ilha não cometiam gente algũa, nem lhe faziam mal, salvo se acaso encontravam com ela, ou se os assanhavam, e a causa disto era porque lhes sobejava a caça, de que andavam enfarados, por haver na ilha infinita. Então nos levantámos, e os fomos ver de um alto que estava junto da casa, mas não lhes vimos mais que meios corpos, e as cabeças levantadas, por causa da muita erva que no vale havia, e assi foram passando pera a parte do bosque, tão seguros, e confiados como senhores do campo, e das armas.

### マロウペ島に進入した六頭のライオン

ある日の午後、我らがこの島に落ちて着いてこの島の領主と一緒に、その家の戸口のところで一息入れていると、我らのもとにひとりのカフル人がやってきた。彼はその主人の奴隷である。そしてこう言った。六頭のライオンが今しがた、河を渉り、本土からこちらの島へ入りました。もし皆さん、ライオンたちを見たいのなら、今すぐここを発ちましょう。彼らは、家々の傍らにある谷を縦断しながらこちらへ向かっています、と。私と私の同伴者のパードレが、野原へライオンを見にゆくことにためらいを見せていると、島の領主と猟師の奴隷は、我らに保証してこう言うのだ。この島に関する限り、ライオンも虎も、決して人を襲いませぬ。危害も加えませぬ。ただし、偶然これとばったり遭遇したとか、ちょっかいを出したとかすれば、話は違ひます。人を襲わぬわけは、狩っても狩りきれぬ獲物が島にいること。まさに無尽蔵だ。うんざりするくらい彼らは満腹しております、と。そこで我らは腰を上げ、ライオンを見に赴いた。その場所は家の傍らにある高台だ。ライオンはしかし、見るには見たが、我らが見たのは半身だけであつたり擡げた頭だけであつた。谷に多くの草が茂っていたからだ。やがてライオンは密林のほうへ歩んでいった。たいそうゆつたりと、まるで平原の主は自分たちであるとでも言いたげに。

### Briga de tigres cõ hum leão. / Cõstácia de leão.

¶ Aquela mesma noite, já pola madrugada, ouvimos grandes latidos de tigre, e roncões de leão, mui perto das casas em que dormíamos; e o caso foi que um leão veio seguindo um meru, até que o apanhou junto das nossas casas, e estando comendo nele, acudiram três ou quatro tigres, e rodaram o leão pera lhe apanhar a presa, e isto dizem os cafres que fazem os tigres ordinariamente, andando polo rasto do leão, quando mata a caça, pera comerem os sobejos que lhe ficam depois que se farta; de maneira que assi o faziam estes aqui. Mas o leão, como não estava ainda farto, roncava-lhes como cão que está comendo muito sôfrego, tendo outros diante que lhe querem

tomar o que come; e de quando em quando fazia que remetia aos tigres, de que eles fugiam algum tanto, mas logo tornavam a perseguir o leão com latidos pera que largasse a caça, mas contudo nenhum deles ousava chegar a pegar nela. Estando eles nesta contenda, chamou-nos o senhor da ilha, dizendo que fôssemos ver a briga das feras, que era muito pera ver; o que nos logo fizemos, e estando vendo, e esperando o fim dela, mandou o senhor da ilha a dous escravos seus caçadores, que presentes estavam, que fossem tomar a presa ao leão, os quais foram dando grandes brados, e apupos pera que se fossem as feras, e deixassem a caça; o que os tigres logo fizeram, tanto que viram a determinação dos caçadores, mas o leão nunca se quis bulir, nem teve dever com os caçadores, antes se deixou estar bem devagar comendo, e roncando aos caçadores que se chegavam, os quais tornaram a voltar, e disseram ao senhor que o leão não estava ainda farto, porque enquanto o não está, tendo a caça morta diante de si, não a larga ainda que o matem, porque é mui sôfrego, e carniceiro. Mas depois que se fartou, ele mesmo se levantou, e se foi passeando mui devagar, e tão seguro como quem não temia cousa viva, e depois que desapareceu, foram os cafres, e trouxeram o meru quasi todo, porque o leão lhe não tinha comido mais que o pescoço, e muita parte dos peitos, e alguns bocados das ancas, e o leão não tornou ali mais, nem os tigres.

#### 虎どもとライオンの闘い/事態に動じぬライオン

その夜のことである。夜がそろそろ明け染めようかという頃であった。我らは虎どもの大きな唸り声を聞いた。ライオンの唸り声も聞こえた。我らが眠っていた家々のすぐそばである。事件が起こった。それはこうだ。ライオン一頭がメルー〔原綴り merú。「アジアおよびアフリカに棲む鹿の仲間」(DPLP)]一匹を追いかけた。そしてついに我らの家々のそばでこれを捕まえた。ライオンがこのメルーに喰らいついているところに、三頭か四頭の虎<sup>5</sup>が駆けつけてきた。彼らはそのライオンを取り囲み、ライオンから獲物を横取りしようとしていた。カフル人たちが言うところによると、これは虎どもが日常的にやっていることだそう。彼らはライオンの跡をつけ、ライオンが獲物を仕留めるのを待つ。そしてライオンがたらふく食った後の残飯を食う。これらの虎どもがここでやろうとしていることが、まさにそれであった。しかしライオンは〔メルー一匹を食っても〕まだ満足していなかったもので、虎どもに対し威嚇するような唸り声を上げた。まるでががつ餌に喰らいつく犬のようであった。ライオンのそばには別の虎がいた。この虎どもも、ライオンの食うものを横取りしようとしているのだ。ときとして起こることだが、ライオンはこのような虎どもに攻撃を仕掛ける。そのために一旦ある程度逃げ散る。しかしただちにそのライオンに逆襲を仕掛ける。獲物を放すよう大きな唸り声を上げながら。しかしどの虎も敢えてライオン

---

<sup>5</sup> 間違いなくハイエナを指すであろう。サントスが *tigre* と記す獣は例外なくハイエナと考える。

の捕らえた獲物にかぶりついてくる勇気はない。彼らがこうした戦いの駆け引きに余念がないとき、島の領主は我らを呼んだ。これら猛獣の喧嘩を見にゆこうではありませんか、見ものですぞ、と我らに言うのだ。我らはただちにこれを実行に移した。我らがそれを見ていると、そしてその戦いの結末やいかに、と待ち構えていると、島の領主は居合わせたみずからの獵師役であるふたりの奴隷に言いつけて、ライオンから獲物を取り上げてくるよう命じた。ふたりの奴隷は大きな叫び声を上げながら、そして奇声を上げながら進んでいった。猛獣どもがその場を去り、さらには獲物を諦めてくれるよう仕向けたのだ。虎どもは獵師たちの重大な決意を見て、ただちに応じた。しかしライオンはそうではなかった。いっかなその場を動かこうとしない。獵師たちに怯む<sup>ひる</sup>気配も見せない。それどころかライオンはそのまま悠然と獲物を食い、近づいてくる獵師たちに唸り声を上げるばかりであった。獵師たちは一旦戻ることにした。主人に向かって言うには、ライオンはまだ満腹していません、満腹せぬうちは、死んだ獲物を目前にしている限り、たとえ殺されても獲物を放しません、彼らはどこまでもがつつがとして血に餓えております、と。しかしライオンは満足すると、ようやく立ち上がり、まったく悠然とした足取りでもって歩き出した。そのゆったりとしたありさまときたら、他の生き物にはまるで恐れなど抱いておらぬかのような。ライオンが姿を消した後、カフル人は出かけてゆき、ほぼ全身が残った獲物のメル<sup>メル</sup>を持ってきた。ライオンときたら頸と胸の大部分と、尻を幾分齧<sup>かじ</sup>っただけで、その他は喰わずじまいであった。ライオンはもはやそこには戻ってこなかった。虎どもも戻ってはこなかった。

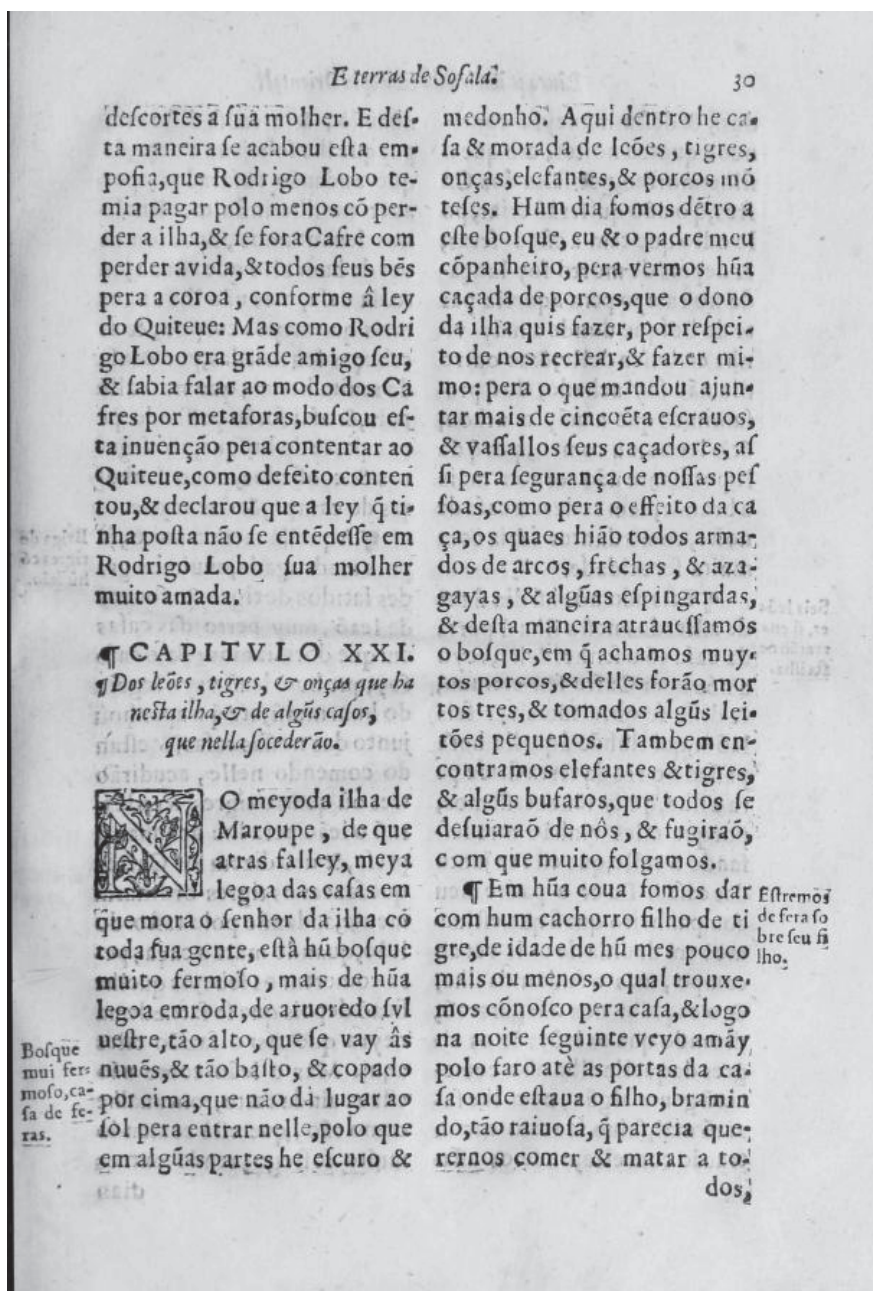
### Os tigres têm mui grãde fardo. / Caso de hum tigre.

¶ Estes tigres têm mui grande fardo de cousa morta, porque muitas vezes vinham ao adro da igreja do Espírito Santo de Sofala a desenterrar os defuntos que estavam enterrados de fresco, e os comiam, como eu vi por três vezes, pola qual rezão mandava sempre fazer as covas muito fundas. Ûa manhã se achou neste mesmo adro um tigre morto em cima de ùa cova, com as unhas metidas na terra, começando de cavar, e abrir a cova. Este era tão velho que já tinha os dentes todos quebrados, e podres, e estava tão magro que não tinha mais que a pele, e o osso, e muita parte do corpo pelado, ou gafo; tinha mais de vinte sinais de feridas velhas, e algũas de palmo, que deviam ser d'outros tigres com quem tinha pelejado, o que eles ordinariamente fazem sobre o comer, de modo que este veio aqui morrer, ou de velho, ou de fome, ou de tudo junto.

#### 虎どもは優れた嗅覚を有する/ある虎の出来事

これらの虎どもは死んだものに対する異常に鋭い嗅覚を持っている。何度もあったことだが、虎どもはソファーラのエスピリト・サント教会の敷地にやってくる、そこに埋葬されてあまり時

を経ない死骸を掘り起こし、これを喰らった。これは私自身、三度にわたり実見したことだ。私はだから、つねづね墓穴は極力深く掘るよう命じていたのだ。ある朝、これと同じ敷地内で一頭の虎が死んでいた。ある墓穴の上である。虎は土を掘り、墓穴に穴を開けようとしているところだったのか、土中に爪を食い込ませていた。この虎はひどく老齢で、もはや歯はすべて破損し腐っており、体はまったくやせ衰え、文字どおり骨と皮だけというありさまであった。体の大部分は皮がめくれ上がり、疥癬かいせんを患っていた。二〇箇所を超える古傷の痕跡があった。幾つかの古傷は〔長さ〕一パルモに達していた。これらは定めし、みずからが闘った他の虎どもから負わされたものに違いない。虎どもはこのような戦いを食物がらみでつねに行なっている。だから私が見たこの虎もここにやってくる、力尽きたのだ。老齢のゆえか餓えてか、すべてが複合したせいかな。



p.30. 左段。Bosque mui fermoso, casa de feras. [美しい密林は猛獣の棲み処]

右段。Estremos de fera sobre seu filho. [わが子に執着する猛獣]

Liuro primeiro da Ethiopia Oriental.

dos, & desta maneyra conti-  
nuou quatro noites, atè que o  
filho morreo, por falta dos Ca-  
fres, q̄ o não quiferaõ criar, po-  
lo odio que tem a estas feras,  
& depois de morto foy lança-  
do no campo pera aquella par-  
te do bosque donde a mãy vi-  
nha embusca delle, & ao outro  
dia não foy achado, do q̄ pre-  
fumimos que a mãy o achou,  
& o leuou, ou comeo, porq̄ da-  
li pordiante não tornou mais  
a bramir, nem rodear a casa de  
noite, como dantes fazia com  
muita ferocidade.

Seis leões,  
es, q̄ en-  
trarão ne-  
sta ilha.

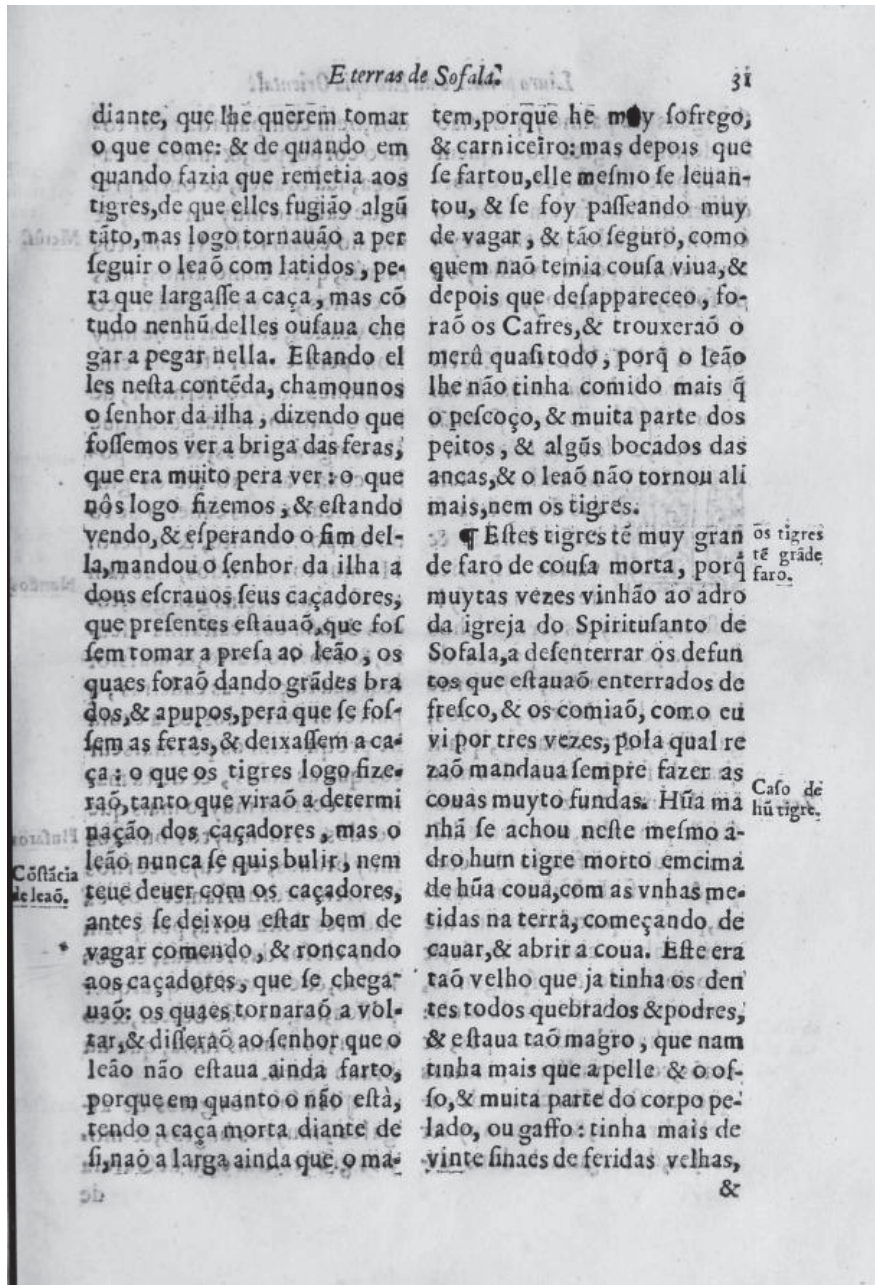
¶ Estando nós hũ dia á tar-  
de assétados nesta ilha á porta  
da casa cõ o senhordella, veyo  
a nós hum Cafre seu escravo,  
& disse se queriamos ver seis  
leões, qui tinhão áquella hora  
passado o rio da terra firme pe-  
ra a ilha, q̄ nos leuantassemos,  
porque elles vinhão atrauef-  
fando o valle, que estava junto  
das casas. Eu & o padre meu  
companheiro quasi que estiue-  
mos em duuida de os ir ver ao  
campo, mas o senhor da ilha,  
& o caçador nos asseguraraõ,  
dizendo que os leões & os ti-  
gres daquela ilha não come-  
tiaõ gente algũa, nem lhe fa-  
ziaõ mal, salvo se acafo encon-  
trauão com ella, ou se os assa-

nhauão, & a causa disto era,  
por que lhe sobejaua a caça, de  
que andauão enfarados, por  
auer na ilha infinita. Então  
nos leuantamos, & os fomos  
ver de hum alto que estava jun-  
to da casa, mas não lhe vimos  
mais que meyo corpos, & as  
cebeças leuantadas, por causa  
da muita herua, que no valle  
auia, & afsi forão passando pe-  
ra a parte do bosque, tão segu-  
ros & confiados, como senho-  
res do campo, & das armas.

¶ Aquellã mesma noite, já <sup>Briga de</sup>  
pola madrugada, ouuimos grã <sup>tigres cõ</sup>  
des latidos de tigre, & ronc <sup>hũ leão.</sup>  
de leão, muy perto das casas  
em que dormiamos; & o caso  
foy, que hum leão veyo seguin-  
do hum meru, ate q̄ o apanhou  
junto das nossas casas, & estan-  
do comendo nelle, acudirão  
tres ou quatro tigres, & rodea-  
raõ o leão pera lhe apanhar a  
presa, & isto dizem os Cafres  
que fazem os tigres ordinaria-  
mente, andando polo rasto do  
leão, quando mata a caça, pe-  
ra comerem os sobejos que lhe  
ficaõ depois que se farta: dema-  
neyra que afsi o fazião estes  
aqui. Mas o leão como não  
estava ainda farto, roncaualhe  
como cão, que está comendo  
muito sofrego, tendo outros  
dian

p.30v. 左段。Seis leões, que entrarão nesta ilha。[マロウペ島に進入した六頭のライオン]

右段。Briga de tigres cõ hum leão。[虎どもとライオンの闘い]



p.31. 左段。Cōstãcia de leão。〔事態に動じぬライオン〕

右段。Os tigres tẽ grãde faro。〔虎どもは優れた嗅覚を有する〕/Caso de hum tigre。〔ある虎の出来事〕

& algũas de palmo, q̄ deuião fer doutros tigres com quem tinha pelejado, o que elles ordinariamente fazem sobre o comer, de modo que este veyo aqui morrer, ou de velho, ou de fome, ou de tudo junto.

¶ CAPITVLO XXII.

*Da variedade de animaes que ha nos matos de Sofala, & como se matão as onças, & do bicho Inha zara.*



M todas as terras de Sofala se crião muitas & varias especies de animaes syluestres, & muytas feras, bichos & caça, como são porcos de duas ou tres castas, cuja carne he muito boa, lebres, veados, gazellas, vacas brauas, q̄ sam quasi da feição das nossas manfas. **Zaras.** Ha muytas zeras fermofas, & pintadas, muy semelhãtes a mulas na feição do corpo, & quasi da mesma natureza, porque quando correm metem a cabeça antre as mãos, & vão correndo & respingando, com outros effeitos de mula: tem vnha redonda nos pés, & mãos, como mulla: as pinturas que tem são hũas cintas de cabello branco, & preto muy fermofas, de largura de dous de-

dos, bem compassadas por todo o corpo, pés, & mãos, & cabeça, hũa branca, & outra preta, de cabello muy brando, & maisio como seda. Ha muitos **Merús,** q̄ são como afnos, mas têm cornos, & vnha fendida, como veados, cuja carne he muy boa pera comer: têm hũa cinta branca muyto fermofa, de meyo palmo de largura, que lhe cinge as ancas, & dece pelas coxas abayxo até os gíolhos: tem o mais cabello de todo o corpo cinzento, & aspero. Ha muytos **Nondos,** que sam **Nondos** quasi como roçins galegos, todos de hũa cor castanha escura, & cabelo curto, & maisio: tem hũa feição nas cadeiras, q̄ parecem derreados, & a causa he proque tem os pés maisurtos que as mãos, & desta maneyra correm muyto mais que veados. Ha muytos **bufaros,** muy brauos, em cujos cornos **Bufaros** morrem ordinariamete os caçaderes desta terra, porq̄ sam muy ciosos das femeas, & dos filhos, & em vindo qualquer pessoa, logo a vão buscar, & cõmeter, com mais furia, que hũ brauo touro.

¶ Ha muytos gatos de algalea, muytos bugios, & monos grãdes. Em casa de Garcia de



CAPÍTULO XII (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

**De quatro pragas gerais que houve nesta Etiópia em nossos tempos, e de três géneros de doenças mui ordinárias nesta costa.**

第12章(第一部第三卷)

我らの時代において当エチオピアに広く生じた四つの災厄、および当沿岸においていとも日常的な三種の病気について

**Primeiro castigo. 1ª parte, liu. 2.**

¶ Quatro castigos, ou pragas gerais houve nesta costa em nossos tempos. A primeira foi a guerra dos zimbabueiros, de que já falei atrás, que no ano de 1589 atravessaram muita parte destas terras, matando, e comendo quanto achavam, assi gente, como brutos animais, sem perdoarem a cousa viva; de maneira que se pode dizer que estes bárbaros foram um fogo abrasador, e consumidor de meia Etiópia.

**第一の懲罰。第一部第二卷参照**

我らの時代に、当地の沿岸において[デウスの]懲罰ないしは大いなる災厄が四つ生じた。第一は、ジンバ族が起こした戦争である。この戦争についてはすでに述べたけれど、1589年、彼らはこの土地土地の大部分を縦断しみずからが出遭った連中を手当たり次第に殺戮し食らい尽くしてしまった。相手が人間であろうが獣であろうが、お構いなしであった。命あるものは何であれ容赦しなかった。であるから、この野蛮人どもはエチオピアの半分を舐め<sup>な</sup>尽くし食らい尽くす火炎のようなものだ、とすることができる。

**2. castigo. / 3. castigo.**

¶ O segundo castigo, que no mesmo tempo tiveram estas terras, foi ùa cruel praga de gafanhotos que por elas passaram, mui grandes, e em tanta quantidade que cobriam as terras, e quando se levantavam no ar, faziam tão grande nuvem que as assombravam. E tanto dano fizeram nelas que comeram todas as searas, hortas, e palmares que havia por onde passavam, deixando tudo tão seco, e queimado como se lhes puseram o fogo; de maneira nem dali a dous anos tornaram a dar fruto, polo que houve grandissima esterilidade em todo este tempo, e fome, de que muita gente morreu. Esta fome foi o terceiro castigo desta Etiópia, porque houve tanta falta de mantimentos que os cafres se vinham vender, e cativar, somente polo comer, e vendiam seus filhos a troco de um alqueire de milho, e os que não achavam este remédio pereciam à fome. De modo que morreu neste tempo grande parte da gente destas terras.

**第二の懲罰/第三の懲罰**

同じ時期、これら諸地方に生じた第二の〔デウスからの〕懲罰は、この地方を通過した蝗<sup>いなご</sup>どももたらす惨<sup>むご</sup>い災厄であった。彼らは大型で、おびただしい数であり、大地を覆い尽くした。空中へ飛び出すとき、彼らは巨大な雲を形成し、ために一帯は陽をさえぎられ、暗がりとした。土地土地が被った損害は甚大であり、彼らが通過するところ、存在する耕作地、果樹園、椰子林<sup>やし</sup>は、ことごとく彼らに喰い尽くされた。すべてをからからに干からびさせ、焼き尽くしたも同然であった。まるで火を放ったのように。以降二年、土地に再び作物は生らず、その間ずっと、極度の不毛が支配し、飢渴が襲い、多くの人々が命を落とした。この飢えこそ、〔デウスが課し給うた〕エチオピアへの第三の懲罰であった。ただならぬ食糧不足が生じ、カフル人はただ食わんがため、おのれの身を売り、奴隷となる道を選んだ。たかが一アルケイレ<sup>6</sup>のモロコシと引き換えに、我が子を売りに出す者が相次いだ。そうした窮余の一策すら見出せぬ連中は、飢えに斃れるほかなかった。こうしてこの時期、当地方の人々は、大半が死に絶えた。

#### 4. castigo. / Bixigas, que são como peste.

¶ O quarto mal, e trabalho que houve nesta Cafraria foi ãa grande doença de bexigas, de que também morreu grande número de gente. Esta infirmitade em toda esta costa é como fina peste, porque na casa em que dá todos mata, assi homens, como mulheres, e mininos, e mui poucos escapam deste mal, porque o não sabem curar. Os que se sangram muito morrem, e da mesma maneira os que se não querem sangrar. Mas o mais certo remédio é sangrarem-se logo em lhes dando. Não se pegam estas bexigas aos portugueses, inda que tratem com os cafres doentes, salvo as crianças de tenra idade [幼時]. Em todas estas partes do Oriente não há, nem se sabe que houvesse, peste em algum tempo; o que deve ser por causa destes climas serem muito quentes, e gastarem os vapores, e ares grossos de que ordinariamente se gera este mal, mas em seu lugar há estas bixigas mui ordinárias, tão contagiosas como a peste. Algũas vezes vêm estas bixigas mais brandas, e menos perigosas, de modo que não matam.

#### 第四の懲罰/天然痘。これはペストのようなものである

このカフラーア〔カフル人の土地〕に生じた第四の災いにして試練は、天然痘という怖ろしい病であった。この病によってもおびただしい人々が息絶えた。この疫病は、この沿岸全域において文字どおりペステ〔ペスト＝黒死病〕の如きものだ。この病が発生した家では全員が死を免れない。男であろうが女であろうが子どもであろうが、この病は相手を選ばない。この災い

<sup>6</sup> 原綴り alqueire. 古い容積単位で、moio の 60 分の 1。alqueire は 13.215 リットルと 22.605 リットルの間で変動する。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

を逃れうる人はほとんどいない。この病を治す方法が、誰にもわからぬからだ。多量の瀉血<sup>しゃけつ</sup>をやった連中は死んでしまう。かといって瀉血を望まぬ者も、助かるわけではない。もつとも確かな治癒法は、発病したらただちに瀉血を行なうこと、これしかない。当地の天然痘は、ポルトガル人には感染しない。たとえ発病しているカフル人との接触があっても、だ。ただし幼い子は、そうはゆかない。オリエンテ〔東方。アフリカ東海岸以東の茫漠たる地域を漠然とさすか〕のあらゆる地方において、ペステは存在しない。いつの頃か存在したかどうか、定かではない。ペステが存在せぬわけは、オリエンテの風土が暑熱であるゆえに違いない。ペステという病の通常の発生要因となる水蒸気と、べつと重い空気が、そうした〔暑熱の〕風土によって霧消してしまうのであろう。がそのかわり、前述の天然痘はいともありふれており、しかもペステなみに感染力が強い。より穏やかというか危険性の比較的小さな天然痘も、ときおり発生する。それが原因となって人が死ぬことはない。

#### **Entaca, infirmitate perigosa.**

¶ Outra doença há em toda esta costa de Sofala, Rios de Cuama, e Moçambique, mui pegadiça a todo o género de homem, a qual é causada pelas negras destas terras, porque muitas delas, particularmente as escravas dos portugueses, se acertam de conceber, e não querem que o parto venha a lume, tomam ãa beberagem do sumo de ãa certa erva que nestas partes há, e logo movem com ela; mas depois do movito ficam tão apeçonhentas que, se não pegam aquele mal a algum homem por meio de ajuntamento, vão-se secando, e consumindo pouco, e pouco, até que morrem. Polo que depois de moverem logo buscam algum homem a quem peguem esta infirmitade, pera ficarem com saúde; e o homem fica tão apeçonhento que raramente escapa da morte, porque logo no mesmo instante se lhe causam tão grandes dores nas virilhas que delas morre em poucos dias. E já aconteceu a alguns destes, em acabando este acto desonesto, acabarem juntamente a vida. A esta infirmitade chamam *entaca*, e contra ela há um só remédio, que é beber o sumo de outra erva, contrapeçonha da que tomam as negras pera mover, com a qual beberagem escapam da morte. Mas pera aproveitar esta mezinha, há-de ser tomada no mesmo dia em que o mal se pegou, porque se lhe dilatam a cura logo lavra a peçonha até chegar ao coração, e já então não tem remédio. Destas duas ervas há muita quantidade na terra firme de Moçambique, mui conhecida de todos.

#### **危険な病, エンターカ**

このソファアラ沿岸全域、クアマの諸河川〔ザンベジ河ロー帯〕、そしてモサンビークには、もうひとつ別の疾病がある。この病はあらゆる男に伝染性を有する。この病は当地方の黒人女に

よつてもたらされる。というのは、彼女らの多く、とりわけポルトガル人の有する女奴隷の妊娠が発覚し、彼女が分娩に至らぬよう望むと、当地方にある薬草の一種を搾った汁をしこたま飲む。そうしてただちに胎児を流産させる。しかしこの墮胎の後、彼女らはすっかり毒に侵される。その毒を性交によって他の男へうつさぬ限り、彼女らは徐々に干からび、消耗する。死ぬまでそうした病態は続く。だから墮胎したら彼女らは、ただちに誰でもいいから男を探し出し、これに病を感染させる。みずからの健康を保つには、そうするしかない。病気をうつされた男は、重い毒気に侵され、死を免れることは稀である。合体のまさにそのさなか、男のまたぐらにすさまじい激痛が生じ、その激痛のため、男は数日を経ずして、死ぬ。こうしたよからぬ振舞いが終わったその刹那、併せて命も果てる、という、そんなことが現に男どもの一部に起きている。この病を〈エンターカ〉と呼ぶ。この病への対処法がひとつだけある。それは、上述の薬草とは異なる薬草から搾った汁を飲むことだ。この薬草には、黒人女が流産を促す際に服用する、あの薬草の毒を消すという作用がある。この薬草から搾った汁を飲むことにより、死を免れることが可能だ。ただしこの薬草の効能を引き出すには、これを、病気がうつされたまさにその日のうちに服用せねばならぬ。手当てを引き延ばすと、毒はからだ中にゆき渡り、ついには心の臓へ達する。そうなると救いはない。以上二種の薬草は、モサンビークの大陸側に大量にあり、その効能は皆に知られている。

### **Doença de cegueira.**

¶ Outro género de doença há somente em Moçambique, que vem a muitas pessoas, sem se saber de que procede, a qual é privar da vista de noite, não somente a portugueses, mas também a cafres, sem lhes causar dor, nem pena alguma mais que a de não poderem ver de noite; e esta cegueira lhes começa des' que se põe o sol até que torna a nacer, no qual tempo nenhũa cousa vêem, ainda que faça muito grande luar, e tão cegos ficam como se o fossem de sua nacença. Mas tanto que o sol nace, logo tomam a ver muito bem, e todo o dia vêem, inda que o sol ande encoberto. Dizem alguns que os fígados do cação, assados nas brasas, e comidos, são remédio com que se tira este mal. Outros dizem que, lavando os olhos com água dos bebedouros das pombas, também saram. Outros afirmam que todo o que tiver este mal, se se for de Moçambique pera outra qualquer terra, também se lhe tirará, e verá de noite como dantes.

### **盲目の病**

別の疾病がモサンビークにのみ存在する。多くの人がこの病に侵されているのだが、原因は判然としない。その病だが、夜になると視力を失うというもので、ポルトガル人のみならずカフル人も罹患する〔夜盲症〕。患者に苦痛は及ばないし、夜目が利かなくなる以外、何も困ること

はない。目が見えぬ状態は、日没をもって始まり、陽が昇ると終わる。陽が沈んでいる間は何も見えない。煌々たる月明かりがあっても、である。目が見えぬさまときたらまことに徹底しており、まるで生まれたときからそうであるかのようだ。しかし陽が昇るや、ただちにはっきりと見え出す。そして陽のある間は見えている。陽がたとえ雲間に隠れても、である。ある者は言う。カサン〔原綴り Cação、サメ類の総称〕の肝臓を炭火で焼いて食べる。それがこの病を抜く薬だ、と。またこう言う者もいる。鳩の水飲み場に溜まる水がある。それで両眼を洗うと、これまたぐあいがよくなる、と。さらにこう主張する者もいる。この病に罹ったら、皆、モサンビークを去り、どこかよそへ移ればいい、そうするとこの病は抜けてしまう、そして以前と同様、夜目は利くようになるだろう、と。

¶ Quando os cafres têm dores de barriga, cingem-se com ãa corda, ou correia de casca de pau, como de trovisco, e com ela apertam muito a barriga. E quando lhes dói a cabeça fazem o mesmo, atando ãa fita destas pola testa, mui apertada, e dizem que assi se lhes tiram as dores, e saram mais depressa, e nisso têm muita fé.

カフル人たちは腹痛を覚えると、一本の紐<sup>ひも</sup>、もしくは、たとえば、トロヴィスコ<sup>7</sup>のような木の皮からこしらえた鎖をみずから〔の体〕に巻きつけ、強く腹部を圧迫する。頭が痛いときも同じことをやる。彼らはそうしたものから鉢巻をこしらえ、きつく額を圧迫する。彼らが言うには、そうすると痛みがとれ、症状が速く去るのだ、と。彼らはこれを固く信じている。

---

<sup>7</sup> 学名 *Daphne gnidium*。地中海沿岸に生育する常緑の灌木で、葉は幅狭く、深みのある暗緑色であり、毒を有する。白い、芳香のある花をつける。

Liuro terceiro da Ethiopia Oriental:

bem em toda a viagē, sem auerem mister outra agoada.

¶ De modo que destas palmeiras se colhe mantimēto, como são cocos, maçãs, palmitos, & cardos, quatro castas de vinho, & tres de vinagre, mel, & açucar, azeite, agoa, madeira, caruão, cordas, vellas pera embarcações, cobertura pera casas, & lenha pera queimar. Allem de tudo isto, os palmares em si são fermosíssimos, & delectosos à vista, porque todo o anno estão verdes, & frescos, & fazem muy boas sombras. E com rezão podem estas aruores ser tidas pelas melhores, & mais proueitosas, q̄ ha no mundo.

Palmeiras brauas.

¶ Outra casta de palmeiras brauas ha polos matos de Sofala, pequenas, & delgadas, a q̄ os Cafres chamão Muchindos, & os Portuguezes palmitos: das quaes se colhe vinho em certos meses do anno, cortandolhe o olho, donde corre muito em panellas, q̄ lhe põe debaixo. Os olhos destes palmitos tambem se comem, mas nelles, nem o vinho que delles se tira he tão bom como o das outras palmeiras.

¶ No reino de Mexico ha outras aruores, quasi semelhantes

a estas nossas palmeiras mãfas nos proueitos, & frutos, q̄ dellas se colhem, as quaes se chamaõ Maguey, & dellas se tira vinho, vinagre, & mel: de suas folhas curtidas na agoa como linho, se faz muito fio, de que teçem mantas, & fazem linhas, com que as cozem, & cordas fortes, & de muita dura. Os troncos destas aruores seruem de vigas, cõ que emmadeiraõ as casas, & as folhas de sua cobertura em lugar de telha. Das pontas destas folhas se tiraõ hũas agulhas duras, como ferro, cõ que cozem os vestidos, çapatos, & alparcas, que fazem do mesmo fio destas aruores: mas as nossas palmeiras lhe fazem ventagem em muitas cousas.

Maguet de Mexico.

¶ CAPITULO DOZE:

¶ De quatro pragas gēraes, que ouue nesta Ethiopia em nossos tempos, & de tres generos de doenças muy ordinarias nesta costa.

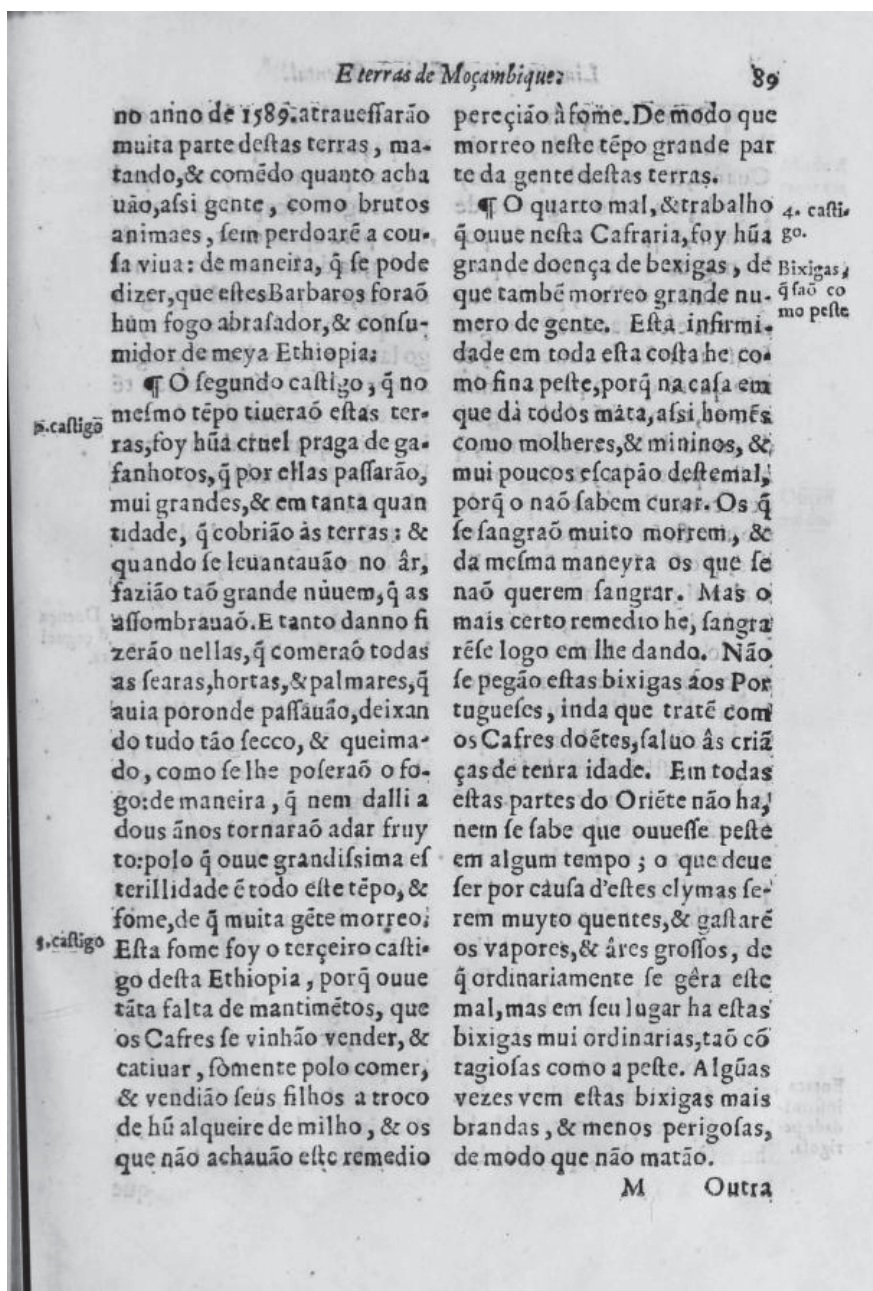


¶ Vatro castigos, ou pragas gēraes ouue nesta costa em nossos tempos. A primeira foi a guerra dos Zimbàs, de que ja fallei atras, que

Primeiro castigo.

1. p. 112 no.

p.88v. 右段。Primeiro castigo. 1ª parte, liu. 2. [第一の懲罰。第一部第二卷参照]



p.89. 左段。2. castigo. [第二の懲罰]/3. castigo. [第三の懲罰]

右段。4. castigo. [第四の懲罰]/Bixigas, que são como peste. [天然痘。これはペストのようなものである]

Liuro terceiro da Ethiopia Oriental:

¶ Outra doença ha em toda esta costa de Sofala, rios de Cuania, & Moçambique, muy pegadiça a todo o genero de homem, a qual he causada pelas negras destas terras, porque muitas dellas, particularmente as escrauas dos Portugueses, se acértão de conceber, & não querê que o parto venha a lume, tomão húa beberagem do çumo de húa certa herua, q̄ nestas partes ha, & logo moquem com ella; mas depois do moquito ficão tão apeçonhentas, que se não pegão aquelle mal a algum homem por meyo de a juntamento, vaõ se secundo, & consumindo pouco & pouco, atè que morrem. Pello que depois de mouerem logo buscão algum homê, a que peguem esta infirmitade, pera ficarem com saude: & o homê fica tão apeçonhento, que raramente escapa da morte, porque logo no mesmo instante se lhe causão taõ grandes dores nas virilhas, que dellas morrem em poucos dias. E já aconteçeo a algũs destes em acabando este acto deshonesto, acabarem juntamente a vida. A esta infirmitade chamaõ Entaca, & contra ella ha hu n sò remedio, que he beber

Entaca, infirmitade perigosa.

o çumo de outra herua contra peçonha da que tomão as negras pera mouer, com a qual beberagem escapão da morte. Mas pera aproueitar esta mezinha, ha de ser tomada no mesmo dia, em que o mal se pegou porq̄ se lhe dilatão a cura, logo laura a peçonha atè chegar ao coração, & já então não té remedio. Destas duas heruas ha muita quantidade na terra firme de Moçambique, muy conhecida de todos.

¶ Outro genero de doença ha sòmente em Moçambique, que vem a muitas pessoas, sem se saber de que procede, a qual he, priuar da vista de noite, não sòmente a Portugueses, mas tambem a Cafres, sem lhe causar dor, nê pena algũa, mais q̄ a de não poderê ver de noite: & esta çegueira lhe começa desque se poê o sol, atè que torna a nacer, no qual tẽpo nenhũa cousa vem, ainda que faça muito grande luar, & tão çegos ficão, como se o fossem de sua naçença. Mas tanto que o sol naçe, logo tornão a ver muyto bem, & todo o dia vem, ainda que o sol ande encuberto. Dizem algũs, q̄ os figados do Cação assados nas brasas, & comidos, saõ remedio com que

Doença de çegueira.

p.89v. 左段。Entaca, infirmitade perigosa. [危険な病, エンターカ]

右段。Doença de çegueira. [盲目の病]



que se tira este mal. Outros dizem, q̄ lauando os olhos com agoa dos bebedouros das p̄bas, tambem saraõ. Outros affirmãõ, que todo o q̄ tiuer este mal, se se for de Moçambique pera outra qualquer terra, tãbẽ se lhe tirará, & verã de noite como d'antes.

¶ Quando os Cafres tẽ dores de barriga, cingemse com hũa corda, ou correa de casca de p̄o, como de trouisco, & cõ ella apertaõ muito a barriga: & quando lhe doe a cabeça fazem o mesmo, atando hũa fita destas pola testa muy apertada, & dizem que assi se lhe tiraõ as dores, & saraõ mais de pressa, & nisso tem muita fẽ.

¶ CAPITVLO XIII.

*¶ Dos Elefantes desta Cafra-  
ria, & de como os Cafres os  
matãõ.*



M toda esta Cafra-  
ria se criaõ muitos  
elefantes muy grã-  
des, & brauos: os  
quaes saõ muy daninhos nas  
sementeiras do milho, & arroz  
o qual comem, & pisaõ, de que  
os Cafres recebem muita per-  
da. Allem disso fazem grande  
danno nos palmares, derrubã  
dolhe as palmeiras, pera lhe

comerem os palmitos. Os Cafres lhe armãõ de muitas maneiras. A principal, & mais ordinaria, & menos perigosa pera os caçadores, he fazẽdolhe couas polos matos, muito cõpridas, fundas, & largas, cubertas de rama, & de herua com terra por cima, de modo que se não enxergue a coua, onde se os elefantes caem, naõ se podem mais tirar, & alli os matãõ sem trabalho.

Modo de  
caçar ele-  
fantes.

¶ Outro modo tem de caçar os elefantes, & he quando estaõ dormindo, o q̄ he facil de saber, porq̄ o elefante quando dorme resona, & rõca taõ grandemente, que o ouuem de muyto longe, & tem o sono tãõ carregado, que se chegaõ os Cafres caçadores a elle muyto manso, sem serem sentidos, & metemlhe pelas virilhas hũa azagaya, cujo ferro he de meyo palmo de largo, ao modo de choupa, & de cóprido dous palmios, sayda na ponta muy aguda, & cortadora, feita somẽte pera esta caça dos elefantes. E depois de lha pregarem, fogem muyto ligeirãmente, & embrenhaõse polos matos, atẽ que se vão pera suas casas. O elefante ferido acorda logo com a dor da ferida, & leuan

Outro  
modo.

○  
○  
○  
○  
○  
○  
○  
○

M 2 tan

## CAPÍTULO XIII (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

### **Dos elefantes desta Cafraria, e de como os cafres os matam.**

第13章(第一部第三卷) 当カブラリーアの象について、また、カフル人はこれをどのようにして殺すか

#### **Modo de caçar elefantes.**

¶ Em toda esta Cafraria se criam muitos elefantes mui grandes, e bravos, os quais são mui daninhos nas sementeiras do milho, e arroz, o qual comem, e pisam, de que os cafres recebem muita perda. Além disso fazem grande dano nos palmares, derrubando-lhes as palmeiras, pera lhes comerem os palmitos. Os cafres lhes armam de muitas maneiras. A principal, e mais ordinária, e menos perigosa pera os caçadores, é fazendo-lhes covas polos matos, muito compridas, fundas, e largas, cobertas de rama, e de erva com terra por cima, de modo que se não enxergue a cova onde, se os elefantes caem, não se podem mais tirar, e ali os matam sem trabalho.

#### **象を狩る方法**

カブラリーアにはその全域に、たいそう大きくしかも獐猛な象が多数生息する。象たちは、モロコシや米の種子を蒔く場所における大変な害獣である。彼らはそうしたものを食べ、踏みつけ、ゆえにカフル人は大きな損失を被る。象たちはさらに、椰子畑にも甚大な損害を及ぼす。そこで椰子の実をふるい落とし、実の中で一番おいしいところ——パルミット——を食べてしまうのだ。カフル人はこうした象を退治するため、幾つものやり方で仕掛けをこしらえる。最も主要かつ日常的で、しかも狩人にとって危険の小さなやり方は、森一帯に穴を幾つか掘る、というものだ。この穴はたいそう長く、深く、しかも幅広い。蔓草や草つるくさでこれを隠し、上からは土をかぶせておく。一見したところ穴とは判らぬようにしておくのだ。象は穴に落ちれば、ここから抜け出すことはできず、カフル人はそこで象を殺す。

#### **Outro modo.**

¶ Outro modo têm de caçar os elefantes, e é quando estão dormindo, o que é fácil de saber, porque o elefante quando dorme rressona, e ronca tão grandemente que o ouvem de muito longe, e tem o sono tão carregado que se chegam os cafres caçadores a ele muito manso, sem serem sentidos, e metem-lhe polas virilhas ùa azagaia, cujo ferro é de meio palmo de largo, ao modo de choupa, e de comprido dous palmos, saída na ponta mui aguda, e cortadora, feita somente pera esta caça dos elefantes. E depois de lha pregarem, fogem mui ligeiramente, e embrenham-se polos matos, até que se vão pera suas casas. O elefante ferido acorda logo com a dor da ferida, e

levantando-se com grande fúria, acaba de meter a azagaia polas tripas, carregando sobre ela quando se levanta, e logo começa de se vaziar em sangue. E desta maneira vai fugindo, e bramindo polos matos, até que se lhe esgota o sangue todo, e morre. No dia seguinte tornam os caçadores ao lugar onde o feriram, e o vão seguindo polo rasto do sangue, até que dão nele, ou morto de todo, ou já tão desmaiado, e desfalecido que se não pode bulir, e ali o acabam de matar. Este modo de caçar é mais perigoso aos caçadores, porque algúas vezes acham os elefantes pouco feridos, e são mortos por eles. Esta caçada fazem os cafres ordinariamente em noites de luar, assi pera que vejam os elefantes, e os vão seguindo, e vigiando, até que se deitem a dormir, como é seu costume, como também pera verem o modo que hão-de ter em chegar a eles pera os ferir.

### 象を狩る別の方法

彼らにはもうひとつ、象を狩る方法がある。それはすなわち、象が眠っているすきに狩る、というものだ。象が眠っているかどうか、を知るのは容易である。象は眠るとき寝息を立てる、つまり大きな鼻<sup>いびき</sup>をかくのだが、その音は遠くからも聞こえるのだ。彼らの眠りはたいそう深い<sup>また</sup>ため、カフル人の狩人は気づかれることなく、そりそりと象に近づける。そして象の股<sup>また</sup>のつけ根にアザガイア〔原綴り azagaya. アフリカ先住民の使う槍〕を一本ぶち込む。その刃は幅半パルモ<sup>8</sup>、チョウパ槍のようであり、長さは二パルモ。はなはだ鋭利な切っ先を有し、切れ味は格別で、象を狩るという狙いに特化して作られている。象にアザガイアをぶち込むと、彼らは一散に逃げる。そして森の中に姿を隠し、やがて家に辿り着く。傷つけられた象は痛みのため、たちまち目を覚ます。怒り狂って立ち上がりはするが、これが、アザガイアを臍物により深く食い込ませる、という結果を招く。立ち上がる時、アザガイアにみずからの重さが加わるのだ。たちまち全身から血が抜け出す。このようになりながらも、手負いの象は暴れ廻り<sup>ほうこう</sup>、咆哮しつつ、森をさまよう。やがてすべての血が抜け、死に至る。翌日、狩人は象を傷つけた場所へ戻る。そして血痕を追跡し、やがて象にゆき当たる。そのときの象の様態だが、絶命しているか、さもなくば、失神し、仮死状態に陥ってまったく動けずにいるか、である。狩人はそこで象にとどめを刺す。この狩りのやり方は、狩人にとってより危険が大きい。なぜなら、象の負った傷がはなはだ浅く<sup>いびき</sup>、狩人のほうが象に殺される、ということがままあるからだ。このような象狩りであるが、月の明るく輝く夜に行なうのが通例だ。月の明るく輝く夜、というのは、ひとつに、彼らの習いに則り、象を観察し、その跡を追い、監視を緩めぬまま、象の寝込みを待つのに適しているため、いまひとつに、象を傷つけにこれに近づく際、いかなる方法をとるべきか、見極めをつけやすいためだ。

<sup>8</sup> 原綴り meyo palmo. パルモは広げた手のひらの、その親指の先から小指の先までで測る長さの単位。約 22cm.

### **Os Cafres comē carne de elefante.**

¶ Tanto que os caçadores têm morto algum elefante, vão chamar toda sua família, parentes, e amigos, e vêm-se todos ao lugar onde o elefante jaz morto, e ali o comem assado, e cozido, sem fazerem outra cousa em todo este tempo. E posto que o elefante morto logo aos três dias cheira tão mal que não há podê-lo sofrer, nem por isso deixam de o comer, até que não fica dele cousa algũa, como cães encarniçados em corpo morto.

#### **カフル人は象の肉を食う**

象を仕留めるや狩人は、家族やら親戚やら友達を呼びにゆく。皆これに応え、象が死んで横たわっているところへ集まってくる。そしてそこで象を焼いたり煮たりして食う。この間はずっとこれにかかりきりであり、ほかのことは何もしない。殺された象は、三日も経るとただならぬ悪臭を放ち、到底我慢できぬほどであるが、だからといって食うのをやめるような彼らではない。やがて象は跡形もなく姿を消す。彼らがこれを食うさまときたら、まさに死体に群がる犬同然だ。

### **Marfim principal veniaga desta costa.**

¶ A causa principal por que os cafres armam aos elefantes, e os matam é pera lhes comerem a carne, e depois disso pera lhes venderem os dentes, que é o marfim, de que se fazem todas as peças, e brincos que da Índia vêm pera Portugal, e é a principal veniaga desta costa, da qual se levam cada ano pera a Índia mais de três mil arrobas. Porque, estando eu nesta fortaleza de Sofala, vi um ano ao Capitão, que então era dela Garcia de Melo, mandar ao Alferes-mor, Capitão de Moçambique seu cunhado, cem bares de marfim, que tem cada um dezasseis arrobas, e por aqui se pode colegir todo o mais marfim que se tira desta costa, onde há grande trato dele, como é no rio de Lourenço Marques, no Cabo das Correntes, e rio de Inhanbane, nas ilhas d'Angoche, Rios de Cuama, na costa de Quirimba, e na de Melinde. Donde claramente se deixa ver o grande número de elefantes que há nesta Etiópia, e a multidão que deles se mata cada ano, pois de cada um se não tiram mais que dous dentes.

#### **この沿岸の主要商品、象牙**

カフル人が象に罠を仕掛けこれを殺す動機であるが、それは主としてその肉を食うことにあり、食べたあとは、その歯——すなわち象牙である——を売ることにある。象牙からはあらゆる品物やら玩具が作られ、これらがインディアからポルトガルへもたらされる。象牙こそこの

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

沿海部の主たる商品であり、これが毎年インディアへ三〇〇〇アローバ<sup>9</sup>もたらされる。だから以下のようなことが起こる。私が当ソファエーラの要塞にいたある年、当時その要塞のカピタンであったガルシーア・デ・メーロが、モサンビークのアルフェレス・モール〔警備隊長〕にしてカピタン〔司令官〕、しかも義理のきょうだいにあたる男へー〇〇バール<sup>10</sup>の象牙を送付した。私はそれを目撃したのだ。一バールとは一六アローバ。この一事から、当沿海部で採取される全象牙のおびただしさ、そしてその取引の盛大なさまが推して知られるのである。ロウレンソ・マルケスの河<sup>11</sup>においてしかり、コレンテス岬<sup>12</sup>やイニャンバネの河<sup>13</sup>においてしかり、アンゴージャの島々<sup>14</sup>においてしかり、クアマの諸河川においてしかり、キリンバとメリンデ〔マリンディ。現ケニア南東部にある港市〕それぞれの沿海においてしかり。一頭の象から採取される歯〔門歯。すなわち牙〕は二本にすぎぬから、当エチオピアに棲息する象の頭数がいかにおびただしいか、彼らのうち毎年殺されるものがいかに多数に達するか、がはっきり見てとれるのだ。

### Grâdes dêtes de elefante.

¶ Estes dous dentes são as presas da boca com que trabalham, e pelem. Estão metidos no queixo de baixo mais de um côvado, e saem-lhes fora da boca outro tanto, e mais; e alguns deles são muito grossos, e muito maiores do que tenho dito, particularmente os de elefante velho. Garcia de Melo, de quem agora falei, teve dous dentes na sua feitoria, ambos de um elefante, que pesavam um bar, que são dezasseis arrobas, oito cada dente. Estes vi eu, e outros muitos quasi tão grandes como estes.

### 象の巨大な歯——牙——

<sup>9</sup> 原綴り tres mil arrobas. アローバは重さを表わす古い単位。32 アラテール (arratéis) もしくはキンタール (quintal) の四分の一。14.688kg。現在は概算 15kg とされる。

<sup>10</sup> 原綴り cem bares. サントスは、「一バールとは一六アローバ」と述べているから、100 バールは 1600 アローバ。アローバを概算 15kg とすると、100 バールは 24 トン弱となる。

<sup>11</sup> 原語 rio de Lourêço Marques. ロウレンソ・マルケスはモサンビーク共和国の現首都マプート (Maputo) のこと。ロウレンソ・マルケスには大西洋が流入する。そこへ注ぐ最も大きなテンベ (Tembe) 河を指すか。

<sup>12</sup> 原語 cabo das Corêtes. 現イニャンバネ市の東南。「海流の岬」の名のとおり、沖合を高速で南流するモサンビーク海流が走り、北行するにせよ南行するにせよ、船の難所として知られた。そのため、カレイラ・ダ・インディア (大航海時代のポルトガル船がリスボア=ゴア間で行き交った海上ルート) では、16 世紀早くから、往路・復路ともに、マダガスカル の東方を通過する航路 (いわゆる“外ルート”) が選択されるようになる。

<sup>13</sup> 原語 rio de Inhâbane. イニャンバネは現モサンビーク共和国イニャンバネ県の県都。イニャンバネ湾が内陸深く入り込み、そこへムタンバ (Mutamba) 河が注ぐ。

<sup>14</sup> 原語 ilhas d'Angoxa. アンゴージャは、現モサンビーク共和国ナンブーラ県の一都市アンゴージェ (Angoche) であろう。市に面する湾内に大小幾つかの島々があり、これらを指すか。

これら二本の歯(門歯。すなわち牙)は、それによって働き争うための牙にほかならない。これらの歯(牙)は下顎に一コヴァド<sup>15</sup>以上食い込み、口の外にそれと同じくらい、あるいはそれ以上突き出ている。たいそう太いものもあり、しかも今述べた長さを優に超える。年老いた象のそれは特にそうだ。さきほど話題にしたガルシーア・デ・メーロであるが、彼はみずからの商館に歯(牙)を二本置いていた。いずれも一頭の象から採ったもの。二本で一バール<sup>16</sup>すなわち一六アローバの重さがあった——それぞれ八アローバずつ——。彼の商館に置いてあった二本の歯(牙)も、それらとほぼ同じくらい大きなものも、私は確かにこの目で見たのだ。

¶ Todos os elefantes se deitam no chão, e dormem deitados, e roncam muito alto, como tenho dito, donde se vê bem claramente o engano que alguns tiveram em dizerem que os elefantes não se deitavam, e por isso dormiam encostados às árvores, e que pera os matarem lhas serravam polos matos onde andavam, deixando-as em pé meias serradas, pera que encostando-se os elefantes a elas pera dormir caíssem juntamente no chão com eles: e assi por serem mui pesados, e não se poderem levantar, os matavam. O que tudo é falso, porque inda que os elefantes sejam muito grandes, e pareçam carregados, contudo têm muita força pera se poderem menear, e andam, e correm muito, como lhes eu vi fazer muitas vezes.

いかなる象も地面に横になるし、横になって眠る。そして上述のとおり、大きな軒を立てる。であるから、次のように言う者が一部にいるけれど、その言い分は誤りであると、はっきり判る。彼らの言いようはこうだ。象は横になれない。だから眠るときは、木にもたれかかって眠る。象を殺そうとするなら、彼らの歩き廻る森一帯の木々に鋸のこぎりを入れる。つまり、木々に半ばまで鋸を入れ、これらが中途半端に立っておくようにする。そうして象が眠ろうとして木にもたれかかったとき、象もろとも木々が倒れてしまうようにする。かくして、図体がきわめて重く、みずから起き上がれぬ象を、苦もなく殺すのだ、と。しかしこれはすべて嘘である。なるほど象は巨体だし、動きも一見鈍重そうだ。しかしそれにもかかわらず、象にはみずからの巨体をコントロールする力が充分あり、歩くも走るも自在である。そうであることは私が幾度も目撃した。

### Elefâtes de Ceylão.

¶ Os elefantes de Ceilão são mais pequenos de corpo que todos os das outras partes, segundo dizem. Mas são mais nobres, e mais reais que todos, e de maiores forças. Polo que todos lhes têm

<sup>15</sup> 原綴り hum couado. コヴァドは長さを表わす古い単位。0.66m.

<sup>16</sup> 240kg弱。雄では最大350cmに達する門歯もあるそうだから、サントスの記事は決して虚偽とは言えないであろう。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

sujeição, e medo. Isto se tem experimentado em algũas partes da Índia, onde se ajuntaram uns, e outros.

### **Elefante branco.**

El-Rei de Camboja dizem que teve antigamente um elefante branco, outros que o Rei de Sião, sobre que houve grandes guerras com o de Pegu, pretendendo cada um que fosse seu, por ser ùa cousa nunca vista. Dizem os cafres que os elefantes vivem trezentos anos, e que não geram, nem parem senão de cem anos pera cima, porque até então são crianças, de cada parto parem um filho, o qual criam a duas tetas, que têm como vacas.

### **セイランの象**

噂によると、セイラン〔セイロン。現スリランカ〕の象は、他のいかなる地方の象にもまして体つきは小さいそうだ。しかし、いかなる象よりも優雅で気品があり、しかも力強い。したがって彼らには、誰もが一目置き、畏怖の念を懐く。このことは、いろいろな象が集まってくるインディアの幾つかの地方で経験されてきたとおりだ。

### **白い象**

伝聞によると、カンボジアの王はかつて白い象を一頭、シアン〔シャム〕の王は別に数頭、それぞれ所有していたという。そしてこの白い象をめぐり、ペグー<sup>17</sup>の王とカンボジアの王との間に大きな戦いが勃発した。白い象を——こんな獣は見たことがないという理由で——己がものにしようと、それぞれがたくらんだのだ。カフル人は、象は三〇〇年生きると言う。一〇〇歳を超すまでは子にすぎず、生殖も出産もしないのだそうだ。一度の出産で一頭の子を産み、その子を雌牛にあるようなふたつの乳房で育てる。

---

<sup>17</sup> 現ミャンマー中南部、ペグー管区の首都。1369年、ペグー王朝のビンニャウー王によって王城が築かれ、タウンゲー朝のバインナウン王がここを都とした16世紀、最盛期を迎える。

que se tira este mal. Outros dizem, q̄ lauando os olhos com agoa dos bebedouros das pōbas, tambem sarão. Outros affirmão, que todo o q̄ tiuer este mal, se se for de Moçambique pera outra qualquer terra, também se lhe tirará, & verá de noite como d'antes.

¶ Quando os Cafres tē dores de barriga, cingemse com hũa corda, ou correa de casca de pao, como de trouisco, & cō ella apertaō muito a barriga: e quando lhe doe a cabeça fazem o mesmo, atando hũa fita destas pola testa muy apertada, & dizem que assi se lhe tiraō as dores, & sarão mais de pressa, & nisso tem muita fê.

### ¶ CAPITVLO XIII.

¶ Dos Elefantes desta Cafraria,  
& de como os Cafres os matão.



M toda esta Cafraria se criaō muitos elefantes muy grãdes, & brauos: os quaes são muy daninhos nas sementeiras do milho, & arroz o qual comem, & pisaō, de que os Cafres recebem muita perda. Allem disso fazem grande danno nos palmares, derrubã dolhe as palmeiras, pera lhe

comerem os palmitos. Os Cafres lhe armão de muitas maneiras. A principal, & mais ordinaria, & menos perigosa pera os caçadores, he fazêdolhe couas polos matos, muito cōpridas, fundas, & largas, cubertas de rama, & de herua com terra por cima, de modo que se não enxergue a coua, onde se os elefantes caem, naõ se podem mais tirar, & alli os matão sem trabalho.

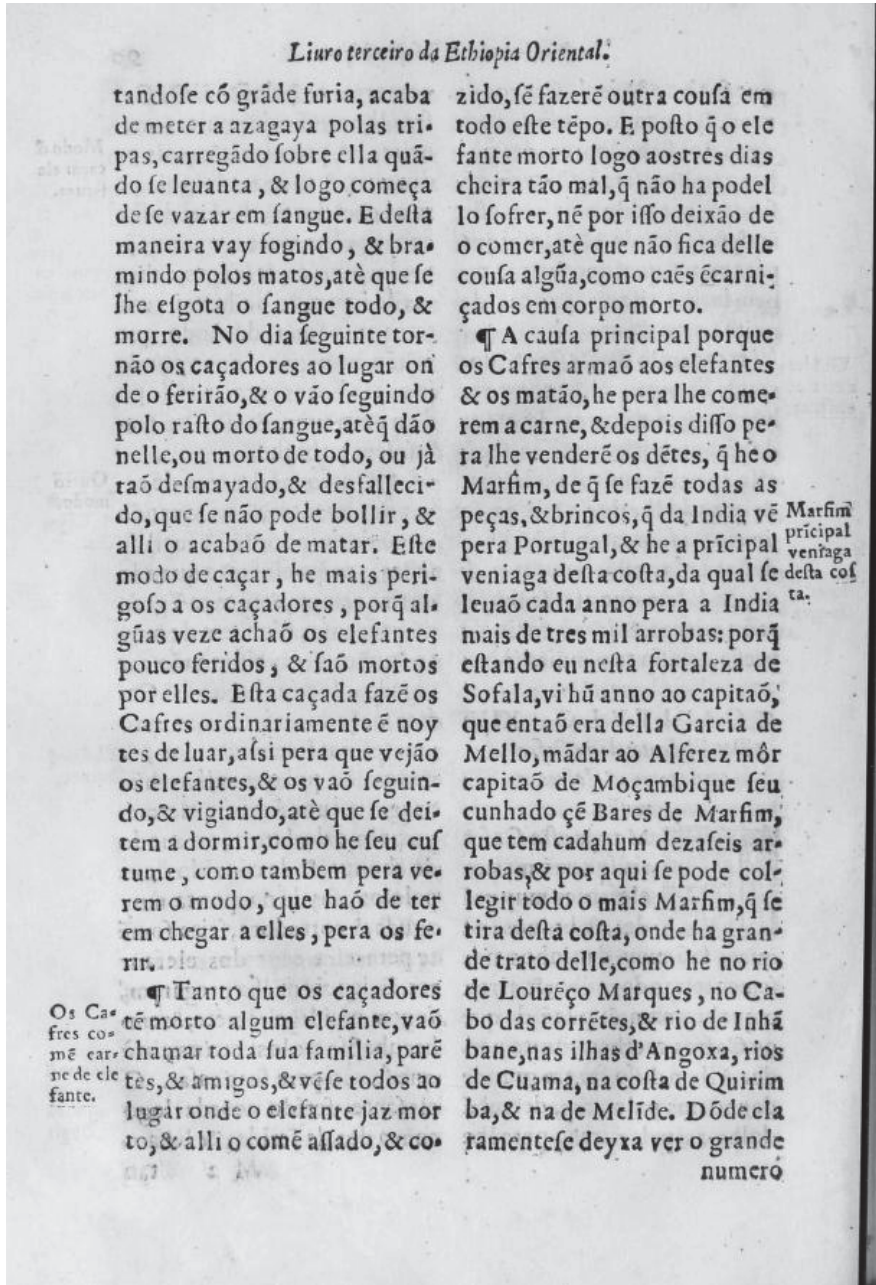
¶ Outro modo tem de caçar os elefantes, & he quando estaō dormindo, o q̄ he facil de saber, porq̄ o elefante quando dorme resona, & rōca taō grandemente, que o ouuem de muyto longe, & tem o sono taō carregado, que se chegaō os Cafres caçadores a elle muyto manso, sem serem sentidos, & metemlhe pelas virilhas hũa azagaya, cujo ferro he de meyo palmo de largo, ao modo de choupa, & de cóprido dous palmios, sayda na ponta muy aguda, & cortadora, feita somente pera esta caça dos elefantes. E depois de lha pregarem, fogem muyto ligeiramente, & embrenhaōse polos matos, até que se vão pera suas casas. O elefante ferido acorda logo com a dor da ferida, & leuan

Modo de  
caçar ele  
fantes.

Outro  
modo.

M 2 tan





p.90v. 左段。Os Cafres comẽ carne de elefante. [カフル人は象の肉を食う]

右段。Marfim principal veniaga desta costa. [この沿岸の主要商品、象牙]

numero de elefantes, q̄ ha nesta Ethiopia, & a multidão que delles se mata cada anno, pois de cadahum se não tiraõ mais, qu e dous dentes.

Grãdes  
dêtes de  
elefante.

¶ Estes dous dêtes são as presas da boca, cõ que trabalhão & pellejaõ. Estão metidos no queixo de bayxo mais de hum couado, & saemhe fora da boca outro tanto, & mais: & algũs delles são muito grossos, & muito mayores do que tenho dito, particularmente os de elefante velho. Garcia de Mello, de quem agora falley, teue dous dentes na sua Feitoria, ambos de hum elefante, q̄ pesauão hum Bar, que são deza feis arrobas, oito cada dente. Estes vi eu, & outros muitos quasi tão grandes como estes.

¶ Todos os elefantes se deitão no chão, & dormem deitados, & roncão muyto alto, como tenho dito; donde se vê bem claramente o engano, que algũs tiueraõ em dizerem, que os elefantes não se deitauão, & por isso dormião encoistados às aruores, & que pera os matarem, lhas ferrauão polos matos onde andauão, deixandoas em pè meas ferradas, pera que encoistadose os elefantes a ellas pera dormir, caissẽm junta

mente no chão cõm elles: & al si por serem muy pesados, & não se poderẽ leuantar, os matauão. O q̄ tudo he falso, por que inda que os elefantes se jão muito grandes, & pareçãõ carregados, com tudo tem muita força pera se poderem menear, & andão, & correm muito, como lhe euvi fazer muitas vezes.

¶ Os elefantes de Ceylão são mais pequenos de corpo, q̄ todos os das outras partes, segundo dizem. Mas são mais nobres, & mais Reaes, q̄ todos, & de mayores forças. Polo que todos lhe tem sujeição, & medo. Isto se tem experimentado em algũas partes da India, onde se ajũtarãõ hũs, & outros. El Rey de Camboja dizem que teue antigamente hũ elefante branco, outros que o Rey de Syaõ, sobre que ouue grandes guerras com o de Pegũ, pretendendo cadahum que fosse seu, por ser hũa coufa nunca vista. Dizem os Cafres, q̄ os elefantes viuẽm trezentos annos, & que não gêraõ, nem parem, senão de çẽm annos pera cima, porque atẽ entãõ são crianças. De cada parto parẽ hum filho, o qual criãõ a duas tetas, que tem como vaccas.

Elefãtes  
de Cey-  
lão.

Elefantẽ  
branco.

p.91. 左段。Grãdes dêtes de elefante. [象の巨大な歯——牙——]

右段。Elefãtes de Ceylão. [セイランの象] / Elefante branco. [白い象]

CAPÍTULO XIII (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

**De um caso que sucedeu em Mocambique na morte de um elefante, e do caçador que o matou.**

第14章(第一部第三卷) ある象の死と、その象を殺した狩人の死に際してモサンビークで起こった事件について

¶ Estando eu ãa tarde com outros religiosos na terra firme de Moçambique, chamada Cabaceira, em um palmar do nosso convento, subitamente veio dar connosco um elefante bravo, e mui assanhado, dando grandes bramidos, do qual não pudéramos escapar com vida, se nos vira; mas quis Deus antes que chegasse nos metemos na ermida que ali temos, e ele foi passando sem nos ver. Daí a perto de meia hora veio da mesma parte um cafre gentio, chorando, e lamentando a morte de um seu irmão que lhe matara aquele elefante. E o caso foi que este morto era um cafre macua, grande caçador de elefante, o qual a noite atrás foi seguindo dous deles polo rasto, até que se deitaram a dormir dentro no mato espesso, como é seu costume; e depois de dormirem, e roncarem, chegou o caçador a um deles, e meteu-lhe com ambas as mãos ãa azagaia polas virilhas, e fugiu pera sua casa.

モサンビークの大陸側、カバセイラというところにある、わが修道院の椰子畑で、ある午後、私が他の修道僧と一緒にいたときのこと。突然兇暴な象が一頭、我らのほうへ向かってきた。象ははなはだ興奮し、大きな咆哮の声を上げていた。もしも象が我らを視線に捉えていたならば、到底我らは逃げおおせず、命を落としていたであろう。しかしデウスのお計らいにより、象が我らに近づいてくる前に、我らがそこに所有している礼拝堂に逃げ込むことができた。象は我らと視線を交わさぬまま、そこを通過していった。およそ半時間ばかり経った頃、同じ場所からひとりの異教徒のカフル人がやってきた。彼は号泣していた。きょうだいの死を悲しんでのことであった。彼のきょうだいは今しがた、我らのそばを通過していった象のために殺されたのだ。事のいきさつはこうである。殺されたカフル人はマクア族に属するカフル人であって、象狩りの名手として名を馳せていた。昨晚のことだが、この狩人は三頭の象を発見、うち二頭を追跡していた。そうして彼らが象狩りのときいつもそうしているように、象が深い森の中で眠りに落ちるのを待った。象が眠りに落ち、軒を立てはじめたのを確かめると、狩人はひそやかに、二頭のうちの二頭へ近づいた。そして両手を振り上げ、アザガイアを象の股に突き立てた。そのまま彼は家へ逃げ帰った。

**Prudencia de elefante.**

O dia seguinte tomou com este seu irmão que o chorava em busca do elefante ao lugar onde o deixou ferido, e achando grande quantidade de sangue, foram ambos pelo rasto dele dar com os elefantes junto de ãa ribeira que perto dali estava, onde viram estar o ferido à borda d'água, em pé sem se bulir, já mui desfalecido do muito sangue que se lhe tinha ido; e o outro estava dentro na ribeira, tomando água com a tromba, e borrifando o rasto do elefante ferido muito amiúde, por que não desmaiasse de todo. Isto estiveram vendo os dous irmãos grande espaço de tempo, sem serem vistos, nem sentidos dos elefantes; mas enfadando-se o caçador de esperar tanto que o ferido morresse, se chegou mais perto dele, e deu-lhe um brado pera que se inquietasse, e virasse pera quem lhe bradava, porque entendia que tanto que se bulisse havia de cair logo no chão de fraqueza, e assi o acabaria de matar, como costumava fazer a outros. A cujas vozes acudiu o outro que não estava ferido, e antes que o negro caçador se lhe escondesse, foi dele visto, e morto. E neste mesmo tempo caiu no chão o elefante ferido, querendo-se bulir, e morreu juntamente com o caçador que o matou. Com cujas mortes ficou o elefante são mui assanhado, e veio fugindo, e bramindo polos palmares que perto estavam, como tenho dito.

### 象の思いやり

翌日になった。結局死んでしまうことになる狩人のカフル人は、きょうだいを連れて、象を傷つけたところへ戻った。きょうだいとは、我らのもとへ泣きながらやってきたあの男だ。狩人はそこでおびたしい血液を確認、ふたりしてその血痕を辿ってゆくと、ついに二頭の象を見つけた。そこは、狩人が象を傷つけた地点から、さほど遠くない小川の畔である。ふたりが確かめると、手負いの象は身動きもせず、そこにいた。もう一頭は小川に入り、鼻で水を吸い上げ、傷ついた象の顔にたびたび水を振りかけていた。そうして、仲間が完全に失神してしまわぬよう思いやっていたのだ。このようすをふたりのカフル人は長い間、じっと見つめていた。象に発見されず、その気配を察せられもしなかった。しかし、狩人のカフル人に辛抱の限界が来た。象がこと切れるのを、もうこれ以上待っておれなくなった。彼は象にさらに接近した。そして一声叫び声を上げた。手負いの象をぎょっとさせ、叫び声を上げた人間へ、その注意を向けさせようとしたのだ。象はちよつとでも身動きすると、たちまち弱って、地に倒れてしまうだろう。倒れたところまでとどめを刺す。そういう目算が狩人にはあった。これは象を狩るときに用いる彼らの常套手段である。ところが、狩人の声に気づいた無傷のほうは猛然、狩人へ突進してきた。黒人の狩人は身を隠すいとまもなく、その象によって発見され殺された。まさにこれと時を同じくして、手負いの象は地に倒れた。そこから身を動かそうとしたのが祟<sup>たた</sup>ったのだ。象は、自分を殺した狩人とまさに時を同じくして、死んだわけだ。仲間の象が死んだことに、

元気なほうは怒り狂い、椰子畑を咆哮しつつ、あてもなく逃げ廻ったあげく、我らのそばを通りかかった次第だ。そのことは先述のとおりである。

¶ Vendo nós o caso que o cafre nos contou, fomos ver os dous mortos, elefante, e caçador, seguindo-nos mais de vinte cafres, e índios, e alguns mestiços que se ajuntaram daqueles palmares, e tanto que chegámos a eles, mandámos aos cafres que enterassem o caçador no mesmo mato onde estava morto. Depois disso começaram cortar no elefante pera levar cada um pera casa seu quinhão. E sobre esta repartição houve tantas brigas, e diferenças entre os cafres que, se nós ali não estivéramos, se houveram de matar. De modo que estivemos ali a requerimento dos mesmos cafres, como juizes, repartindo-lhes os lugares no corpo do elefante, onde cada um fosse cortando, e tirando a carne que quisesse, ficando pera o irmão do morto os dentes, e ãa perna inteira, e a tromba, que é a cousa que os caçadores mais estimam, porque com ela ganham muito, levando-a polas aldeias, e lugares dos cafres, e mostrando-a, como em Portugal fazem com pele do lobo, ou de raposa, e os cafres vendo-a lhes dão sempre algũa cousa, polo ódio que têm aos elefantes, por serem muito daninhos, e destruidores de suas searas.

きょうだいを象に殺されたカフル人の語るこの事件を聞いて、我らはふたつの死体を確認しにゆくことにした。ひとつは象の骸<sup>むくろ</sup>であり、もうひとつは狩人の屍<sup>しかばね</sup>だ。我らにはカフル人やインディオ[ここでは先住民の意味か]、それにミスティーソ[メスティーソ。ポルトガル人と先住民の混血であろう]数人など総勢二〇人を超える連中がついてきた。ふたつの死体があるところに着くと、我らはさっそく彼らに対し、狩人が殺されたその森に彼の屍を埋葬するよう命じた。これを済ませると、それぞれの取り分として、家へ持ち帰る肉を象から切り出す作業が始まった。この象肉の分配をめぐり、カフル人の間で喧嘩や言い合いが派手に演じられた。その場にもし我らがいなかったら、分配をめぐり、彼らは殺し合いへと突き進んだに違いない。だから我らは、いわば審判として、ほかならぬカフル人の要請に従い、その場に立ち会ったわけだ。そうして我らの手で、象の体の部位を、ここはお前、そこは君、というふうに分けた。そうして、彼らはおのおの指定された部位を切り取り、欲しいと思う肉を持ち帰った。亡くなった狩人のきょうだいには、象の歯[門歯。すなわち牙]と一本の脚、さらには鼻がまるまる配分された。象の鼻は狩人が何より重んずるものだ。というのは、この鼻を持っていれば、彼らに儲けが転がり込むこと疑いなし、であるからだ。彼らは象の鼻をカフル人の村々なり在所へ持ち帰り、それを誇示する。ちょうどポルトガルで、狼もしくは狐の毛皮を見せびらかすのと、よく似ている。象の鼻を一目見たカフル人は、それを持参した者へいつもなにか祝儀を与える。このようなことを行なうのは、彼らが象に対して懐くただならぬ嫌悪感のせいだ。みずから耕す畑へ損害を与え、

これを破壊する害獣として、カフル人は象を怖れている。

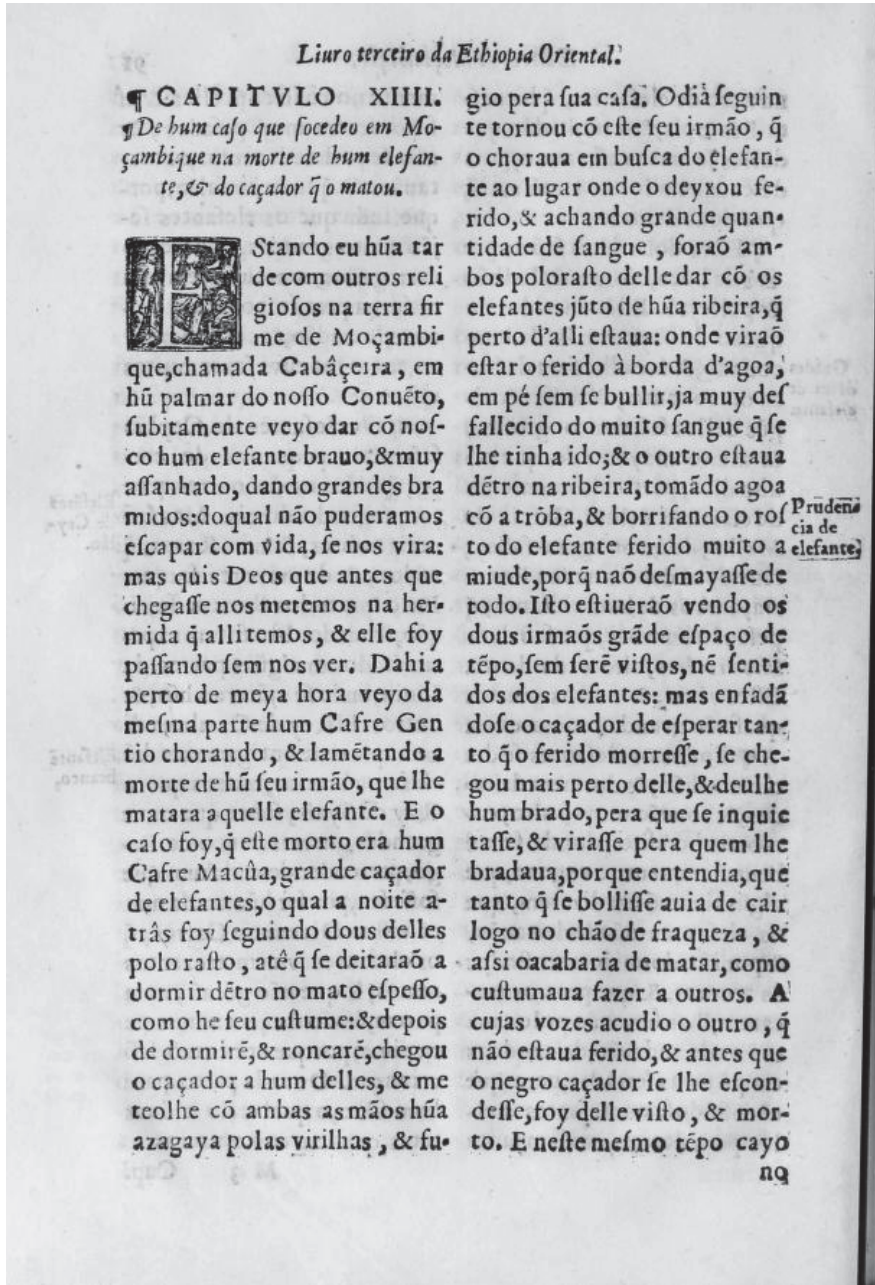
¶ Este elefante jazia de barriga, e os cafres lhe fizeram no costado duas portinholas, tirando-lhe primeiro daqueles lugares dous pedaços de couro, como duas adargas, que tinham de grossura mais de um dedo. E depois lhe foram tirando a carne, e quebrando as costas com machados, até que lhe fizeram duas janelas mui grandes, por onde lhe tiraram as entranhas. As tripas ordinárias tinham mais de dous palmos de roda. O coração era muito maior que um grande bucho de boi, e assi quando o abriram polo meio lançou de si quatro, ou cinco canadas de sangue. Os fígados, e bofes eram tamanhos que se não pode crer sua grandeza. Depois que lhe tiraram as entranhas, entraram dous cafres dentro polas janelas, como quem entra em ãa casa, e lá por dentro, envoltos no sangue, e gordura, andavam com grande festa tirando-lhe as banhas, sevo, e infinita gordura, de que encheram muitas gamelas, e outros por fora cortavam a carne, de modo que estavam dez, ou doze cafres a cortar nele, e outros tantos se ocupavam em acarretar a carne para suas casas. A carne destes elefantes toda é entressachada com gordura, ou sevo, do modo da carne de porco, porque tem ãa cama de fevara, e outra de gordura. E destas camas tem três de carne, e três de gordura entre a pele, e as costas, que virá toda junta a ser quasi meio palmo de carne.

死んだ象は腹ばいに横たわっていた。カフル人は象の背に〈小窓〉をふたつこしらえた。そしてそれらの箇所から、皮の切れ端を二枚——まるで二枚の楯だ——剥ぎ取る。皮の厚さは、一デード<sup>18</sup>を優に超える。そのあと肉の取り出しにかかる。斧で背を叩き割り、ついには背に巨大な〈窓〉をふたつ作り、その〈窓〉から臓物を引きずり出す。通常の腸のぐるりは二パルモを超えていた。心臓は、雄牛の大きな胃袋よりずっと大きかった。中ほどで胃袋を断ち割ると、四ないし五カナダの血液<sup>19</sup>がわっと噴き出た。肝臓も脾臓<sup>ひぞう</sup>も、ちょっと信じがたいほどの巨大さだ。臓物をことごとく引き出すと、〈窓〉からカフル人がふたり〈内〉に入った。まるで一軒家に入る人のようだ。内に入り込むと、大量の血と脂肪にまみれ、大いにお祭り騒ぎしつつ、そこから獣脂やラード、無尽蔵とすら思える脂身を掻き出すことに精を出す。すると、大きな甕<sup>かめ</sup>がすぐ満杯となる。象の〈外〉では、別のカフル人が肉の解体に余念がない。一〇人から一二人が肉の切り出しにあたるかたわら、ほぼ同数が、切り出した肉を家へ運ぶことに忙しい。こうした象の肉であるが、全体に、脂肪もしくは獣脂が走っているさまは、豚肉のようであり、fevera

<sup>18</sup> 原綴り hum dedo. 指一本の幅からおおよその数値を得る、そのための計測単位。

<sup>19</sup> 原語 quatro, ou cinco canadas de sangue. カナダは液体の古い容量単位。カナダは 4 quartilhos (クアルティエーリヨ)もしくは 2 litros (リットル)に相当する。

の層と、脂肪の層が交互に合わさっている〔fevera という語彙が意味不詳なのだが、脂身ではない肉、と仮に推定しておく〕。皮膚と背骨の間に、そうした肉の層が三つ、脂肪の層が三つあり、その皮膚は、肉と一体になる形で、その厚さほぼ半パルモに達するであろう。



p.91v. 右段。Prudencia de elefante.〔象の思いやり〕

no chão o elefante ferido, que  
rendose bolir, & morreo junta  
mente cõ o caçador, que o ma  
tou. Com cujas mortes ficou  
o elefante faõ muy affanhado,  
& veyo fugindo, & bramindo  
pelos palmares que perto esta  
uão, como tenho dito.

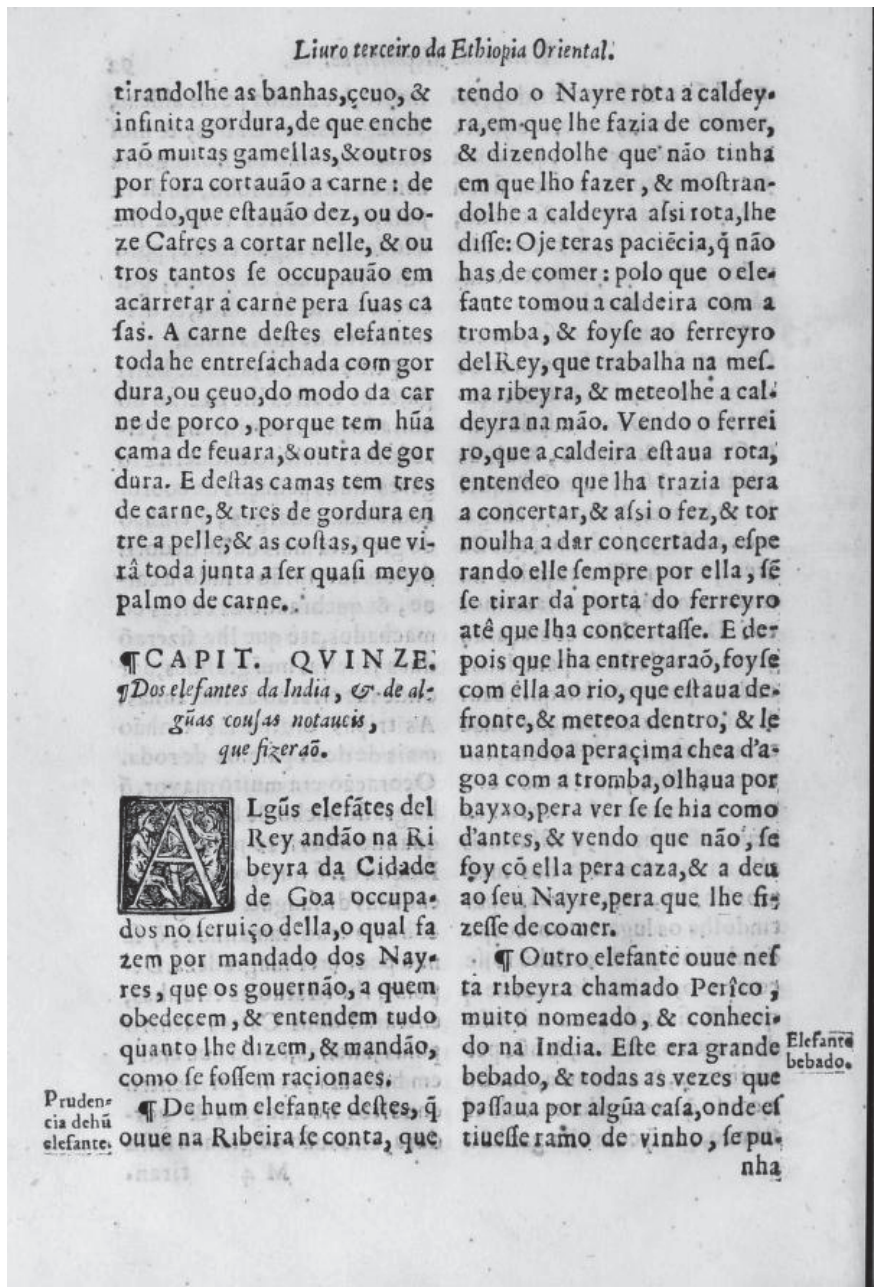
¶ Vendo nõs o caso, que o  
Cafre nos cõtou, fomos ver os  
dous mortos, elefante, & caça  
dor, seguindonos mais de vin  
te Cafres, & Indios, & algũs  
Mistiços, q̄ se ajutãrãõ d'aquel  
les palmares, & tanto q̄ chega  
mos a elles, mandamos aos Ca  
fres q̄ enterrassẽ o caçador no  
mesmo matõ, onde estãua mor  
to. Depois distõ começãrãõ  
cortar no elefante pera levar  
cadahũ pera casa seu quinhãõ.  
E sobre esta repartiçãõ ouue  
tantas brigas & differenças, en  
tre os Cafres, que se nõs all  
nãõ estiuermos, se oueraõ de  
matar. De modo, q̄ estiuemos  
alli a requerimento dos mes  
mos Cafres, como juizes, repar  
tindolhe os lugares no corpo  
do elefante, onde cadahũ fosse  
cortando, & tirando a carne q̄  
quisesse, ficando pera o irmão  
do morto os dentes, & hũa per  
na inteira, & a tromba, que he  
a cousa q̄ os caçadores mais ef  
timãõ, porq̄ com ella ganhãõ

muito, leuandoa polas aldeas,  
& lugares dos Cafres, & mol  
trandoa, como em Portugal fa  
zem cõ pelle de lobo, ou de ra  
posa, & os Cafres vendoa lhe  
dãõ sempre algũa cousa, polo  
odio q̄ tem aos elefantes, por  
ferem muito daninhos, & des  
truidores de suas searas.

¶ Este elefãte jazia de barri  
ga, & os Cafres lhe fizeraõ no  
cõstado duas portinholas, ti  
rãdolhe primeiro daquelles lu  
gares dous pedaços de couro,  
como duas adargãs, q̄ tinhãõ  
de grossura mais de hũ dedo. E  
depois lhe forãõ tirãdo a car  
ne, & quebrando as costas cõ  
machados, atẽ que lhe fizeraõ  
duas janellas muy grandes, por  
onde lhe tirãrãõ as entranhas.  
As tripas ordinãrias tinhãõ  
mais de dous palmos de roda.  
O coraçãõ era muito mayor, q̄  
hũ grãde bucho de boy: & afst  
quando o abriãõ polo meyo,  
lançou de si quatro, ou cinco  
canadas de sangue. Os figados  
& bofes eraõ tamanhos, q̄ se  
nãõ pode crer suagrãdeza. De  
pois q̄ lhe tirãrãõ as etranhas,  
entrãrãõ dous Cafres dentro  
polas janellas, como quẽ entra  
em hũa casa, & là por dentro  
enuoltos no sangue, & gor  
dura, andãuãõ cõ grande festa

M 4 tiran.





p.92v. 左段。Prudencia de hũ elefante.〔思慮深い象〕

右段。Elefante bebado.〔酒呑み象〕

## CAPÍTULO XV (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

### Dos elefantes da Índia, e de algũas cousas notáveis que fizeram.

#### 第15章(第一部第三卷) インディアの象について、また彼らがしてみせた幾つかの注目すべきことどもについて

¶ Alguns elefantes d'el-Rei andam na Ribeira da cidade de Goa ocupados no serviço dela, o qual fazem por mandado dos naires que os governam, a quem obedecem, e entendem tudo quanto lhes dizem, e mandam, como se fossem racionais.

ゴア市のリベイラ(ゴア——現ゴア・ヴェーリャ——の中心部で、マンドヴィ河に面する広場)には国王(ポルトガル国王フィリーペ二世。イスパニア国王としてはフェリーペ三世)の所有する象が数頭おり、彼らは市の仕事に忙しく立ち働いている。この仕事を彼らはナイレ<sup>20</sup>たちの命令によって行なう。ナイレは彼らを統制し、彼らはナイレに服従している。ナイレが言いつけ命ずることを彼らはすべて理解する。そのさまは、まるで理性の持ち主であるかのようなようである。

#### Prudencia de hũ elefante.

De um elafante destes, que houve na Ribeira, se conta que tendo o naire rota a caldeira em que lhe fazia de comer, e dizendo-lhe que não tinha em que lho fazer, e mostrando-lhe a caldeira assi rota, lhe disse: *Hoje terás paciência, que não hás-de comer*. Polo que o elefante tomou a caldeira com a tromba, e foi-se ao ferreiro d'el-Rei, que trabalha na mesma Ribeira, e meteu-lhe a caldeira na mão. Vendo o ferreiro que a caldeira estava rota, entendeu que lha trazia pera a consertar, e assi o fez, e tornou-lha a dar consertada, esperando ele sempre por ela, sem se tirar da porta do ferreiro até que lha consertasse. E depois que lha entregassem〔初版本では entregaraõ. 直説法・完全過去・三人称・複数〕, foi-se com ela ao rio que estava defronte, e meteu-a dentro, e levantando-a pera cima cheia d'água com a tromba, olhava por baixo, pera ver se se ia como dantes, e vendo que não, se foi com ela pera casa, e a deu ao seu naire, pera que lhe fizesse de comer.

#### 思慮深い象

リベイラにいたこうした象の一頭について、語り継がれていることがある。あるときのこと、ナイレは象へ餌を与えるための鍋がぼろぼろになっていることに気づいた。そこで象に語りかけた。餌をやりたいがね、きょうはだめだ。いい鍋がない、と。そしてぼろぼろになった鍋を象

---

<sup>20</sup> 原綴り Nayres. マラヤーラム語の *naiar* に由来。インド亜大陸西岸マラバール地方に住むインド人の軍事貴族(DPLP)。

に見せ、言った。「きょうは我慢なさい。[この鍋で]食べちゃだめだ」と。すると、象は鍋を鼻で取り上げ、リベイラで働く国王お附きの鍛冶屋のもとへ向かった。そして鍛冶屋の手にその鍋を握らせた。鍛冶屋は鍋がぼろぼろであると認めると、なるほど、修理して欲しくて持ってきたのだな、と了解した。そしてそのとおりにしてやった。やがて鍛冶屋は、修理を施した鍋を象へ戻した。鍋の修理が済むまで、象は、鍛冶屋の戸口をかたときも離れず待ち続けた。鍋を引き渡してもらおうと、象はすぐ前の河べりへ出向いた。河に鍋を浸し、水をいっぱい満たした鍋を鼻で持ち上げると、下へ視線を投げ、鍋が以前のようにぼろぼろではないことを確かめた。問題なしと見ると、鍋をぶら下げて家へ戻り、これをナイレへ差し出したのである。さあ食べ物をください、と言わんばかりに。

### Elefante bebado.

Outro elefante houve nesta Ribeira chamado Perico, muito nomeado, e conhecido na Índia. Este era grande bêbado, e todas as vezes que passava por algũa casa onde estivesse ramo de vinho, se punha à porta, e metia dentro a tromba, e não se bulia dali até lhe não darem de beber. Os taverneiros, que já lhe sabiam esta manha, tanto que o viam à sua porta, lhe deitavam vinho na tromba, que ele aparava pera isso, e nela o recolhia, e bebia, fazendo muita festa, e depois disso fazia seu caminho. Algũas pessoas que lhe sabiam esta habilidade lhe davam dinheiro pera um quartilho, ou meia canada de vinho, o qual dinheiro ele tomava na tromba, e levava logo à taverna, e dando-o ao taverneiro, aparava a tromba pera lhe medirem nela o vinho; e se lho não dava muito bem medido, que transbordasse por fora da medida, não o queria tomar.

### 酒呑み象

リベイラには、ペリーコと名乗る別の象がいた。インディアでしばしば話題に上る、著名な象だ。このペリーコだが、なんと大変な酒呑みなのである。店の前に酒場の標識である枝（月桂樹の枝）があろうものなら、必ずその扉に取りつき、中に鼻を差し入れる。そして吞ませてくれぬうちには、いっかなそこを立ち去ろうとしない。酒場の主人なら、ペリーコの性癖をとくと承知しているので、彼が来ているのを見たら、ただちに鼻に酒を注ぎ込んでやる。ペリーコは鼻先を平らにして酒をもらう。鼻に酒を収め、飲み干し、大喜びのしぐさをしてみせる。その後やっと歩き出す。ペリーコにこの特技があるのを知る人々は、一クアルティーリョ、あるいは半カナード（カナードについては前述）分の酒代をペリーコに与える。そのかねをペリーコは鼻で携え、ただちに酒屋へ出向く。酒屋のおやじにかねを渡すと、ペリーコは鼻先を平らにして、その中で酒を量ってもらう。おやじがきちんと量りもしない分量を与え、定量を超えた酒が溢れても、ペリーコはその分を決して受け取ろうとはしなかった。

Todos os elefantes têm certo tempo em que andam no cio, no qual ficam muito mais bravos, e furiosos do costumado. E até estes mansos, que andam em Goa, neste tempo ficam mui bravos, e não há pessoa a que não remetam, e tratem muito mal se a podem apanhar. Mas os naires, a quem somente têm obediência, os prendem com ãs cadeias de ferro polos pés em ãs árvores fora da cidade, onde estão presos todo o tempo do cio, e ali lhes dão de comer, e com estarem neste tempo mui furiosos, e bravos, nem isso basta pera deixarem de reconhecer a obediência que têm a seus naires, pera com os quais sempre estão mansos, e humildes.

どの象も、一定期間の発情期がある。その間、彼らは普段以上に性格が荒くなり、兇暴化する。ゴアにいて人に馴らされている象さえ、この期間には、より気が荒くなる。もし手にかける人がいれば、必ずこれに突っかかり、手ひどい目に遭わせようとする。しかしナイレにだけは、唯一服従する。ナイレは、鉄の鎖でもって街外れの樹々に〔象の〕脚をつなぐ。象は発情期間、ずっとこうして拘束され、そこで食べ物をもらう。この時期、きわめて兇暴化し、気の荒くなる象たちであるが、にもかかわらず、ナイレに懐く従順さを忘れることは、決してない。ナイレに対して彼らは常に温和で控え目である。

### **Gratidão de hum elefante.**

Sucedeu um ano que este elefante Perico, dando-lhe esta paixão, foi fugindo pola cidade, bravo como um touro, e muita gente após ele correndo, e bradando que fugissem dele, e passando desta maneira pola porta de ãa taverna onde lhe costumavam dar de beber, achou ãa criança da mesma casa na rua, e conhecendo-a, teve-lhe tanto respeito que nenhum mal lhe fez, antes a tomou com a tromba mansamente, e a pôs sobre o telhado da casa, que era térrea, no que fez grande bem à criança, porque além de a não matar a livrou de a poder pisar a multidão de gente que após ele vinha correndo desatentadamente.

### **象の恩返し**

ある年、かの象——ペリーコ——に次のようなことが起こった。誰かがペリーコの機嫌を乱したのであろう、彼は街中を暴れ廻った。その兇暴なさまはまるで闘牛同然であった。おびたらしい人々がペリーコのあとを駆け、奴から逃げろと叫び続けた。このままペリーコは、ある酒屋の戸口にさしかかった。そこはペリーコがいつも酒を吞ませてもらっている店であった。ペリーコは、通りにその店の子がいるのを認めた。ペリーコは確かに店の子だと認識すると、この子にただならぬ敬意を払い、いかなる危害も加えなかった。それどころか、鼻で優しく抱き上げ、その店——平屋であった——の屋根にこの子を置いてやった。この振舞いは、この子

にとって大いなる幸いであった。なぜならペリーコは、彼を殺さなかつたばかりか、ペリーコの後ろから無秩序に駆けてきた群集がこの子を踏み殺してしまうのを、すんでのところで救ってやったからだ。

### **Os elefâtes sentē as afrontas que lhe dizem.**

De outro elefante da Ribeira se conta que, andando um dia ajudando a lançar os navios da armada ao rio, lhe mandou o naire que pusesse a cabeça na popa de um navio, e que o lançasse ao rio, como costumam sempre fazer. Pôs o elefante a cabeça no navio, e fez força pera o lançar por duas vezes; mas não pôde, porque o navio era muito grande, e pesado. Polo que pelejou o naire com ele, chamando-lhe fraco, e mole, que sendo vassalo d'el-Rei de Portugal tão poderoso não prestava pera deitar um navio ao mar. O elefante tomou estas palavras em grande afronta, e em caso de honra. Polo que remeteu terceira vez ao navio, e pondo-lhe a cabeça, fez tanta força que o lançou ao mar, e juntamente arrebentou, e caiu logo morto.

#### **象は向けられた侮辱に反応する**

リベイラの別の象について、次のようなことが語られている。ある日、その象が船隊に加わる船々を河へ下ろす手伝いに立ち働いているとき、ナイレは彼に命じていわく、<sup>とも</sup>艦に頭をしつかり押しつけろ、船を河へ押し出せ、お前らが常々やっているように、と。彼は船に頭を押しつけ、二度ばかり、これを河へ押し出そうと力を込めた。が、どうしても押し出せない。というのは、船体がたいそう大きく、しかも重かったからだ。で、ナイレはこの象に喧嘩を吹っかけた。彼のことを弱虫よ、軟弱な奴よ、と呼ばわったのだ。さらに言った。お前は強大なるポルトガル王の家来であろうが。しかるに、船をたかが一艘、海へ押し出すこともできぬとは。役立たずめが、と。さて象である。彼はナイレのこの言葉をこの上ない侮辱というか、名誉に関わる挑発と受け取った。象は船に三度目の挑戦をしかけた。船体に頭を押しつけ、渾身の力を込めると、ついに船を海〔実際はマンドヴィ河〕へ押し出すことに成功した。と同時に、象は精根尽き、その場に倒れ、死んでしまった。

### **Entendē & fazē o que o Nayre lhe diz.**

Um elefante novo do tamanho de um boi veio na nau S. Simão, em que eu vim da Índia pera Portugal no ano do Senhor de 1600, o qual mandava o Conde D. Francisco da Gama, Vice-Rei da Índia, pera el-Rei Filipe nosso senhor. Este elefante entendia quanto lhe dizia o naire que vinha com ele, não somente na língua em que os criam, mas também na língua portuguesa. Algũas vezes me sucedeu ir onde estava este elefante. O qual em me vendo, ensinado polo naire, me fazia muitas

medidas com a mão para trás, como nós fazemos com o pé, e grande inclinação com a cabeça, e me tomava a mão com a tromba, e a beijava.

### 象はナイレの言いつけを理解し実行する

大きな雄牛ほどの若い象が、ナウ船サン・シマン号に乗せられた。実は私もこのナウ船に乗り、主の年1600年、インディアからポルトガルへ戻ったのだ。この象であるが、インディア副王のドン・フランシスコ・ダ・ガマ伯がわが君なるフィリーペ王<sup>21</sup>へ遣わしたものだ。この象は、みずからに付き添うナイレの言うことならそのすべてを理解した。育てられた言葉であろうとポルトガル語であろうと、変わりはない。私自身、この象がいるところへ何度か出向いたことがある。彼は、私を認めるや、ナイレから教えられたとおり、片手〔前肢〕を後ろに引き、私に向かって、幾度もお辞儀を繰り返した。まるで我らが脚を後ろに引いてそうするように。そればかりではない。頭を深々と傾げ、鼻でもって私の手を取り、私の手に〔接吻〕したのである。

### Chorão, & deitão lagrimas.

Algũas vezes que o naire deixava este elefante só, indo pola nau fazer o que era necessário, dava tão grandes bramidos, e urros que atroava toda a nau, e chorava lágrimas que lhe corriam dos olhos, como um minino podia fazer por sua mãe, ou ama. Bailava ao som que o naire lhe fazia com um ferro, movendo todos os quatro pés, e meneando o corpo, e coleando a cabeça, como que gostava do som que lhe faziam. Outra mudança fazia também, que era bater com ãa só mão no chão, a compasso, e pancada do som que lhe faziam, sem errar passo, com os mesmos meneios do corpo, e cabeça, e mostras de bailar.

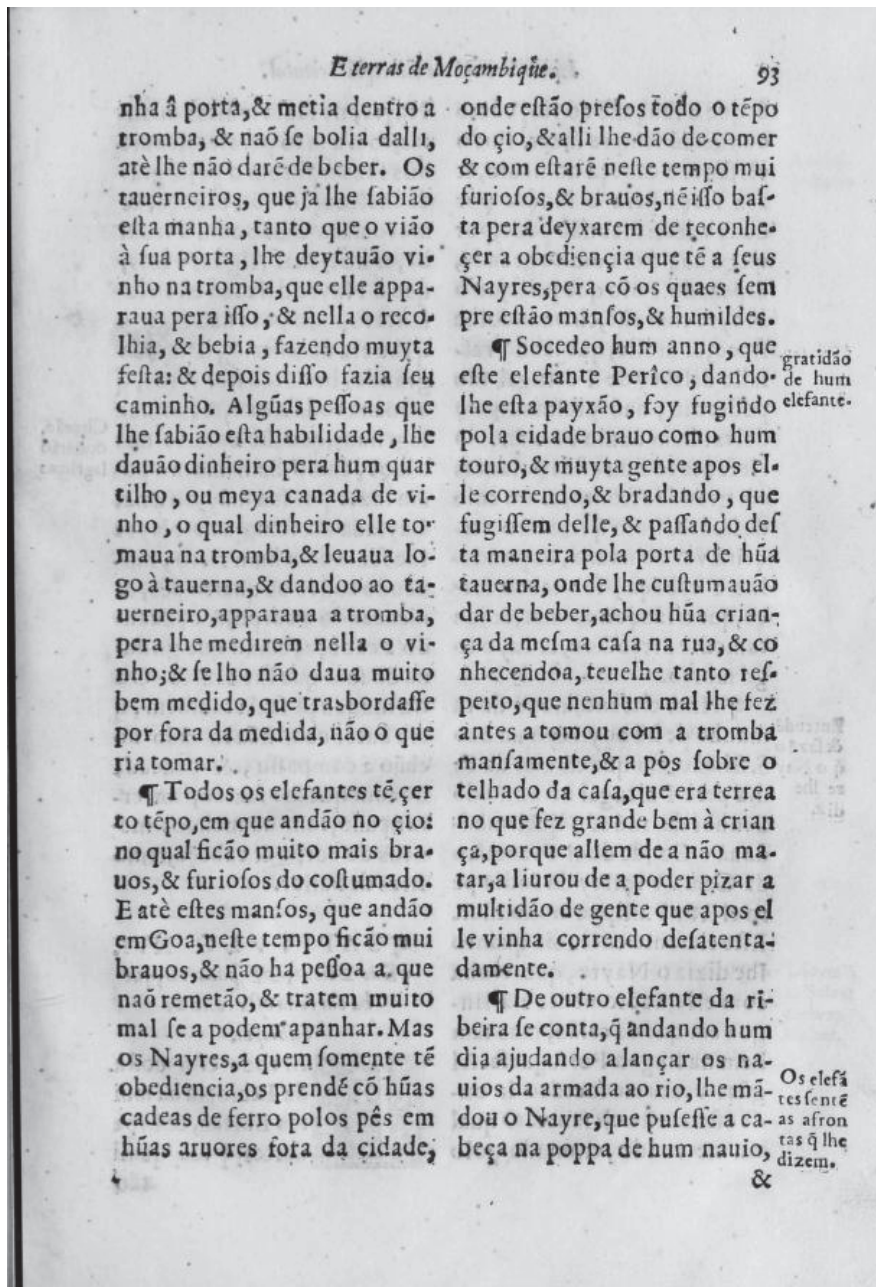
### 象は泣き、涙を流す

ときおりナイレが船内を巡って用務をこなすので、象は独りぼっちにされる。そのたびに彼は、ものすごい唸り声や吼え声を上げる。その声の凄まじさときたら、船全体に響き渡るほどであった。そして両眼から大粒の涙をこぼして大泣きする。幼児が母親か乳母を求めて泣き喚くように。彼は〔舞踏〕もしてみせた。そのさま、ナイレが鉄棒で打ち鳴らすその音に合わせ、四肢すべてを動かし、胴を揺すり、頭をくねらせて、まるで自分に向かい打ち鳴らされる音が愉快でならぬ、という風情であった。この象は、別の動きも演じた。それは、ただ一本の手〔前肢〕を地面に打ちつける、というものだ。ナイレが彼のため鳴らす鉄棒の音に調子を合わせ、その打音に反応し、少しもステップを誤らない。このときも、胴や頭を同様に揺さぶり、踊りの

---

<sup>21</sup> 原語D. Philippe nosso sñor. ポルトガル国王フィリーペ二世。イスパニア国王としてはフェリーペ三世。在位1598～1621年。

真似事をした。



p.93. 右段。gratidão de hum elefante. [象の恩返し]/Os elefantes sentẽ as afrontas que lhe dizem. [象は向けられた侮辱に反応する]

Libro terceiro da Ethiopia Oriental:

& que o lançasse ao rio, como  
cultumaõ sempre fazer. Pos o  
elefante a cabeça no nauio, &  
fez força pera o lançar por  
duas vezes: mas não pode, por  
que o nauio era muito grande,  
& pezado. Polo que pellejou o  
Nayre com elle, chamandolhe  
fraco, & molle, que sendo vas-  
fallo del Rey de Portugal tão  
poderoso, não prestaua pera  
deitar hum nauio ao mar. O  
elefante tomou estas palauras  
em grande afronta, & em caso  
de honra. Polo q̄ remeteo ter-  
ceira vez ao nauio, & pondo-  
lhe a cabeça, fez tanta for-  
ça, que o lançou ao mar, & jun-  
tamente arrebêtou, & cayo lo-  
go morto.

Entendê  
& fazê o  
q̄ o Nay-  
re lhe  
diz.

¶ Hum elefante nouo do ta-  
manho de hū boy veyo na nao  
S. Simão, em que eu vim da In-  
dia pera Portugal no anno do  
Senhor de 1600. o qual man-  
daua o Conde dom Francisco  
da Gama Viçerey da India pe-  
ra el Rey Philippe nosso fñor.  
Este elefante entendia quanto  
lhe dizia o Nayre, que vinha  
com elle, não somente na lin-  
goa em que os crião, mas tam-  
bem na lingoa Portuguesa. Al-  
gũas vezes me socedeo ir on-  
de estaua este elefante. O qual  
em me vendo, ensinado polo

Nayre, me fazia muitas mesu-  
ras, com a mão peratras, como  
nós fazemos com o pê, & grã-  
de inclinação có a cabeça, &  
metomaua a mão com a trom-  
ba, & a bejaua. Algũas vezes,  
que o Nayre deixaua este ele-  
fante sô, indo pola nao fazer o  
q̄ lhe era necessario, daua tão  
grandes bramidos, & vrrros, q̄  
atroaua toda a nao, & choraua  
lagrimas, que lhe corrião dos  
olhos, como hum minino po-  
dia fazer por sua mãy, ou ama.  
Baylaua ao som que o Nayre  
lhe fazia com hum ferro, mo-  
uendo todos os quatro pês, &  
mencando o corpo, & collean-  
do a cabeça, como que gosta-  
ua do som que lhe fazião. Ou-  
tra mudança fazia tambem, q̄  
era bater com hũa sô mão no  
chão a compasso, & pancada  
do som que lhe fazião, sem er-  
rar passo, com os mesmos me-  
neos do corpo & cabeça, & mo-  
stras de bailar.

Chorão,  
& deitão  
lagrimas

¶ CAPITVLO XVI:

¶ Das Baleas, & Espadartes, que  
ha em toda esta costa da  
Ethiopia.



M toda esta costa  
da Ethiopia ha mui-  
tas Baleas, & Espa-  
dartes, q̄ são quasi  
tão

p.93v. 左段。Entendê & fazê o que o Nayre lhe diz。〔象たちはナイレの言いつけを理解し実行する〕  
右段。Chorão, & deitão lagrimas。〔象たちは泣き、涙を流す〕



CAPÍTULO XVI (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

**Das baleias, e espadartes que há em toda esta costa da Etiópia.**

第16章(第一部第三卷) このエチオピアの沿岸全域に棲息する鯨とカジキについて

**Briga de Balea cõ Espadarte.**

¶ Em toda esta costa da Etiópia há muitas baleias, e espadartes, que são quasi tão grandes como elas. Os quais dous gêneros de peixe, todas as vezes que se encontram, pelem cruelmente, e as mais das vezes sobre a água. E a causa é porque o espadarte, quando pelega, pera ferir melhor a baleia, dá um grande salto pera o ar, e virando sobre ela de cabeça, a fere com a espada que tem na ponta do focinho, cheia de mui duros, e agudos dentes, ao modo de serra. A qual espada é de osso mui duro, de mais de um côvado de comprido, e mais de meio palmo de largo. Da terra os víamos muitas vezes pelejar no mar de Moçambique, e as naus da Índia os encontram muitas vezes pelejando desta maneira, quando vão ou vêm por esta costa.

**鯨とカジキの闘い**

エチオピアの当沿岸全域には、多くの鯨とカジキがいる。カジキはほぼ鯨並みの大きさだ<sup>22</sup>。この2種の魚類<sup>(ママ)</sup>は互いに遭遇するたび、残虐な闘いを繰り広げる。闘いは大半が水面で行なわれる。そのわけはカジキの側にある。すなわち、カジキは戦うとき、より深く鯨を傷つけるため、一度大きく空中へ飛び出し、頭を反転させ、鯨の上に突っ込んで、鼻先に有する刀(吻)でもって鯨を傷つけるのだ。刀には、まるで鋸のように、きわめて硬く鋭い歯がいっぱいある。その刀の材質は非常に硬い骨であり、長さは優に一コヴアドを超え、幅は半パルモ以上である。彼らがモサンベークの海で戦うのを、我らは陸から幾度も見たものだ。インディア航路のサウ船がこの沿岸を往来する際、彼らがそうして戦っているところに遭遇することもある。

---

<sup>22</sup> 原語 Espadarte. カジキ一般をさす語彙。カジキにはマカジキ、クロカジキ、シロカジキ、メカジキ、バショウカジキなど数種の仲間がいるが、この語彙からは、種別を特定しがたい。ただ、カジキ専門のフィッシングショップ加治木屋が開設する『パーフェクト カジキ マガジン』によると、メカジキは最も大きくなる種類のひとつであるうえ(成魚で全長 4m 以上、体重 300kg 超)、性質非常に獐猛で、船や鯨に突進してゆくものも珍しくない、とのこと。したがって、サントスが描くのは、このメカジキ(英名 Swordfish)と見てまず相違あるまい。



メカジキ。フィッシングショップ加治木屋のウェブサイト『パーフェクト カジキ マガジン』より

### **Azeite de Baleia.**

¶ Na terra firme de Moçambique, entre uns baixos que estão na barra, a que chamam *Luxaca*, deu ãa baleia à costa, e outra em Sofala, na praia chamada Maçanzane, no tempo que eu estava nestas terras, mas nenhũa delas vi inteira, porque quando soubemos que estavam ali, indo pera as ver, já os cafres as tinham quasi desfeitas, e levado a maior parte da carne, a qual é gordíssima, e dela fazem muito azeite, pondo-a a derreter em tigelas, como fazem à banha de porco. Os cafres comem os torresmos que ficam, e com o azeite se alumiam, e comem seu milho. Este azeite cheira mal, mas alumia bem. Dos nós do espinhaço fazem tripeças, em que se assenta ãa pessoa folgadoamente.

### **鯨の油脂**

モサンビークの大陸側，ルシャーカと呼ばれる入り江の内にある浅瀬で，一頭の鯨が海岸に乗り上げた。また，別の一頭が，ソファーラのマサンザーネと呼ばれる浜辺に乗り上げた。いずれも私がこの諸地方にいたときの出来事だ。しかし一頭として完全な姿の鯨はいなかった。というのは，鯨の死骸がそこにあると知って見物に赴いたとき，すでにカフル人がばらばらに解体し，大半の肉を運び去ってしまった後だったからだ。鯨の肉は実に脂肪分に富んでおり，そこから大量の油が採れる。豚の脂身に対してそうするように，彼らは鯨の肉を炙って滴り落ちる油を深鍋に受け止める。焙られてかりかりになり残った鯨の肉を，カフル人は食う。

ジョアン・ドス・サントス『エチオピア・オリエンタル』（1609年、エヴォラ刊）を初版本テキストから訳注する試み

油は明かりを得るのに用い、一番おいしいところ<sup>23</sup>を食べるのだ。鯨の油はひどい悪臭を放つが、照らす力は強い。背骨の関節からは三脚椅子を作り、それには大人ひとりゆったり腰掛けることができる。

### Dizem que as Baleas comem ambar.

¶ São tantas as baleias nesta costa que muitas vezes andam em bandos, particularmente entre as ilhas de Moçambique, que estão na barra, onde vi um dia à tarde entrar polo rio dentro cinco, todas enfiadas, e assi passaram ao longo da fortaleza polo meio do canal, e deram ãa volta dentro na enseada, que está entre a terra firme, e a ilha, e depois se tornaram a sair polo rio fora, como entraram. As baleias não têm âmbar no bucho, como algũas vezes ouvi dizer neste reino a pessoas que disso tinham pouca notícia. Verdade é que dizem os mouros pescadores desta costa que as baleias o comem, e o vomitam mui negro, e mole, como massa, e de ruim cheiro. Mas eu não sei que certeza, ou experiência eles disto tenham, salvo cuidarem que o âmbar preto, que muitas vezes se acha nas praias, languinhoso, e de ruim cheiro, é vomitado da baleia.

#### 噂によると、鯨はアンバル——龍涎香——を食う

この浜に集まる鯨は大変な数に上り、彼らはしばしば群れで行動する。なかんずく入り江の内部に位置するモサンビークの島々の周辺でそうである。そこで、私はある日の午後、五頭の鯨が隊列を組み、河へ入ってゆくのを目撃した。彼らは水路のただ中を泳ぎ、要塞のそばを通過した。そして大陸と島のあいだに位置する入り江の内部で反転、その後、河へ入ってきたときと同様、隊列を組んで河の外へ出ていった。鯨の胃袋にアンバル<sup>24</sup>はない、と、複数の人が言うのを私はこの国でときおり耳にした。が、そのような人はこの件に関し、知見なり情報をきわめて僅かしか持っていないのだ。当海浜に住むムスリムの漁師が述べていること、それこそ真実だ。彼らはこう言う。すなわち鯨はアンバルを食べ、これを真っ黒で、ペーストのように緩く、しかも悪臭のひどい物質に変えて吐き出すのだ、と。しかし、である。この浜辺でた

<sup>23</sup> 原語 *milho*。通常トウモロコシを表わすこの語彙の、ここでの意味は不詳。だが、*PDLP* には、*bom como o milho* という現代語の慣用語が、ポルトガルで用いられるインフォーマルな表現として採録されており、*Fisicamente muito atraente* (ex.: *mulher boa como o milho; ele tem a mania que é bom como o milho*) という語釈と例文が添えてある。肉体的にたいそう魅力的な、の意。敢えて推測を交えて和訳すれば拙訳のようになるうか。

<sup>24</sup> 原綴り *ambar*。古来、稀少性の高い香料として珍重される龍涎香<sup>りゅうげんこう</sup>である。サントスの記す *baleia* (16世紀綴りでは *balea*) は鯨の総称であって、マッコウクジラだけを必ずしも指さない。マッコウクジラは、深海の巨大なイカを常食している。その未消化物——特にイカの硬い嘴、いわゆるカラストンビ——がマッコウクジラの体内で結石化し、体外へ排泄される。これが海面を浮遊したのち、稀に海岸で採取され、麝香<sup>じやくこう</sup>に似た芳香を放つ香料へ生成される。大航海時代、幾人ものヨーロッパ人著述者が、龍涎香の生成要因の謎について議論しているが、サントスの記述もそのひとつ。

びたび見出される、黒く、ぬるりとして、悪臭を放つアンバルが鯨から吐き出されている、という彼らの認識は正しいとしても、彼らがこの件に関し、どの程度確かな知識というか経験を持っているのか、私は知らない。

### **As Baleas cometê as embarcações pequenas.**

¶ Os pangaios que no mar encontram com estas baleias correm muito perigo, porque elas lhes vão no alcance pera pelear com eles, como fazem com os espartes, cuidando (segundo parece) que são outros peixes grandes que vão nadando, e por isso remetem as embarcações, e lhes dão focinhadas, e encontros, o que já algũas vezes aconteceu, particularmente a ùa que vinha dos Rios de Cuama pera Moçambique carregada, em que vinha D. Fernando de Monroy, Capitão que então era desta fortaleza. O qual, perto das ilhas de Angocha, encontrou com ùa baleia que o veio seguindo quasi um dia, e por duas vezes remeteu a embarcação, e de ùa delas lhe deu tal encontro que lhe levou fora o leme, e a teve quasi virada. Vendo-se os que nela iam arriscados, receando que se lhes desse outro encontro os metesse no fundo, foram-lhe fugindo pera terra, com determinação de darem à costa, se a baleia os não deixasse, e juntamente lhe deram grandes brados, e lhe tangeram com ùa bacia de cobre, e bateram com ferros na popa do pangaio. Com o qual estrondo a baleia não tornou mais a encontrá-los, mas de longe os foi ainda seguindo mais de duas horas.

#### **鯨は小さな舟を襲う**

海上で鯨に遭遇したパンガイオ<sup>25</sup>船は、ただならぬ危険に巻き込まれる。鯨はカジキと一戦を交えるときと同じように、パンガイオと戦うため、船とは目と鼻の先の位置を保って泳ぐからだ。鯨はパンガイオを、あたりを泳いでゆく大きな魚だと思い込んでいる(ようだ)。鯨が船と見れば攻撃を仕掛けてくるのは、そのためだ。そして船に頭突きやら体当たりを喰らわせる。これは従来ときおり起こったことであって、とりわけ印象深かったのは、クアマのもろもろの河〔ザンベジ河ロー帯〕からモサンビークへ積荷を満載して航行する船に、生じたことであつた。この船にはドン・フェルナンド・デ・モンローイが乗り組んでいた。その頃、当要塞〔モサンビーク〕のカピタンであつた彼は、アンゴーシャ諸島の近くで、一頭の鯨に遭遇した。鯨はほぼ一日、カピタンの乗る船を追尾してきた。そして二度にわたり船に攻撃を仕掛けてきた。二度のうち一度は、鯨の体当たりが強烈であつて、そのため船の舵<sup>かじ</sup>はさらわれ、船の向きが変わつたかのよう

---

<sup>25</sup> 原綴り Pangayos. *DPLP* は、*Embarcação pequena asiática* (アジアの小型船)と定義する。船種に関し、16世紀ポルトガル語は、かなり多くの一次名詞を有するので、訳語も、必要に応じてパンガイオ船、ナヴィオ船、ナウ船、などとす  
る。

な衝撃が走った。船に乗り組む者たちは、このままでは危ないと判断した。もし鯨からもう一撃体当たりを食らえば、海底に沈められるであろう。そう心配して鯨を避け、陸地のほうへ逃げることにした。もし鯨が放っておいてくれなければ、岸に乗り上げるもやむなし、と覚悟を固めた。と同時に、彼らは鯨に向かって大きな叫び声を上げ、銅製の器を打ち鳴らし、パンガイオの船尾を鉄の道具で叩いた。こうして惹き起こされた大音響によって、鯨は体当たりこそしてこなかったけれど、それでも遠くから二時間以上、追跡をやめなかった。

### **Monstruoso peixe.**

¶ Um peixe deu à costa na ilha de Moçambique, defronte da porta da cerca do nosso convento de S. Domingos, o qual depois que vazou a maré ficou em seco na praia. Os escravos de casa acudiram logo, e vendo o peixe, chamaram os religiosos que o fossem ver, porque era monstruoso, e nunca visto. Tinha este peixe de comprimento dezanove palmos, e no mais grosso do corpo tinha oito em roda. As quais medidas lhe mandámos tomar com ã corda, antes que o cortassem, porque nós fomos dos primeiros que chegámos a ele. Logo se juntou muita gente da ilha neste lugar, e todos começaram a cortar no peixe, e levar pera suas casas. E cuidou eu que pouca gente ficou na ilha que dele não levasse quinhão. Este peixe era da feição de um cação, ou espadarte, mas não tinha espada no focinho, nem menos era baleato, porque estes têm a pele mais preta, e outra feição de cabeça, e a boca muito mais larga. E assi não houve pescador, nem marinheiro que soubesse a casta deste peixe.

### **怪物のような魚**

一匹の魚が、モサンビーク島の岸辺に打ち上げられた。我らが聖ドミンゴス修道院の外壁の扉の正面だ。魚は潮が引いた後、浜でからからの死骸になって取り残されていた。修道院の召使いたちがさっそく駆けつけた。魚を見るや、修道士を呼んだ。見においでなさい、化け物みたいなしろものだ。こんなのは見たことがない、と。魚は長さ一九パルモ（パルモについては前述）、胴回りの一番太いところで、ぐるり八パルモあった。魚のもとにいち早く駆けつけたのは我らであったから、切る前に、綱の尺でもって、その寸法を取っておくよう命じたのだ。ほどなく島民の多くが現場に集まってきた。そして皆が魚を切り取り、家へ持ち帰り出した。切り身を持ち帰らなかった、という人は島内にきわめて僅かであったろう、と私は見ている。魚の外観はカサン〔サメの一種〕もしくはカジキのようであったけれど、鼻先に剣はなく、敢えて言うなら子鯨のようであった。カサンもカジキも、膚はより黒く、異なる面相であり、幅広い口の持ち主であるからだ。というわけで、この魚種を知っている、という漁師や船乗りは、ひとりもいなかった。

Liuro terceiro da Ethiopia Oriental:

& que o lançasse ao rio, como  
cultumaõ sempre fazer. Pos o  
elefante a cabeça no nauio, &  
fez força pera o lançar por  
duas vezes: mas não pode, por  
que o nauio era muito grande,  
& pezado. Polo que pellejou o  
Nayre com elle, chamandolhe  
fraco, & molle, que sendo vas-  
fallo del Rey de Portugal tão  
poderoso, não prestaua pera  
deitar hum nauio ao mar. O  
elefante tomou estas palauras  
em grande afronta, & em caso  
de honra. Polo q̄ remeteo ter-  
ceira vez ao nauio, & pondo-  
lhe a cabeça, fez tanta for-  
ça, que o lançou ao mar, & jun-  
tamente arrebêtou, & cayo lo  
go morto.

Entendẽ  
& fazẽ o  
q̄ o Nay-  
re lhe  
diz.

¶ Hum elefante nouo do ta-  
manho de hũ boy veyo na nao  
S. Simão, em que eu vim da In-  
dia pera Portugal no anno do  
Senhor de 1600. o qual man-  
daua o Conde dom Francisco  
da Gama Viçerey da India pe-  
ra el Rey Philippe nosso fñor.  
Este elefante entendia quanto  
lhe dizia o Nayre, que vinha  
com elle, naõsamente na lin-  
goa em que õs crião, mas tam-  
bem na lingoa Portuguesa. Al-  
gũas vezes me socedeo ir on-  
de estaua este elefante. O qual  
em me vendo, ensinado polo

Nayre, me fazia muitas mesu-  
ras, com a mão peratras, como  
nõs fazemos com o pê, & grã-  
de inclinação cõ a cabeça, &  
metomaua a mão com a trom-  
ba, & a bejaua. Algũas vezes,  
que o Nayre deixaua este ele-  
fante sò, indo pola nao fazer o  
q̄ lhe era necessario, daua tão  
grandes bramidos, & vrros, q̄  
atroaua toda a nao, & choraua  
lagrimas, que lhe corrião dos  
olhos, como hum minino po-  
dia fazer por sua mãy, ou ama.  
Baylaua ao som que o Nayre  
lhe fazia com hum ferro, mo-  
uendo todos os quatro pês, &  
mencando o corpo, & collean-  
do a cabeça, como que gostaua  
do som que lhe fazião. Ou-  
tra mudança fazia tambem, q̄  
era bater com hũa sò mão no  
chão a compasso, & pancada  
do som que lhe fazião, sem er-  
rar passo, com os mesmos me-  
neios do corpo & cabeça, & mo-  
stras de bailar.

Chorão,  
& deitão  
lagrimas

¶ CAPITVLO XVI:

¶ Das Baleas, & Espadartes, que  
ha em toda esta costa da  
Ethiopia.



M toda esta costa  
da Ethiopia ha mui-  
tas Baleas, & Espa-  
dartes, q̄ são quasi  
tãq̄

p. 93v. 左段。Entendẽ & fazẽ o que o Nayre lhe diz. [象はナイルの言いつけを理解し実行する]  
右段。Chorão & deitão lagrimas. [象は泣き、涙を流す]



p. 94. 左段。Briga de Balea cõ Espadarte.〔鯨とカジキの闘い〕

右段。Azeite de Balea.〔鯨の油脂〕/Dizem que as Baleas comem ambar.〔噂によると、鯨はアンバル——龍涎香——を食う〕

cuidarem que o ambar preto, que muytas vezes se achia nas prayas lãguinhofo, & de roim cherro, he vomitado da Balea.

As Baleas comem as embarcações pequenas.

¶ Os Pangayos, que no mar encontraõ com estas Baleas, correm muito perigo, porque ellas lhe vão no alcance pera pellejarem com elles, como fazem cõ os Espadartes, cuidãdo (segundo parece) q̄ faõ outros peyxes grandes, que vão nadãdo, & por isso remetem às embarcações, & lhe dão focinhandas, & encontros, o que já algũas vezes aconteceu, particularmẽte a huã, que vinha dos rios de Cuama pera Moçambi que carregada, em que vinha Dom Fernando de Monroy, capitão q̄ então era desta forteza. O qual perto das ilhas de Angoxa encontrou com huã Balea, q̄ o veyo seguindo quasi hum dia, & por duas vezes remetto à embarcação, & de huã dellas lhe deu tal encontro, q̄ lhe leuou fora o leme, & a teue quasi virada. Vêdo-se os q̄ nella hião arriscados, receando que se lhe desse outro encontro, os metesse no fundo, forãõ lhe fugindo pera terra, com determinação de darẽ à costa, se a Balea os não deixasse, & juntamẽte lhe deraõ grandes brados,

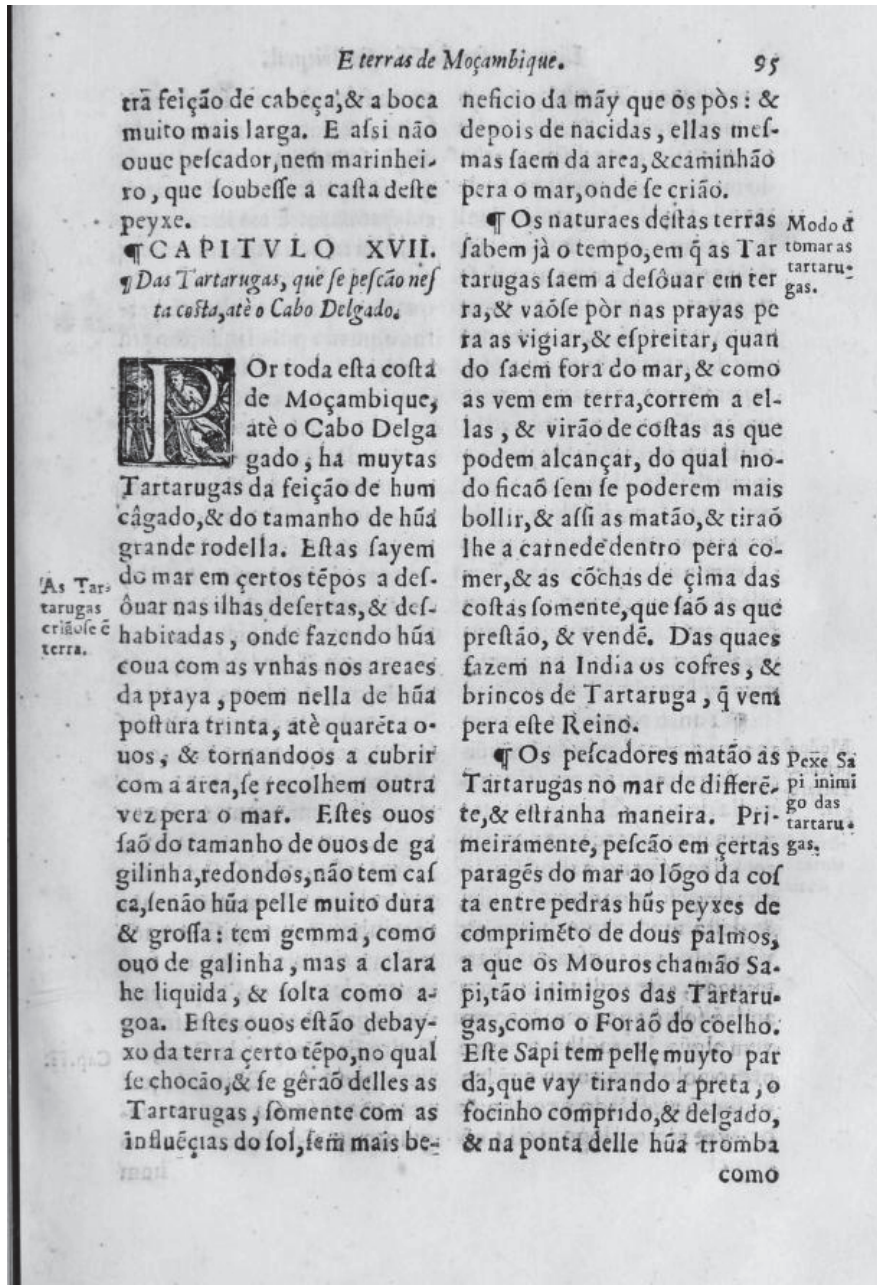
& lhe tangerãõ cõ huã bacã de cobre, & baterã com ferros na poppa do Pangayo. Cõ o qual est rondo a Balea não tornou mais a encontrallos, mas de logo os foi a inda seguindo mais de duas horas.

¶ Hum peixe deu à costa na ilha de Moçambique, defronte da porta da çerca do nosso Cõuento de S. Domingos, o qual depois que vazou a marẽ ficou em secco na praya. Os escravos de casa acudiraõ logo, & vêdo o peixe chamaraõ os religiosos, que o fossem ver, porq̄ era monstruoso, & nõca visto. Tinha este peixe de cõprimẽto dezanoue palmos, & nõ mais grosso do corpo tinha oito em roda. As quaes medidas lhe mandamos tomar cõ huã corda, antes que o cortassem, porque nõs fomos dos primeiros que chegamos a elle. Logo se ajuntou muita gente da ilha neste lugar, & todos começaram a cortar no peixe, & leuar pera suas casas. E cuidõ eu, q̄ pouca gente ficou na ilha, que d'elle não leuasse quinhão. Este peixe era da feição de hum cação, ou Espadarte, mas não tinha espada no focinho, nem menos era Baleato, porq̄ estes tem a pelle mais preta, & outra

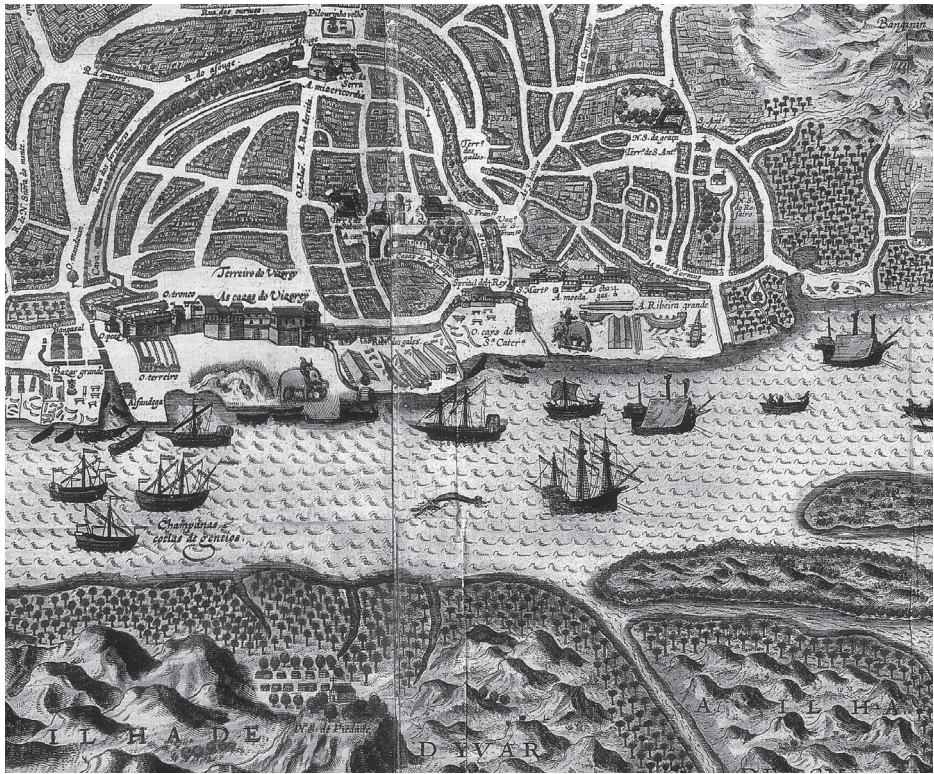
monstruoso peixe

p. 94v. 左段。As Baleas comem as embarcações pequenas。〔鯨は小さな舟を襲う〕  
右段。monstruoso peixe。〔怪物のような魚〕

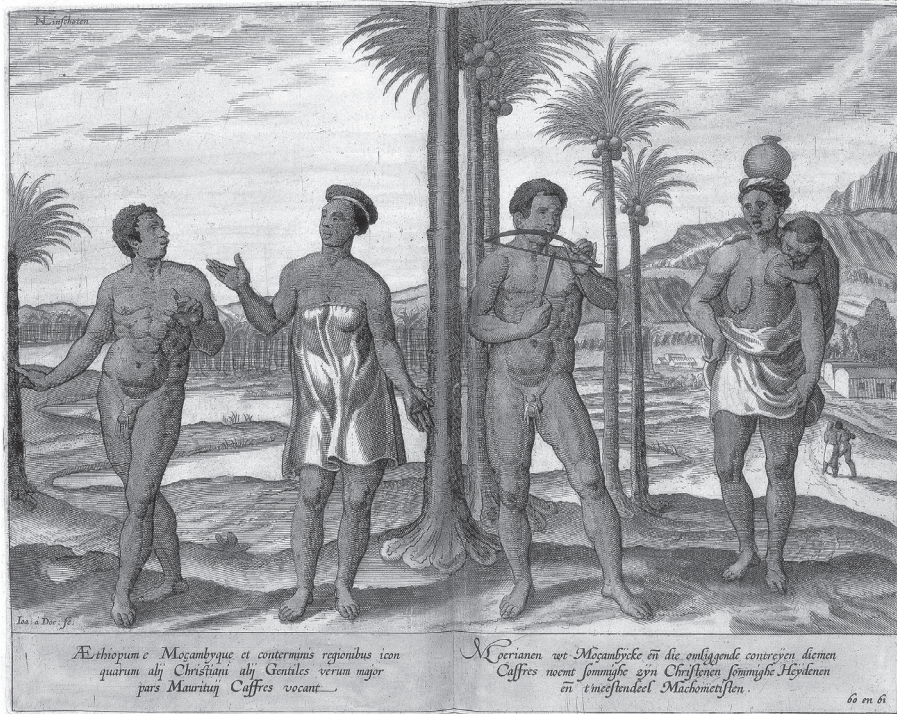




p. 95. 今回の訳載箇所については傍注なし。



オランダ人ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテンの著書『東方案内記』(*Itinerario, Voyage ofte Schipvaert van Jan Huygen van Linschoten naar Oost ofte Portugaels Indien, Amstelredam, 1596*)に収められた A ILHA E CIDADE DE GOA METROPOLITANA DA INDIA..... ([ポルトガル領]インディアの首都であるゴア島にしてゴア市)の図(部分)。OCEANVS INDICVS(インド洋)が右手に描かれ、画面下が北。マンドヴィ河口の Surgideira das naos do Reyno(ポルトガル本国からのナオ[ナウ]船の碇泊地)を東へ遡ると、マンドヴィ南岸にゴア市街が広がる。A Ribeira grandeという呼称でリベイラが描かれ、興味深いことに、第15章(第一部第三卷)でサントスの言及する象の姿が見える。リベイラにはまた幾艘かの船が見える。陸揚げして、より入念な修理を施しているのであろうか。Jan Huygen van Linschoten, *Itinerário, Viagem, ou Navegação para as Índias Orientais ou Portuguesas*, ed. Arie Pos & Rui Manuel Loureiro, Lisboa, CNCDP, 1997 より



リンスホーテン『東方案内記』に収められたカフル人の図。キャプションには、「モサンビークおよび周辺諸地方の黒人たち。彼らをカフル人と呼ぶ。キリスト教徒もいるし、異教徒もいるが、大半はマホメットの信奉者だ」とある。Linschoten, *op. cit.* より